

船原古墳Ⅲ

福岡県古賀市文化財調査報告書 第77集

2022

福岡県古賀市教育委員会

序

福岡県の西北部に位置する古賀市は、東に犬鳴の山並み、西に玄界灘を望む自然豊かな風土に恵まれ、古代には席打駅、近世には青柳宿が置かれるなど交通の要衝として重要な地域でもあります。

本市は、豊かな自然環境とともに貴重な遺跡も数多く存在していますが、なかでも、6世紀末から7世紀初めに築かれた船原古墳は、馬具、武器、武具、農具などの遺物が古墳に伴う土坑から大量に発見されたことで、国の内外から注目されました。

船原古墳は、市域で確認された唯一の前方後円墳であり、土坑から発見された遺物群は、本地域の歴史のみならず、日本列島においても重要な学術的価値を持つことから、平成25年度から船原古墳調査指導委員会の指導のもと九州歴史資料館と協力して計画的に調査を進めています。

本書は、船原古墳に伴う船原古墳2号土坑と船原古墳3号土坑、史跡地における古墳時代以外の遺構の調査報告です。特に、船原古墳2号土坑と船原古墳3号土坑は、船原古墳1号土坑と同じく、馬具や武器が出土している重要な遺構であり、船原古墳の近傍で行われた様々な儀礼を考えるうえでも重要な位置を占めます。

本書が文化財保護の一層のご理解と学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、刊行にご協力いただいた関係各位には、厚くお礼申し上げますとともになお一層のご支援をお願い申し上げます。

令和4年3月31日

古賀市教育委員会

教育長 長谷川 清孝

例 言

1. 本書は古賀市教育委員会が、平成24年度から令和3年度に実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、船原古墳2号土坑、船原古墳3号土坑、古墳時代以外の遺構の調査の記録である。
本書には下記の遺跡の調査記録を収録した。
遺跡名 船原古墳 ふなばるこふん
所在地 福岡県古賀市谷山1166-1、1167、1169、1170-1、小山田506-1、507-1、508-1、529-2、531、532-1
2. 本書に使用した座標系は世界測地系である。
3. 本書に掲載した船原古墳2号土坑、船原古墳3号土坑の実測図は、福岡県古賀市文化財調査報告書第68集『船原古墳Ⅰ』より転載した。
4. 船原古墳2号土坑、船原古墳3号土坑から出土した遺物の実測図は、船原古墳2号土坑は西幸子が行い、船原古墳3号土坑は岩橋由季、西が行った。
5. 船原古墳2号土坑、船原古墳3号土坑から出土した遺物の製図は、船原古墳2号土坑は西が行い、船原古墳3号土坑は西、委託した株式会社とっぺんが行った。
6. 本書に掲載した地形測量図と古墳時代以外の遺構の実測図は、古賀市教育委員会文化課文化財係森下靖士、甲斐孝司、藤野雅基が作成した。製図は坂本直子が行った。
7. 本書に掲載した古墳時代以外の遺構から出土した遺物の実測図は、甲斐、黒木佳代子、小室朋子、委託した株式会社タクトが行った。製図は株式会社タクトに委託した。
8. 本書に使用した遺構の写真は発掘調査時に森下、甲斐、藤野が撮影した。
9. 船原古墳2号土坑、船原古墳3号土坑の遺物写真は、九州歴史資料館が撮影した。
10. 古墳時代以外の遺構から出土した遺物写真は、甲斐が撮影した。
11. 実測図、撮影フィルム、挿図及び写真のデジタルデータは、古賀市立歴史資料館にて保管している。船原古墳2号土坑、船原古墳3号土坑の出土遺物は、現在九州歴史資料館にて保管、保存処理している。古墳時代以外の遺構から出土した土器類は、古賀市立歴史資料館にて保管している。
12. 本書の執筆は、甲斐、西が行った。編集は古賀市教育委員会文化課文化財係が行った。
13. なお、出土遺物は現在も整理事業中であるため、本書の報告内容については今後の調査を経て修正され得るものであることを断わっておきたい。
14. 船原古墳2号土坑の検討では、小郡市都市計画課の宮田浩之氏の助言を受けた。記して感謝申し上げる。

凡 例

1. 本書に使用した標高は海拔高である。
2. 本書に使用した方位は座標北を採用している。
3. 遺物は第3章の各節ごとに番号をつけ、土器・鉄製品等は個別に通し番号にて示す。
4. 遺物観察表の遺物番号は掲載遺物番号と同一である。
5. 遺物観察表の土器等において、口径は口縁部外形を計測している。
6. 貿易陶磁器類の分類及び編年は、太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV』－陶磁器分類編－2000による。

目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査組織	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3節 船原古墳の概要	4
第3章 調査の記録	7
第1節 船原古墳2号土坑	7
第2節 船原古墳3号土坑	27
第3節 その他の遺構	34

挿図目次

Fig. 1 古賀市域 1/25,000地図 (遺跡分布図)	5
Fig. 2 船原古墳の現況地形測量と土坑配置図 (S = 1/500)	6
Fig. 3 船原古墳2号土坑遺構図 (S = 1/40)	8
Fig. 4 船原古墳2号土坑土層断面図及び分析試料採取位置 (S = 1/40)	9
Fig. 5 船原古墳2号土坑遺物出土状況模式図 (縮尺任意。番号はFig.6~14に対応)	10
Fig. 6 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡A (S = 1/2)	13 (折込)
Fig. 7 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡Bその1 (S = 1/2)	15
Fig. 8 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡Bその2 (S = 1/2)	16
Fig. 9 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡C (S = 1/2)	17 (折込)
Fig.10 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡Dその1 (S = 1/2)	19
Fig.11 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡Dその2 (S = 1/2)	20
Fig.12 船原古墳2号土坑出土方形鉄器 (S = 1/2)	21
Fig.13 船原古墳2号土坑出土円形鉄器 (S = 1/2)	22
Fig.14 船原古墳2号土坑出土円形鉄器 (S = 1/2)	23
Fig.15 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡A展開図 (S = 1/3)	24
Fig.16 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡B展開図 (S = 1/3)	24
Fig.17 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡C展開図 (S = 1/3)	25
Fig.18 船原古墳2号土坑出土素環状鏡板付轡D展開図 (S = 1/3)	25
Fig.19 船原古墳3号土坑実測図 (S = 1/20)	28
Fig.20 船原古墳3号土坑出土鉄鏃束① (S = 1/2)	29
Fig.21 船原古墳3号土坑出土鉄鏃束② (S = 1/2)	30
Fig.22 船原古墳3号土坑出土鉄鏃・刀子 (S = 1/2)	31
Fig.23 2号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	34
Fig.24 古墳時代以外の遺構の配置図 (S = 1/400)	35
Fig.25 1号・2号土坑実測図 (S = 1/40)	36
Fig.26 4号土坑出土土器実測図その1 (S = 1/3)	37
Fig.27 4号土坑出土土器実測図その2 (S = 1/3)	38
Fig.28 3号・4号・5号土坑実測図 (S = 1/40)	39

Fig.29	5号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	40
Fig.30	7号・8号・11号・12号土坑実測図 (S = 1/40)	42
Fig.31	12号・14号・15号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	43
Fig.32	25号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	44
Fig.33	13号・14号・15号・16号・18号土坑実測図 (S = 1/40)	45
Fig.34	19号・20号・25号土坑実測図 (S = 1/40)	46
Fig.35	26号・27号・28号・29号・30号土坑実測図 (S = 1/40)	48
Fig.36	32号・33号・35号・36号・37号土坑実測図 (S = 1/40)	50
Fig.37	41号・43号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	51
Fig.38	38号・40号・41号・42号・43号土坑実測図 (S = 1/40)	52
Fig.39	45号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	53
Fig.40	44号・45号・48号・49号土坑実測図 (S = 1/40)	54
Fig.41	46号・47号・50号・51号土坑実測図 (S = 1/40)	55
Fig.42	53号・54号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	56
Fig.43	52号・54号土坑実測図 (S = 1/40)	57
Fig.44	53号・55号・56号・57号・58号土坑実測図 (S = 1/40)	58
Fig.45	57号・58号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	59
Fig.46	62号・63号・64号・66号・67号・71号土坑実測図 (S = 1/40)	60
Fig.47	67号・71号・75号・78号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)	61
Fig.48	70号・73号・75号・78号・79号土坑実測図 (S = 1/40)	63
Fig.49	1号・2号・3号溝状遺構実測図 (S = 1/40)	65
Fig.50	ピット出土土器実測図 (S = 1/3)	66

表目次

Tab. 1	船原古墳3号土坑出土鉄鏃観察表 (空所は計測不可)	33
Tab. 2	滑石製品観察表	67
Tab. 3	土器観察表 1	68
Tab. 4	土器観察表 2	69
Tab. 5	陶磁器観察表	70

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

小野南部地区経営体育成基盤整備事業のほ場整備に伴って実施した平成24年度の発掘調査において、船原古墳の墳丘の外から遺物埋納坑（船原古墳1号土坑）が発見された。古賀市では、平成25年6月から国庫補助事業の重要遺跡範囲確認調査に切り替え、平成27年度まで船原古墳1号土坑他の遺物埋納坑及び隣接する船原古墳の屋外現地の調査を行った。そして、平成27年度にそれらのうち遺構の調査成果をまとめ『船原古墳Ⅰ』として刊行した。

一方、出土遺物の整理、保存処理は、平成26年度以降も継続して行っており、平成30年度に船原古墳1号土坑出土遺物の概要報告編として『船原古墳Ⅱ』を刊行した。

本書は、船原古墳2号土坑、船原古墳3号土坑と史跡地内の古墳時代以外の遺構について報告する。

ここでは、本書に関する各年度の調査の概要を記述する。

平成24年度の調査

船原古墳2号土坑の上層の調査及び船原古墳3号土坑、古墳時代以外の遺構の調査を実施した。

平成25年度の調査

船原古墳2号土坑の遺構検出とトレンチ調査を行った。トレンチ調査では、土層確認を行い、床面から鉄器類が確認された。

平成26年度の調査

鉄器類が確認された船原古墳2号土坑南半分の調査を行った。測量は3次元計測を実施した。出土品整理では、取り上げた出土品のCT画像の解析作業及び分類を中心に行った。

平成27年度の調査

船原古墳2号土坑の3次元計測データを基に遺物出土状況図を作成した。また、『船原古墳Ⅰ』を刊行し、船原古墳2号土坑と船原古墳3号土坑の遺構の報告を行った。

平成28年度の調査

船原古墳3号土坑出土遺物のクリーニングを行った。

平成30年度の調査

船原古墳3号土坑出土遺物の実測を行った。

令和元年度の調査

船原古墳2号土坑出土遺物のクリーニングと実測を行った。また、古墳時代以外の遺構の実測及びデジタルトレースを実施した。

第2節 調査組織

調査主体	古賀市教育委員会
教育長	荒木 隆 (平成24年度～平成26年度) 長谷川 清孝 (平成27年度～)
教育部長	長崎 功一 (平成24年度・平成25年度) 吉村 博文 (平成26年度・平成27年度) 清水 万理子 (平成28年度・平成29年度) 青谷 昇 (平成30年度～令和2年度) 横田 浩一 (令和3年度)
サンフレアこが館長	小河 弘子 (平成24年度・平成25年度) 力丸 宏昭 (平成26年度・平成27年度)
文化課長	星野 美香 (平成28年度・平成29年度) 力丸 宏昭 (平成30年度) 柴田 博樹 (令和元年度～)

文化財係長	金子 由美子 (平成 24 年度・平成 25 年度)
	森下 靖士 (平成 26 年度～平成 29 年度)
	井 英明 (平成 30 年度～)
文化財係 業務主査	森下 靖士 (平成 24 年度・平成 25 年度) 庶務・調査担当
	内村 正敏 (平成 26 年度・平成 27 年度) 庶務担当
	井 英明 (平成 24 年度～平成 29 年度) 庶務担当
	甲斐 孝司 (平成 24 年度～) 庶務・調査担当
主任主事	岩橋 由季 (平成 30 年度～) 庶務・調査担当
主事	岩橋 由季 (平成 28 年度・平成 29 年度) 庶務・調査担当
	大江 道子 (平成 30 年度～) 庶務担当
	西 幸子 (平成 31 年 4 月～令和 3 年 8 月) 庶務・調査担当
臨時的任用職員	西 幸子 (令和 3 年 9 月～) 庶務・調査担当
嘱託	藤野 雅基 (平成 24 年度～平成 27 年度) 調査担当
	立石 真二 (平成 27 年度～平成 30 年度) 庶務担当
調査協力 九州歴史資料館	
保存管理班長	加藤 和歳
保存管理班	小林 啓

調査・整理作業

阿部純子 井上澄敏 井手本茂春 春日宏 春日ゆかり 葛充雄 蒲池みさ緒 上村光子 岸貴美子
 草場寛行 黒木加代子 小室朋子 坂本直子 崎村雄介 高川一生 高園羌 竹原吉秋 田端名穂子
 津曲武義 中溝美昭 中村めぐみ 中山大輔 中山洋治朗 永井幹男 永留邦臣 永松弘恵 長崎正幸
 二宮輝美 二宮寿人 羽江三千代 花田則子 花田昌代 馬場孝子 古澤由美子 前野周二 三井寛子
 村山勝治 森鋳八郎 八幡義則 山田幹裕 吉村ハナ子

※所管課は、平成 28 年度の古賀市における組織改編に伴い「サンフレアこが」から「文化課」に変更した。

平成 25 年 8 月に発足した谷山北地区遺跡群文化財調査指導委員会（令和 3 年度に船原古墳調査指導委員会と名称を改変した。）からは、その後、毎年 3 回程度指導委員会を開催し、調査方針、方法等に関するご指導をいただいている。委員は下記のとおりである。

委員長 田中良之 九州大学教授（平成 25 年 8 月～平成 27 年 3 月）
 今津節生 九州国立博物館博物館科学課長（平成 28 年度から奈良大学教授）（平成 27 年 7 月～）
 副委員長 今津節生 九州国立博物館博物館科学課長（平成 25 年 8 月～平成 27 年 6 月）
 桃崎祐輔 福岡大学教授（平成 27 年 7 月～）
 委員 桃崎祐輔 福岡大学教授（平成 25 年 8 月～平成 27 年 6 月）
 委員 重藤輝行 佐賀大学教授（平成 25 年 8 月～）
 委員 辻田淳一郎 九州大学准教授（平成 26 年 7 月～）

※田中良之氏が平成 27 年 3 月にご逝去されたことから、新たに辻田淳一郎氏に委員をお願いすることとなった。

第 2 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境

古賀市は、福岡市の東北約 17 k m、南西で糟屋郡新宮町と久山町に北東で福津市に、北東で宮若市に隣接する。東西約 11.1 k m、南北約 7 k m、面積は約 43 k m²である。

古賀市北東部には犬鳴山地の山々がそびえ立ち、そこから海岸へ向かって派生する丘陵は福津市境（旧

宗像郡境)、古賀市中央部、新宮町境と大きく3か所に渡って海岸側に張り出している。主要な河川は、市中央部を西に流れる大根川、市南西部を北西に向かって流れる青柳川の両水系があるが、最終的には市域中央南寄りの海岸近くで合流し花鶴川となって玄界灘へ注ぐ。市域はこれらの河川によってほぼ3分される。大根川上流では同水系として、薦野川、米多比川があり、青柳川には市域に源流を持つ薬王寺川、谷山川、小山田川が合流する。

船原古墳は古賀市の中央南東寄りの内陸部に位置する。海岸からの直線距離は約4.7 km前後である。遺跡は谷山川の東岸に川とほぼ平行して伸びる丘陵先端部に所在する。この丘陵は犬鳴山系から派生しており、基盤は花崗岩と思われ、表層は花崗岩バイラン土である。

船原古墳の西側は谷山川の段丘となっており、川の氾濫原と考えられる。古墳時代以外の遺構の発掘調査では、遺構面から地下1 m以上にわたって砂礫層と粘質土が相互に堆積していることが確認された。船原古墳が築造される丘陵は、花崗岩バイラン土を主体とする粘質土層が基盤層となっている。砂礫層の形成は、遺物埋納坑調査時にこの砂礫層中から縄文土器とみられる破片が出土したことから、少なくとも弥生時代以前のものと考えられ、おそらくは、谷山川の氾濫によって形成されたものと考えられる。

第2節 歴史的環境

ここでは、本書で取り上げる船原古墳2号土坑、船原古墳3号土坑と古墳時代の遺構に関連する古墳時代と中近世について、市内の遺跡を概観したい。

市内で確認された古墳時代前期に遡る可能性がある薬王寺の深町古墳群がある。円墳の1号墳、方墳の2号墳と壺棺が1基あり、築造順は1号墳→2号墳→壺棺と報告されている。築造時期は4世紀代に遡ると考えられる。また、集落としては、住居から4世紀前半代の遺物が出土した新原の太田町遺跡がある。

5世紀代に入ると、市内で古墳の築造数が増加する。大根川下流の右岸では、径6～20 mほどの円墳群から成る千鳥古墳群、同じく円墳から成る花見古墳群がある。千鳥21号墳からは鉄刀・剣類や玉類、千鳥22号墳からは鉄剣、鉄鏃、金銅製垂飾などの出土がみられる。また、花見1号墳では銅釧、鈴、鉄刀・剣、鉄斧、鉄鎌、花見2号墳では玉類や琴柱形石製品、櫛、花見3号墳では鏡、玉類、鉄斧の副葬が確認されている。この地域の集落には流遺跡がある。花鶴川左岸では永浦古墳群が造営される。永浦4号墳では、鉄刀・剣、鉄矛、鉄鏃、三角板鋌留短甲、横矧板鋌留眉庇付冑など大量の武器・武具が出土している。青柳川上流では、馬渡東ヶ浦遺跡F地区で古墳群が造営されている。副葬品は鉄剣、鉄鏃などの鉄製武器類を中心とする。大根川左岸～青柳川右岸には川原庵山古墳群が位置し、最も多くの副葬品が出土した8号墳では、鉄斧、鉄製鋏先、鉄鉤、鉄矛などが出土している。このように5世紀代には古墳築造数が増加し、各地で古墳群が造営され始める。

6世紀代には、大根川右岸で花見古墳が築造される。主体部からは、金銅製馬具類、銅椀、金銅装刀子などを含む豊富な副葬品が出土している。花鶴川左岸では唐ヶ坪・浦口古墳群、楠浦・中里古墳群が造営される。楠浦・中里A1号墳からは、頭椎大刀と推定される大刀が出土している。青柳川上流では瓜尾・梅ヶ内古墳群が形成され始める。径10数mの円墳から成る古墳群で、27号墳からは金銅装の鏡板が出土している。

以上のように、5世紀以降古賀市各地で継続的に古墳が築造されており、かつ各地域に突出した副葬品を有する古墳が存在したということが言える。ただし、船原古墳以外に古賀市域では前方後円墳は見られていない。また、船原古墳土坑出土品と市域の他の古墳の副葬品とを比較すると、船原古墳土坑出土品は質・量共に抜きん出たものであることは特筆されよう。

一方、市域における中近世の状況は遺跡の調査件数が少なく、よく分かっていない。古くは、薬王寺の山の中腹に古代山岳寺院である薬王寺廃寺があり、造営時期は10世紀から12世紀とされている。また、鹿部山遺跡群内の鹿部山経筒の銘文中には、永久元年(1113)と「席内院」の点刻が見られ、中世には荘園が展開していたと考えられる。玄界灘沿岸部に近い美明の鹿部田淵遺跡群では、12世紀代から13世紀代の遺構及び包含層から貿易陶磁器が大量に出土している。遺構は大きく2時期に分かれ、12世紀代に墓域が形成され、13世紀には土倉と考えられる大型の土坑及び住居跡が確認されている。谷山には谷山谷別

当遺跡があり、12世紀代の遺跡と考えられている。薦野では糸江・岸田遺跡があり、韃羽口が出土している。時期は12世紀後半と14世紀前後と捉えられている。近世には黒田氏が筑前に入国し、慶長10年(1605)から唐津街道筋の青柳に青柳宿が整備される。川原屋敷遺跡は青柳宿に関連する遺構が確認され、出土する遺物から18世紀代までのものと想定される。

第3節 船原古墳の概要

船原古墳は福岡県古賀市谷山・小山田に所在する前方後円墳である。築造時期は墳丘から出土した土器から6世紀末から7世紀初頭と考えられる。主体部は全長9.99mの複室構造の横穴式石室である。墳丘規模は、前方部の先端が削平を受けて正確な全長は判らないが、現状では墳長37.4m以上、後円部径24.8m、前方部長12.6m以上となる。段築はなく、葺石と周溝は有していない。墳丘主軸は座標北から39°西に傾いている。墳頂部は盛土を行い、墳裾は地山削り出しにより整形している。前方部の先端部に墳丘の高まりがなく、地形がなだらかに下る。平成8年度に実施した調査では、調査前に表土剥ぎを行っているため、表土剥ぎによりある程度盛土を除去している可能性も残るが、当初より前方部は低かったと考えられる。墳丘の南東には区画の溝があり、2号墳との境として丘陵尾根を切断するように掘り込んでいる。形状は直線的で墳丘を周らない。墓道は一部階段状に段差をもちながらも羨道部から土坑群側に緩やかに下っている。なお、平成27年度に調査したTr15では、基盤層が水田の土手により削平を受けていることが分り、丘陵裾部に位置する土坑群も水田の造成により遺構上面が削平を受けているものと考えられる。

横穴式石室が開口する墳丘南西側の水田では、船原古墳に伴うと考えられる土坑7基を確認した。土坑は5基を調査し、3基から金属遺物が出土した。土坑群は、大きく2群に分かれる。1号土坑、3号土坑、5号土坑、6号土坑、7号土坑は後円部側に位置し、墳丘主軸と長軸の傾きを同じくする。2号土坑と4号土坑は前方部側に位置し、前方部の墳裾の傾きを意識した遺構配列と長軸の傾きをしている。また、2号土坑、4号土坑、5号土坑から出土した須恵器は、墳丘の北西側くびれ部周辺と溝から出土した須恵器と接合している。

金属遺物は、1号土坑、2号土坑、3号土坑から出土している。2号土坑と3号土坑は本書で報告するため、ここでは1号土坑のみ記述する。1号土坑は、長方形プランの一端が方形に広がる逆L字形を呈し、長さ5.3m、幅は0.8mから2.3m、深さ0.8m程である。土坑床面も含めて層序に切り合い関係はなく、遺物の出土状況に不自然な乱れも確認できなかったことから、1度の掘削によって形成された土坑に遺物を置いた後、埋め戻したものと考えられる。壁体はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は一部床面から浮いているものを除き、大半が床面に置かれている。遺物によっては重なり、積み上げて置かれているものもある。令和3年度までに確認できた遺物は、馬具、武器、武具、農工具等がある。各遺物の点数や詳細は『船原古墳Ⅱ』を参照されたい。

主要な参考文献

「福岡県粕屋郡古賀町花見古墳」『日本考古学年報第8集』1973 日本考古学協会

『鹿部山遺跡』1973 古賀町文化財研究会

『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』1973 福岡県教育委員会

『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXⅠ』1978 福岡県教育委員会

『花見遺跡』古賀町文化財調査報告書第4集 1984 古賀町教育委員会

『左谷古墳群』古賀町文化財調査報告書第7集 1987 古賀町教育委員会

『南原古墳群』古賀町文化財調査報告書第8集 1989 古賀町教育委員会

『薬王寺廃寺』古賀市文化財調査報告書第20集 1995 古賀市教育委員会

『永浦遺跡』古賀市文化財調査報告書第35集 2004 古賀市教育委員会

『楠浦・中里遺跡』古賀市文化財調査報告書第38集 2004 古賀市教育委員会

『古賀市鹿部土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』古賀市文化財調査報告書第46集 2007 古賀市教育委員会

『川原屋敷遺跡』古賀市文化財調査報告書第51集 2008 古賀市教育委員会

『谷山谷別当遺跡』古賀市文化財調査報告書第57集 2010 古賀市教育委員会

『糸江・岸田遺跡』古賀市文化財調査報告書第 60 集 2011 古賀市教育委員会

『馬渡・東ヶ浦遺跡 3』古賀市文化財調査報告書第 61 集 2011 古賀市教育委員会

『青柳篠林地区遺跡の埋蔵文化財調査』古賀市文化財調査報告書第 66 集 2015 古賀市教育委員会

『船原古墳 I』古賀市文化財調査報告書第 68 集 2016 古賀市教育委員会

『船原古墳 II』古賀市文化財調査報告書第 73 集 2019 古賀市教育委員会



Fig.1 古賀市域 1/25,000 地図 (遺跡分布図)

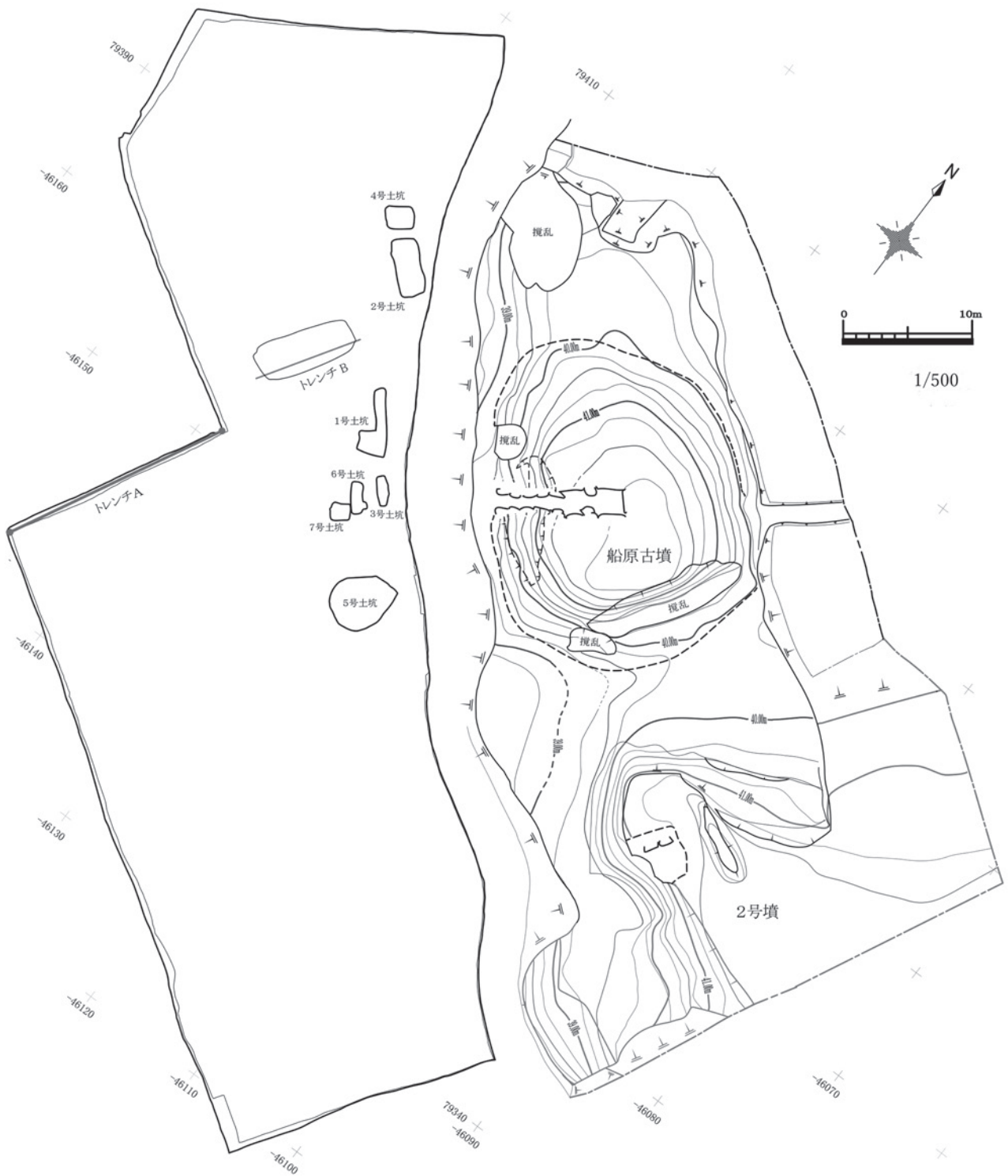


Fig.2 船原古墳の現況地形測量と土坑配置図 (S=1/500)

第3章 調査の記録

第1節 船原古墳2号土坑

第1項 遺構および出土状況

船原古墳の前方部西側に位置し、船原古墳4号土坑と並ぶ。主軸方向は前方部墳裾の形状を意識したと思われ、N-47°-Wを測る。船原古墳1号土坑からは北北西に7.4m離れる。平成24年度の発掘調査した土坑上層の1層には、破碎した須恵器大甕等が一括廃棄された状況で埋まっていた。平成25年度に下層の遺構検出およびトレンチ調査を行い、床面から鉄器類が確認された。そして、平成26年度に鉄器類が観察された遺構南半のみを調査し、遺物の取り上げを行った。

平面形は長方形で、長軸4.58m、短軸1.95m、深さ0.8mを測る。底面は平坦で、壁体は直線的あるいは内湾気味に立ち上がる。

埋土は下層の暗褐色弱砂質土である19層、20層から鉄器類と有機質痕跡が検出された。13層～18層は、層がレンズ状に堆積し自然堆積を示すことから、後世に沈下した土層と考える。その上に3層～12層が落ち込むようにレンズ状に堆積する。5層および6層は地山由来の土層である。最上層の1層は最終埋没土で、黒褐色弱粘土層から土器類が出土した。

1層から出土した土器類は、『船原古墳I』（古賀市教委2016）で既に報告しているので、ご参照願いたい。本稿では、平成26年度に取り上げを行った鉄器類の報告を行う。また、鉄器類と一緒に、紐状の有機質が蛇行しながら床面を這うようにして検出されているが、この有機質痕跡の報告は、再度別稿にて行う。

出土した鉄器は、環状鏡板付轡4点、方形鉄器4点、円形鉄器8点で、遺構南半の南東寄りから出土している。遺物は全て床面に堆積した19層の暗褐色弱砂質土から出土し、4点の轡同士は重なることなく、若干の距離を開けて出土した。

以下、北から出土した順に轡を、轡A、轡B、轡C、轡Dと呼び出土状況を報告する。

轡Aは引手を南北に広げた状態で出土し、北側の引手には円形鉄器2点（Fig.14-19、20）と方形鉄器1点（Fig.12-10）が、南側の引手には円形鉄器1点（Fig.13-14）、方形鉄器1点（Fig.12-11）が隣接して出土した。

轡Bは轡Aの南隣りから、銜を東西方向に伸ばした状態で出土した。東側の環状鏡板には、円形鉄器1点（Fig.13-15）が隣接する。

轡Cは轡Bの南隣りから、引手を東西方向に広げて出土した。東側の環状鏡板、および引手の下から円形鉄器3点（Fig.13-16、17、Fig.14-18）、方形鉄器1点（Fig.12-13）が出土した。また、轡Bと轡Cの間から、方形鉄器1点（Fig.12-12）が出土した。

最も南側から出土した轡Dは、引手を交差させた状態で出土し、銜の脚金と引手の間から円形鉄器1点が出土した。

また、各轡の間からは、紐状の有機質の痕跡が蛇行して這うような状態で出土している。鉄器類が出土した19層の土壌は、リン・カルシウム分析の結果、部分的にリンの含有量が高い箇所が確認されている⁽¹⁾。

土坑の時期は、土坑上層から出土した一括土器から、上限を6世紀末～7世紀初頭と捉える。

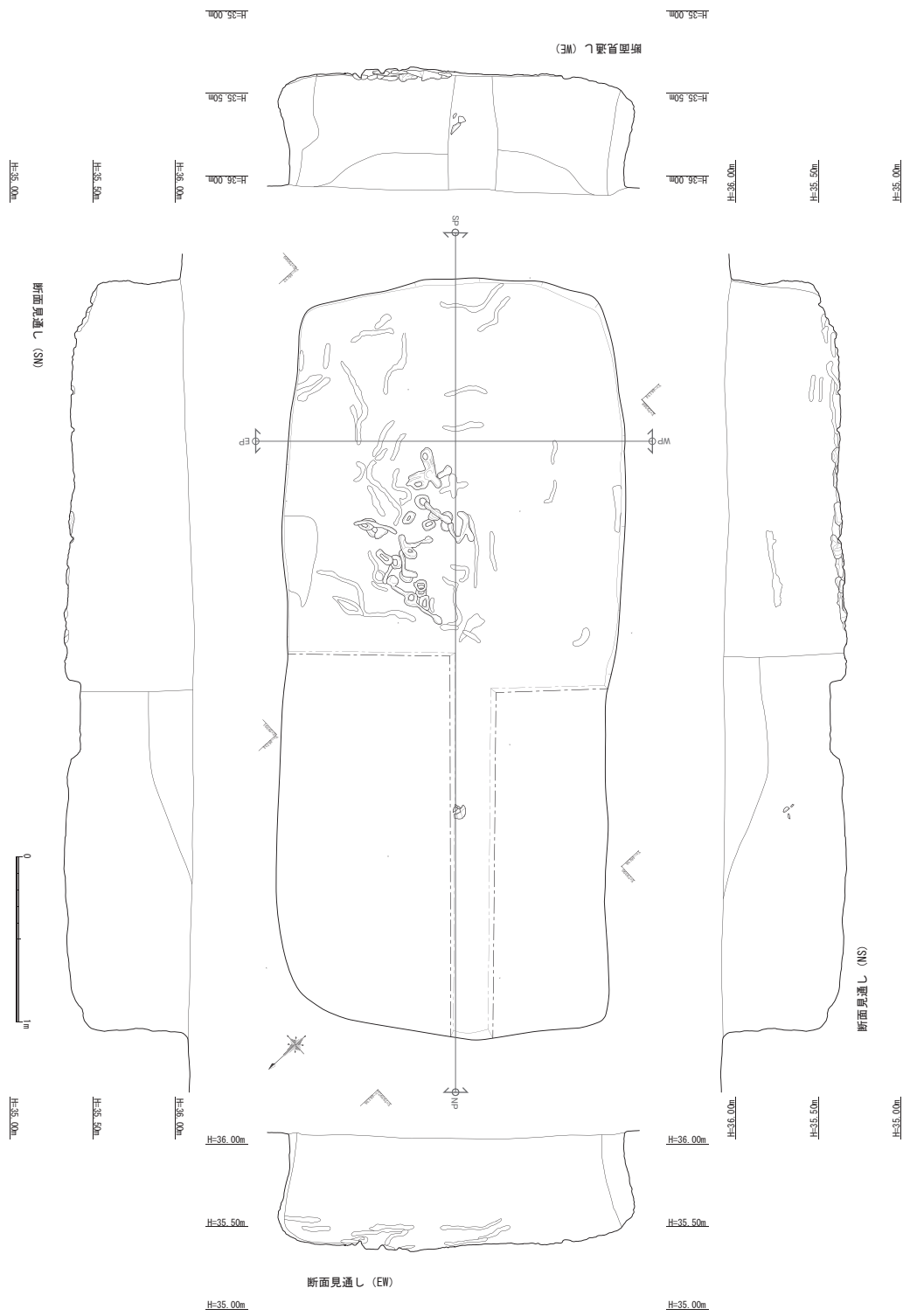


Fig.3 船原古墳 2号土坑遺構図 (S=1/40)

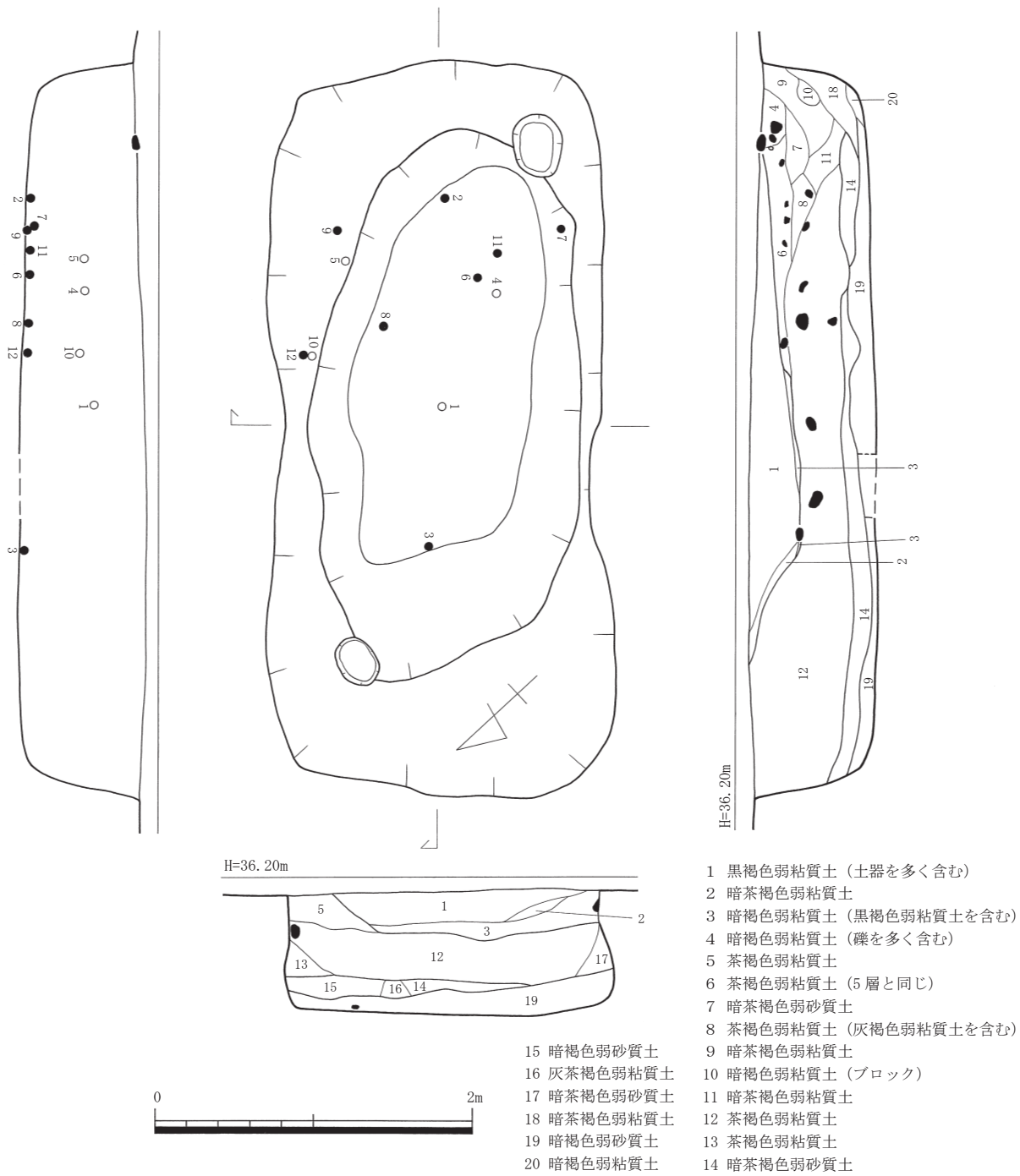


Fig.4 船原古墳 2号土坑土層断面図及び分析試料採取位置 (S=1/40)

(註)

(1) 『船原古墳1』の「船原古墳2号土坑におけるリン・カルシウム分析」(pp54-55)で掲載した図1 現況地形計測図の表記に間違いがありましたので、下記の図の通り訂正します。

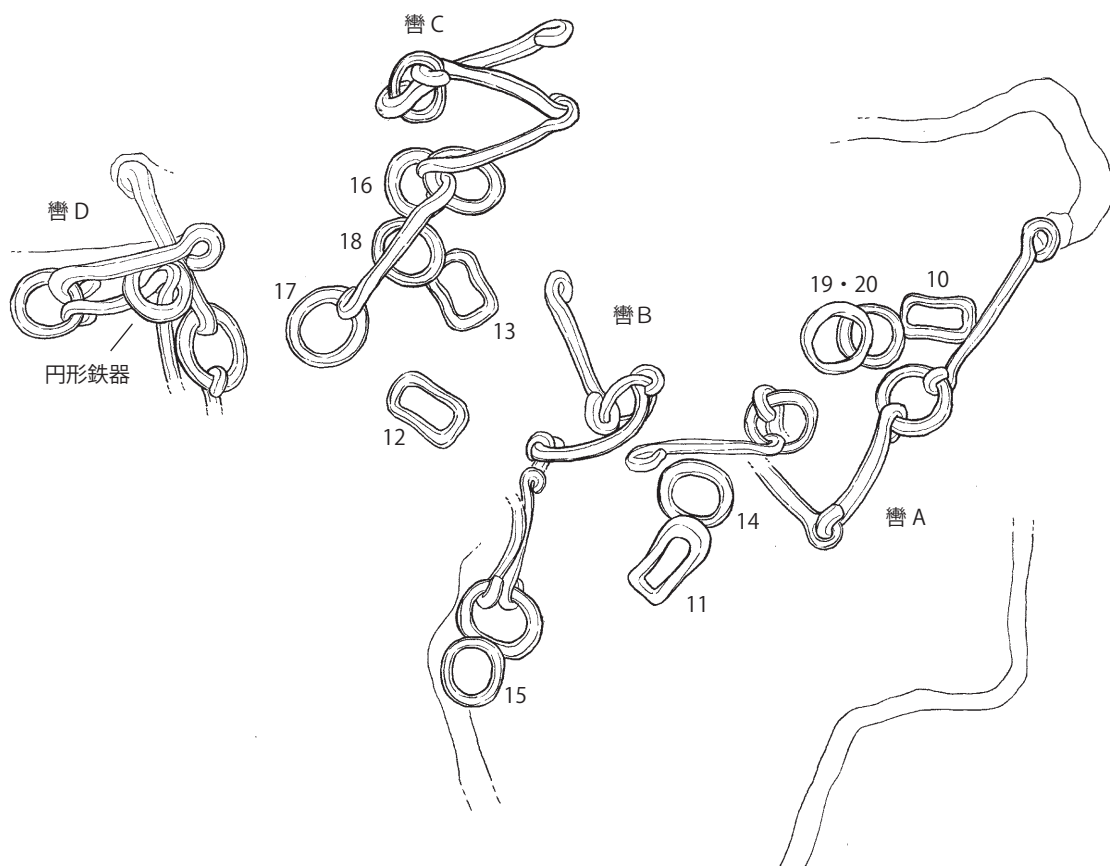
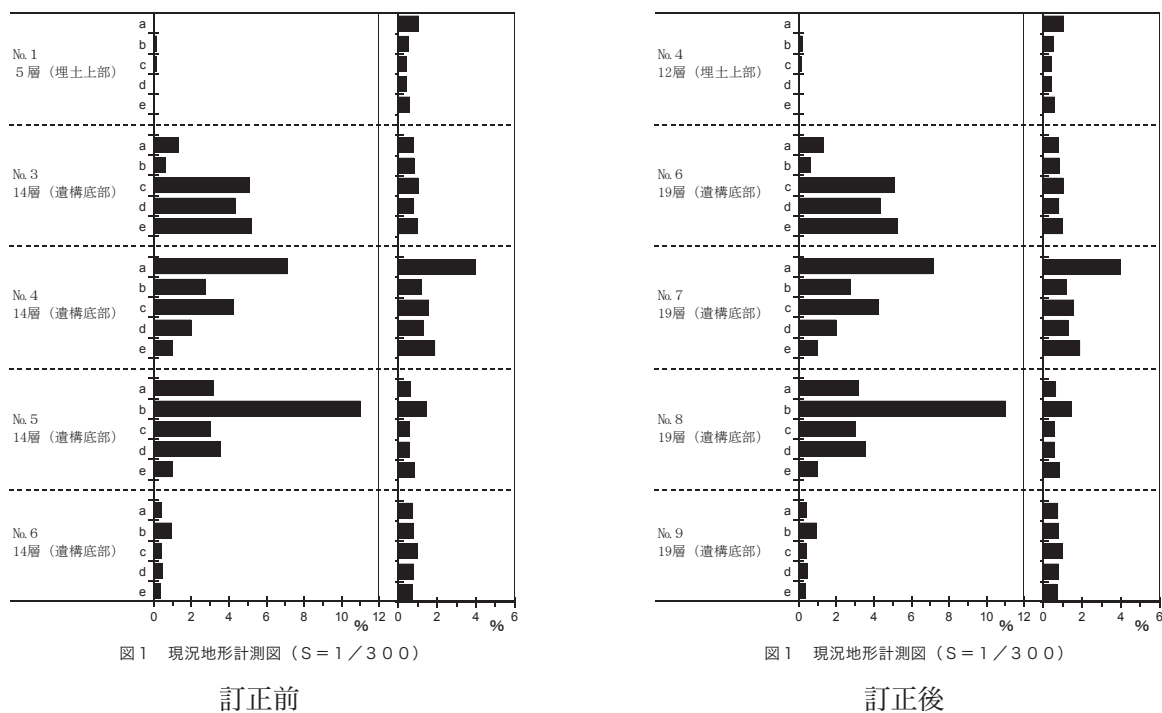


Fig.5 船原古墳2号土坑遺物出土状況模式図(縮尺任意。番号はFig.6~14に対応)

第2節 出土遺物

轡A (Fig.6-1、2)

1は鉄製の素環状鏡板付轡片で、素環状鏡板と一方の引手、および二連銜の一方ともう一方の途中までが組み合っている。欠損部分で2と接合し、完形を成す。残存長35.2cm、残存幅18.3cm、厚さ6.3cm。銜・引手端部を蕨手状に曲げて、各パーツと連結する。銜と引手は各々が別に鏡板と連結する。引手は長さ18.8cm、銜は長さ15.5cm。引手は直線状を成すが、銜は緩やかに湾曲する。表面に面繫や引手などの有機質痕跡は確認できない。

2も鉄製素環状鏡板付轡片で1と接合する。素環状鏡板と一方の引手、および二連銜のもう一方の途中までが残存する。残存長26.3cm、残存幅8.9cm、厚さ3.9cm。銜・引手の端部を蕨手状に曲げ、各々を別々に鏡板と連結する。引手外環も端部は蕨手状に曲げるのみ。引手は長さ21.5cmと長く、直線状を成す。銜は緩やかに湾曲する。明確な有機質痕跡は見られない。

轡B (Fig.7-3、Fig.8-4)

3は鉄製の素環状鏡板付轡片で、素環状鏡板と一方の引手、および二連銜の一方ともう一方の途中までが組み合っている。欠損部分で4と接合し、完形を成す。残存長19.0cm、残存幅18.4cm、厚さ5.8cm。銜・引手端部を蕨手状に曲げて、各パーツと連結する。また、銜と引手は各々別々に、鏡板と連結する。引手は直線状を成すが、銜は緩やかに湾曲する。表面に面繫や引手などの有機質痕跡は確認できない。

4も鉄製の素環状鏡板付轡片で、3の銜欠損部分と接合する。素環状鏡板と一方の引手、および二連銜のもう一方の途中までが残存する。残存長13.0cm、残存幅14.7cm、厚さ9.7cm。銜と引手端部は蕨手状に曲がり、各々別々に鏡板と連結する。引手は直線状を成すが、銜は緩やかに湾曲する。有機質痕跡は見られない。

轡C (Fig.9-5)

鉄製の素環状鏡板付轡で完存する。残存長24.5cm、残存幅28.3cm、厚さ15.8cm。銜・引手の各端部は蕨手状に曲がり連結する。また、銜と引手は別々に鏡板と組み合う。引手はいずれも直線状を成すが、銜はいずれも緩やかに湾曲する。表面に、面繫や手綱等の有機質痕跡は確認できない。

轡D (Fig.10-6、Fig.11-7～9)

6は鉄製の素環状鏡板付轡で、素環状鏡板と一方の引手、および二連銜の一方と片側途中までが組み合っている。また、銜の卸金部分と引手の間に別の円形鉄器が挟まって錆着している。残存長16.9cm、残存幅18.5cm、厚さ9.2cm。銜と引手端部は蕨手状に曲がり各パーツと連結する。銜と引手はそれぞれ別々に鏡板と組み合う。引手は長さ18.0cm、銜は16.0cm。また、引手は直線状を成すが、銜はいずれも緩やかに湾曲する。表面に明確な有機質痕跡は確認できない。

7は6と対になる素環状鏡板片と引手である。鏡板片は8、9の鏡板残欠と組み合わせ1つの素環状鏡板を形成するが、いずれも接合箇所は確認できない。引手は直線状で、両端部は蕨手状に曲げられる。引手内環は鏡板と連結する。また長さは19.4cmと長い。

8は6につながる銜先環片と素環状鏡板片である。6の銜片の銜先環だが、直接接合はしない。また素環状鏡板片も8、9の鏡板片と同一個体だが、接合箇所は確認できない。銜端部は蕨手状に曲げられて鏡板と組み合う。また、銜は緩やかに湾曲する。

9は7、8の鏡板片と同一個体を成す素環状鏡板の破片である。7、8と接合はしない。断面楕円形。

方形鉄器 (Fig.12-10～13)

10は轡Aの引手に近接して出土している。残存長8.3cm、残存幅5.1cm、厚さ0.9cmで、長方形を呈するが、下辺に向かうにつれ若干窄まり、また右辺のみわずかに内湾する。鉄棒断面は円形。表面に有機質痕跡は見られない。

11は轡Aと轡Bの間から円形鉄器と重なって出土している。残存長9.9cm、残存幅5.3cm、厚さ0.8cm。長方形を呈するが、上辺は緩やかなアーチ状を描き、下辺は右肩下がりに歪んでいる。また、左右辺とも中央で内湾し、くびれを形成する。鉄棒断面は円形。有機質痕跡は確認できない。

12は轡Bと轡Cの間から出土している。残存長7.6cm、残存幅5.3cm、厚さ0.8cmで、くびれやゆがみなく、長方形を呈する。鉄棒の断面は隅丸方形を呈する。環の内側に一部、皮革状の有機質痕跡が見られるか。

13は轡Bと轡Cの間から、円形鉄器と重なって出土している。残存長7.7cm、残存幅4.9cm、厚さ0.8cmで長方形を呈するが、左右辺が中央で内湾し、くびれを形成している。鉄棒断面は円形。表面に有機質痕跡は見られない。

円形鉄器 (Fig.8-14～16, Fig.9-17～20)

14は轡Aと轡Bの間から、方形鉄器と重なって出土している。残存長7.2cm、残存幅6.4cm、厚さ0.7cmで完存。鉄棒の断面は楕円形。表面に有機質痕跡は見られない。

15は轡Bの素環状鏡板と重なって出土している。残存長7.2cm、残存幅6.8cm、厚さ0.6cm。鉄棒断面は楕円形。表面に有機質痕跡は見られない。

16は轡Cの引手内環の下から重なって出土している。残存長6.6cm、残存幅6.9cm、厚さ0.6cm。鉄棒断面は隅丸方形。表面に有機質痕跡は見られない。

17は轡Cの引手外環の下から重なって出土している。3片に分かれている。推定残存長7.4cm、推定残存幅7.1cm、厚さ0.7cm。鉄棒断面は隅丸方形。表面に有機質痕跡はない。

18は轡Cの引手の下から重なって出土している。3片に分かれている。推定残存長6.4cm、推定残存幅6.8cm、厚さ0.7cm。鉄棒断面は隅丸方形。表面に有機質痕跡は見られない。

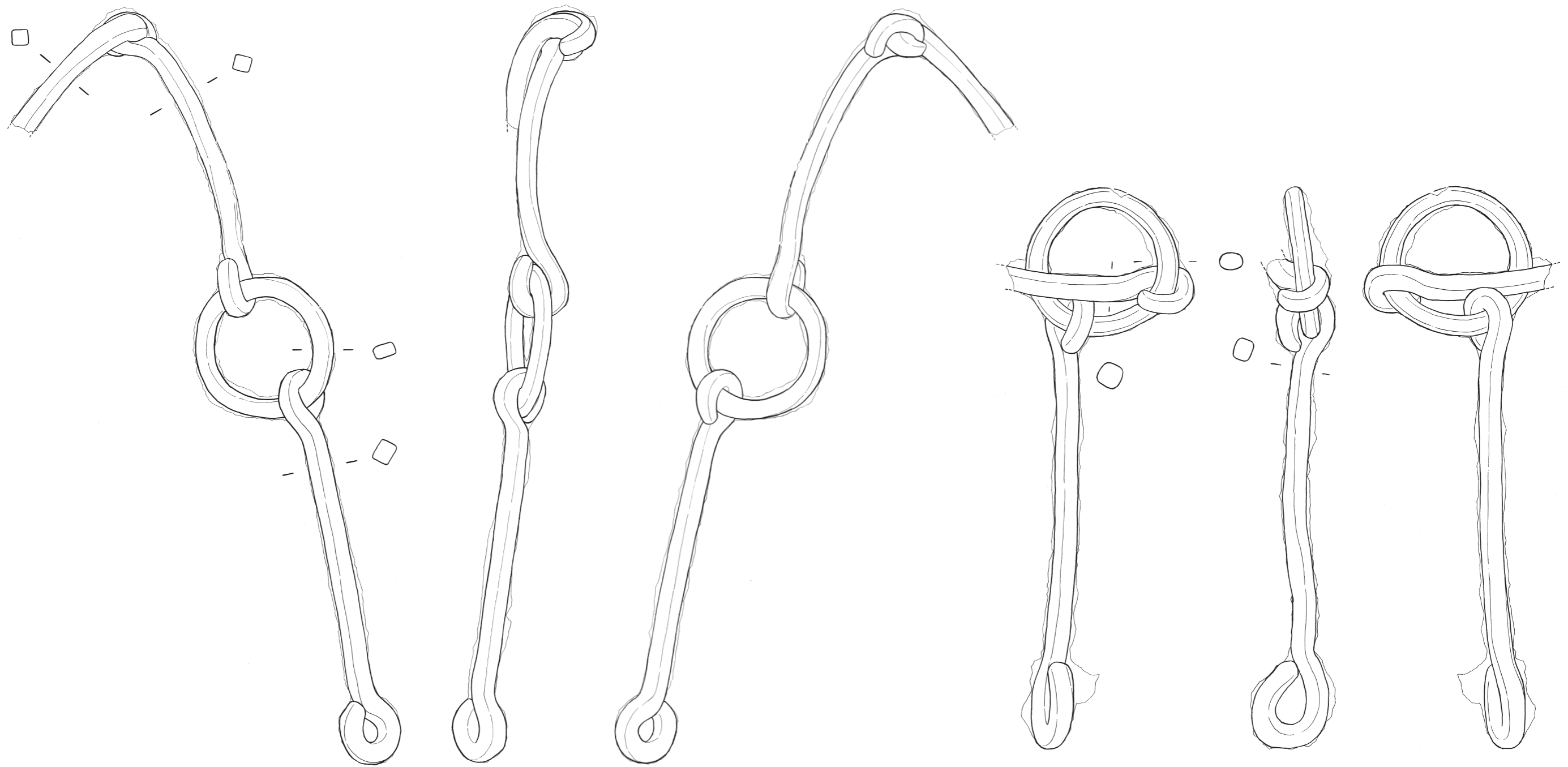
19・20は2つの円形鉄器が錯着している。轡Aの間から方形鉄器と重なって出土している。法量は、上に乗った19が、残存長6.8cm、残存幅7.2cm、厚さ0.7cm、下の20が、残存長6.4cm、残存幅6.4cm、厚さ0.7cm。いずれも鉄棒の断面は隅丸方形を呈する。有機質痕跡は見られない。

小結

1. 馬具

船原古墳2号土坑から出土した4点の轡は、全て素環状鏡板付轡である。特徴を整理すると、鏡板に銜と引手が別々に連結される「銜・引手別連法」で、銜と引手の端部は全て蕨手状に曲げているだけで鍛接はされていない。ここまでは古墳時代の素環状鏡板付轡にみられる特徴だが、銜が湾曲すること、銜の長さが15cm近いこと、轡A・轡Dの引手の長さが20cm近いことは、一般的な古墳時代の轡には見られない特徴である。

現代の乗馬用馬具には「カーブ（アール）ビット」と呼ばれる銜身が緩やかにカーブする主流の銜があるが、これは馬の口蓋に合うように、馬がくわえやすいよう考慮したもので、馬の生物工学的な機能面を重視した銜である。しかし、古墳時代の轡、さらには古代の轡にまで含めても、日本で出土した轡のうち銜が湾曲するものは滅多になく、管見の限りでは唯一、兵庫県行者塚古墳出土の長方形鏡板付轡に銜の湾曲が見られた。ただ、行者塚古墳出土轡の銜は3條振り技法の一連銜



1

2

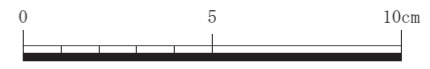


Fig.6 船原古墳 2 号土坑出土素環状鏡板付轡 A (S=1/2)

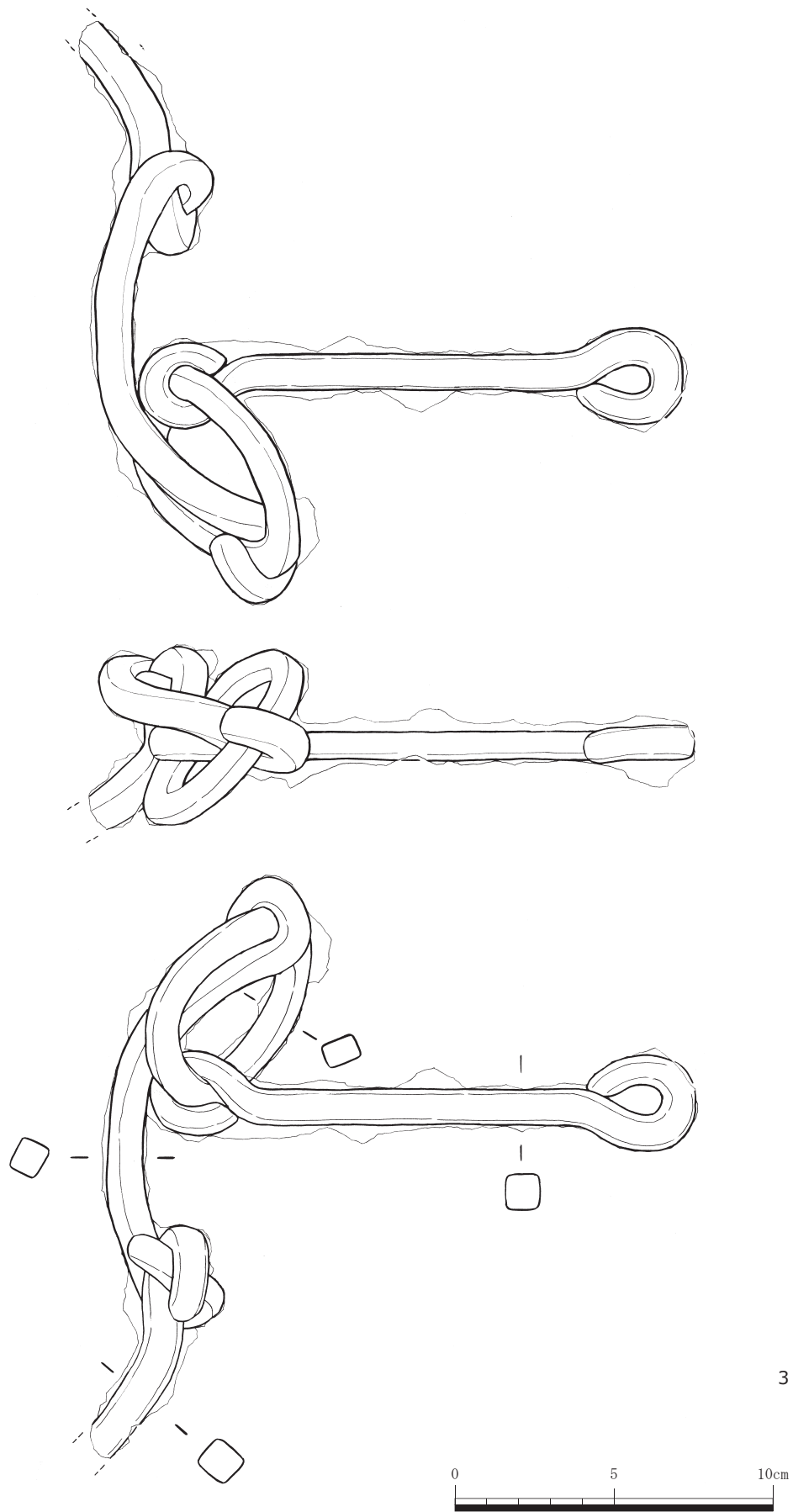
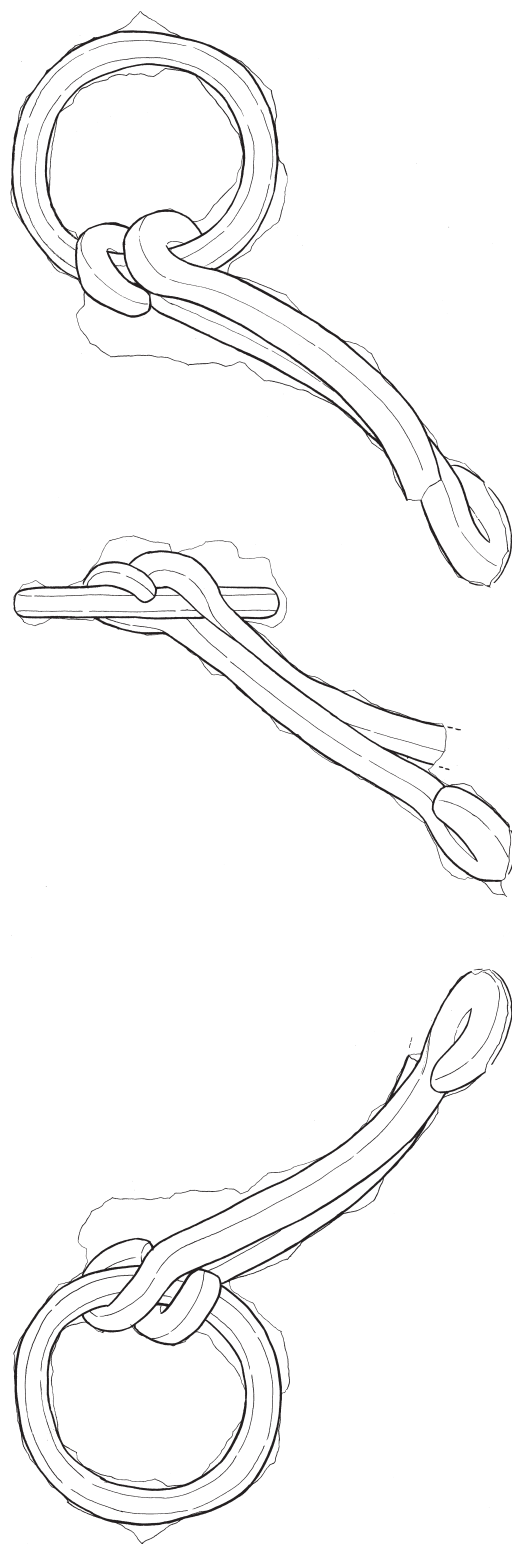


Fig.7 船原古墳 2号土坑出土素環状鏡板付轡Bその1 (S=1/2)



4



Fig.8 船原古墳 2 号土坑出土素環状鏡板付轡Bその 2 (S=1/2)

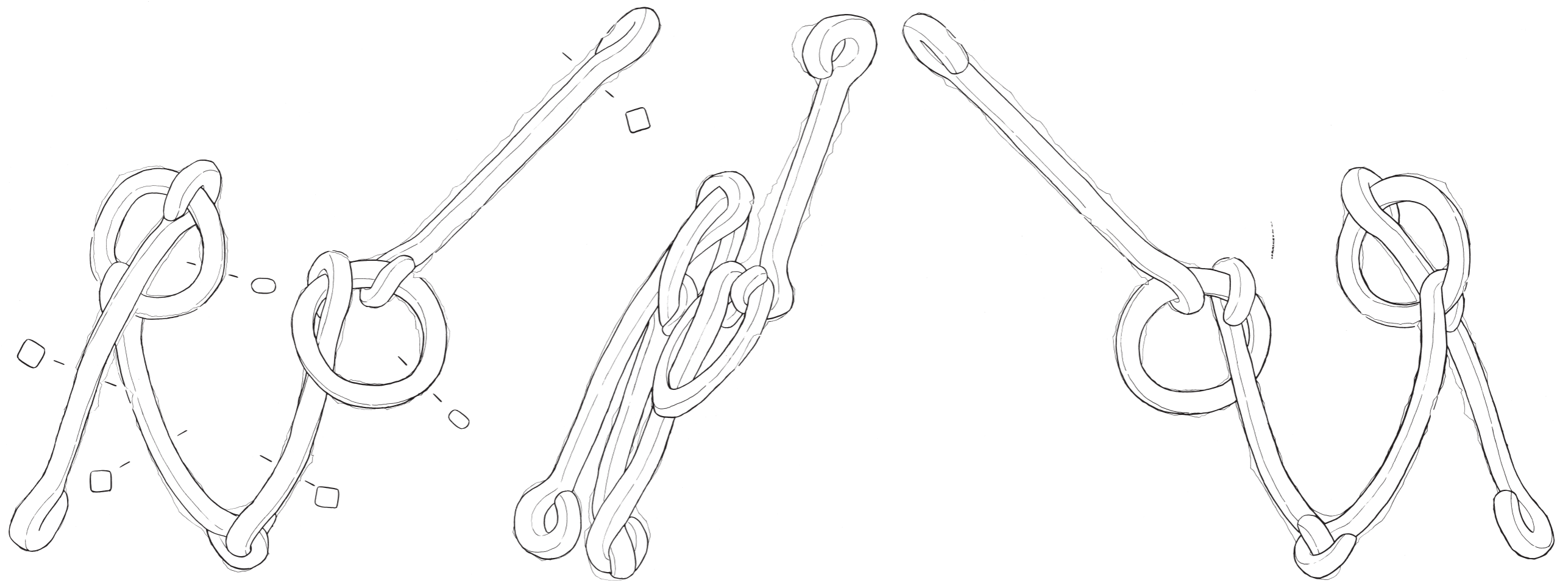


Fig.9 船原古墳 2号土坑出土素環状鏡板付轡C (S=1/2)

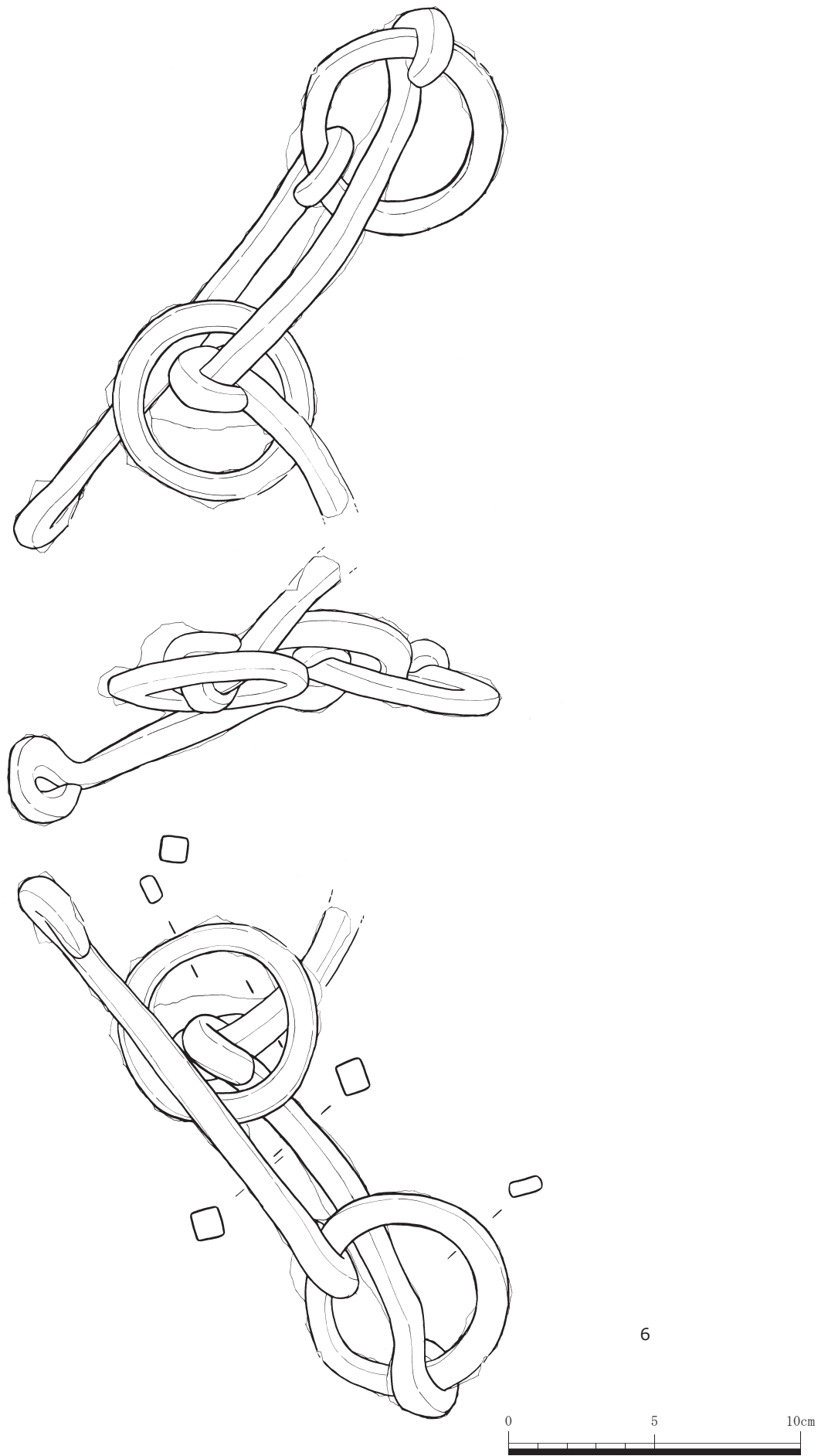
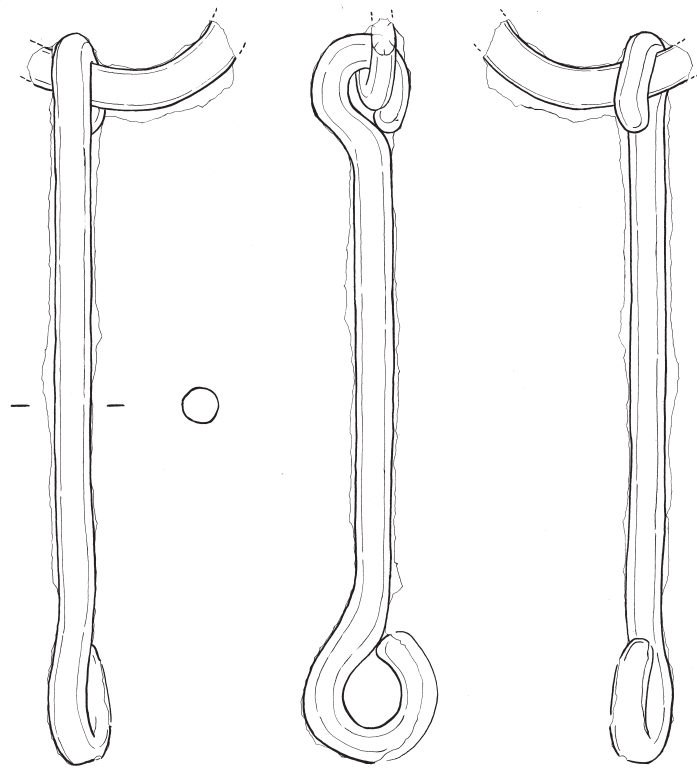
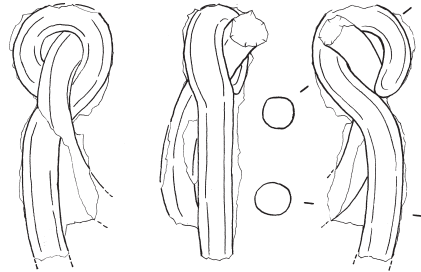


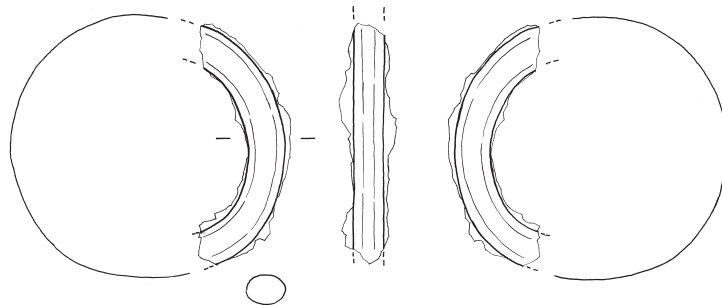
Fig.10 船原古墳 2号土坑出土素環状鏡板付轡 D その 1 (S=1/2)



7



8



9

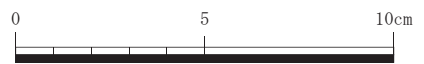
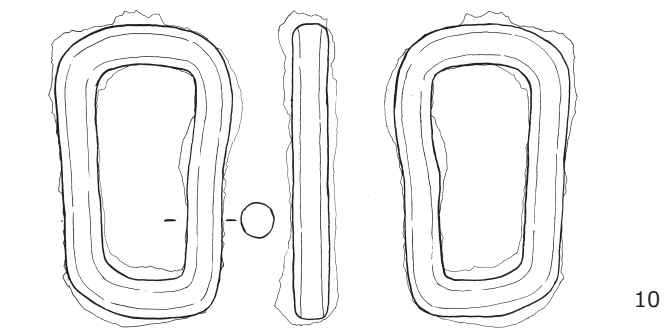
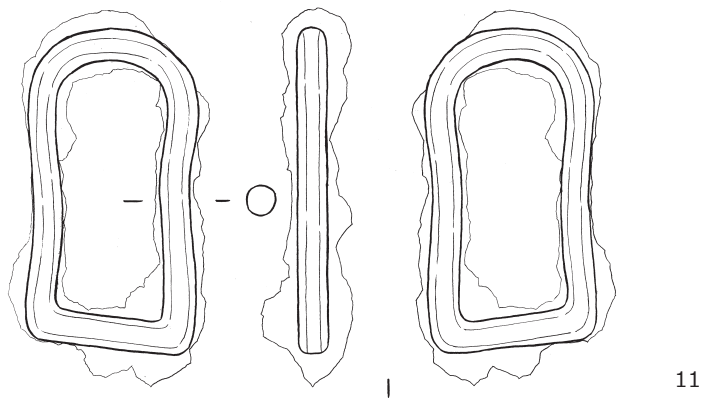


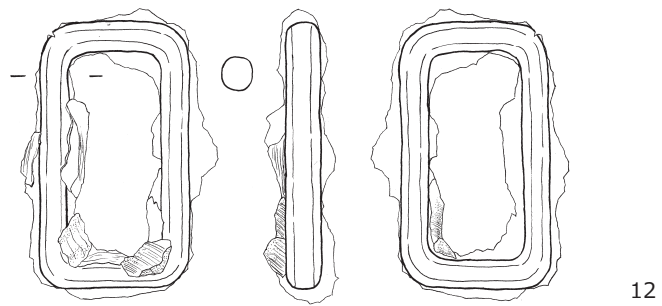
Fig.11 船原古墳 2 号土坑出土素環状鏡板付轡Dその 2 (S=1/2)



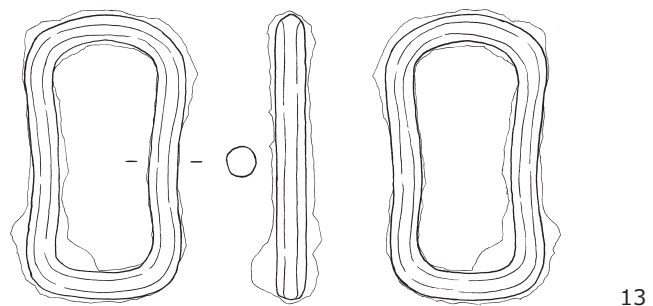
10



11



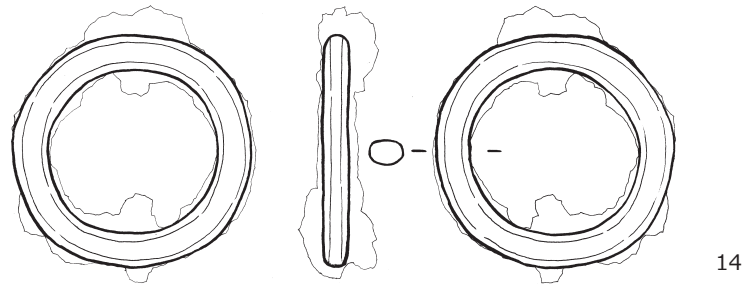
12



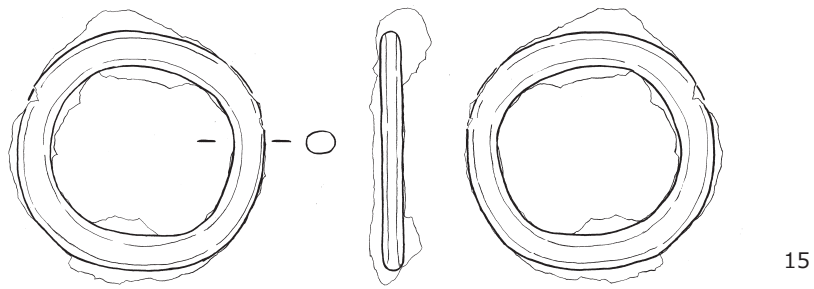
13



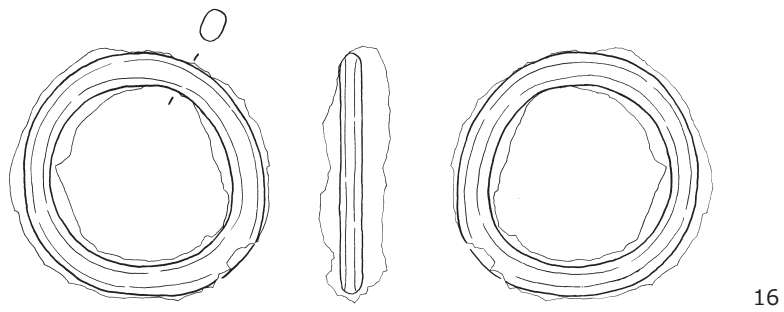
Fig.12 船原古墳 2 号土坑出土方形鉄器 (S=1/2)



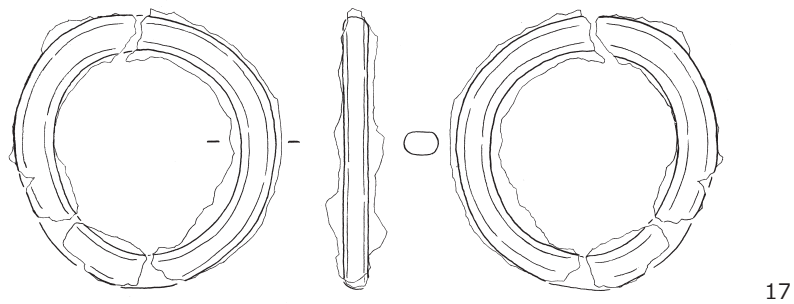
14



15



16



17



Fig.13 船原古墳 2号土坑出土円形鉄器 (S=1/2)

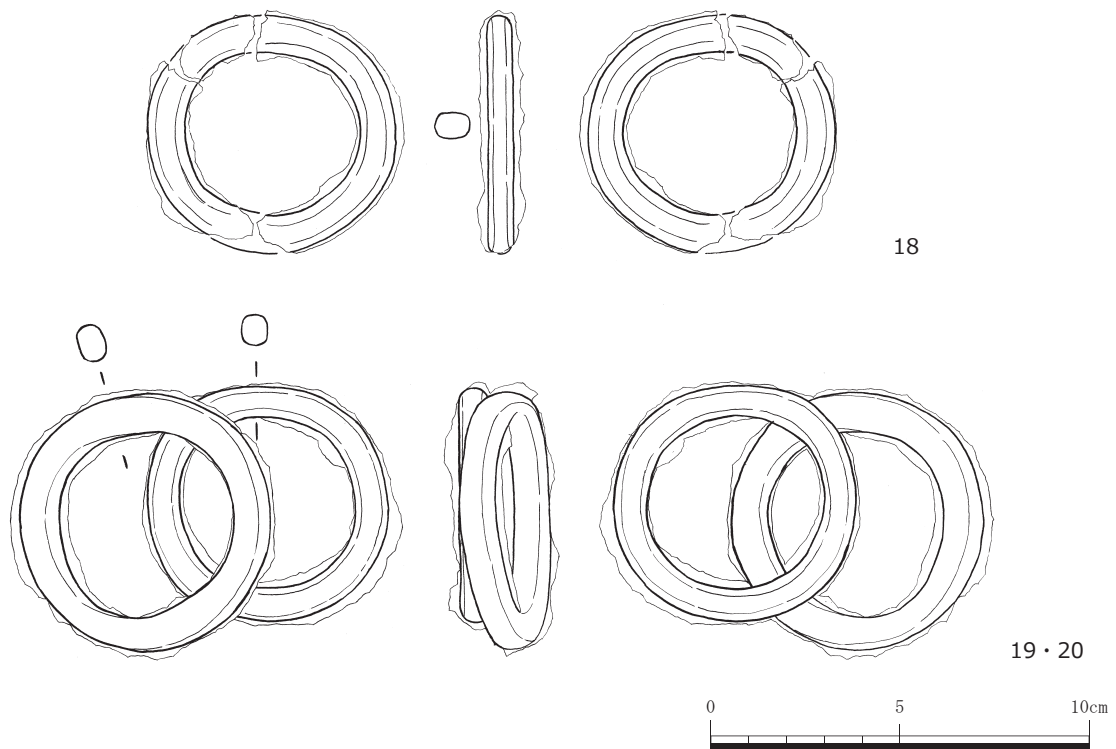


Fig.14 船原古墳 2 号土坑出土円形鉄器 (S=1/2)

で銜の型式が異なる。さらに、行者塚古墳長方形鏡板付轡は 4 世紀中頃に中国東北部の前燕で成立した可能性が指摘される横方向銜留の鏡板轡で、列島への騎馬文化導入期の最初期の馬具である。素環状鏡板付轡は熊本県江田船山古墳出土例を初現とし 6～7 世紀かけてみられる轡の形式なので、時間的ヒアタスも大きい。

また、銜の長さが 15cm 前後の轡を使う馬は、ばんえい競馬で使用される輓馬やペルシュロンといった体重 800kg を越える重種⁽²⁾で、それより小柄なサラブレッド等の軽種が使用する銜の平均的な長さは 12.5cm 程度である。古墳時代の轡の銜の長さは 7～11cm に収まるが、これは体高 150cm 以下のポニー用の銜の長さと同じである。よって、船原古墳 2 号土坑出土の轡が馬の体高に合わせて作られた馬具ならば、体高 150cm を優に超える重種の馬がいたということになるが、これまで遺跡で発掘された馬の全身骨格や馬蹄跡の大きさから推測される古墳時代の馬の体高は約 130cm であり、その後明治時代になるまで文献に記録される馬の体高で 150cm を越えるものはない⁽³⁾。

以上、船原古墳 2 号土坑の轡は単純な素環状鏡板付轡ではあるが、機能面や実用性の問題も含めて、他の素環状鏡板付轡とは型式的な差異が大きい。これらの特異な型式を除いた上で、一旦轡を編年的に位置づけるならば、花谷浩氏の第 3 群 (TK209～TK217 型式併行期) に該当し⁽⁴⁾、共伴した須恵器と同時期である。ただ、轡は 4 つとも同じ形状をしていることから、これらの型式差を生む何らかの意図をもって同一工房で製作されたと考えられる。よって系譜や来歴を明らかにした上で最終的に結論付けたい。

最後に、轡と共伴した円形鉄環は脚のない円環状の辻金具、方形鉄環は刺金のない鉸具と想定され、素環状鏡板付轡と組み合う金具で、鉄器の周辺で検出された紐状の有機質と一緒に同一の頭絡を形成していた可能性も想定される。それぞれのセット関係については、有機質の検討を踏まえて再度検討する。

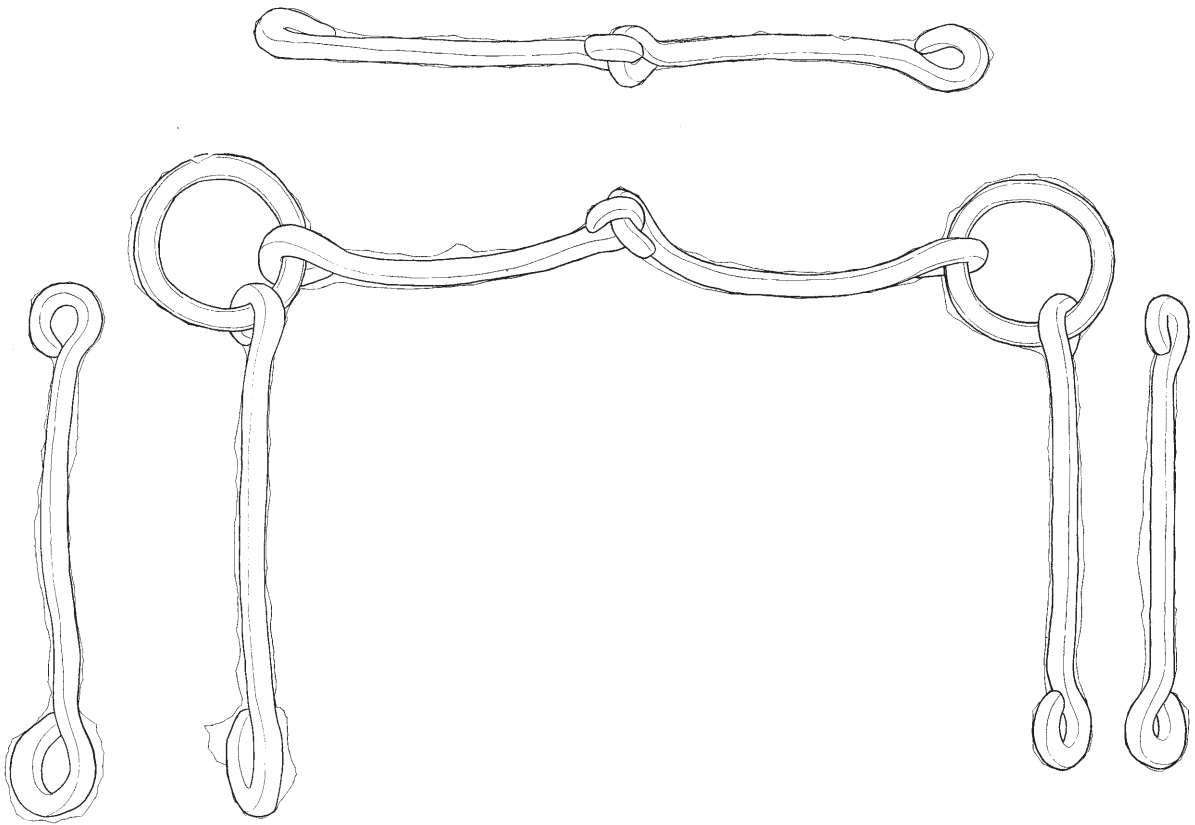


Fig.15 船原古墳 2 号土坑出土素環状鏡板付轡 A 展開図 (S=1/3)

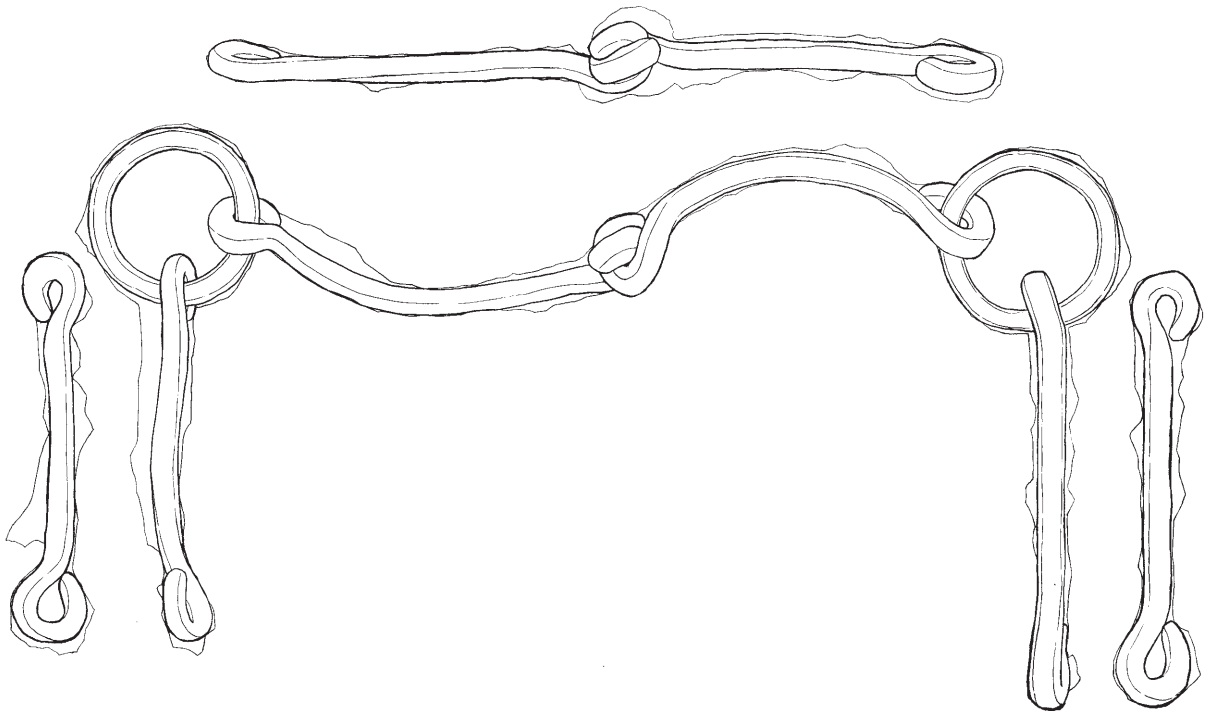


Fig.16 船原古墳 2 号土坑出土素環状鏡板付轡 B 展開図 (S=1/3)

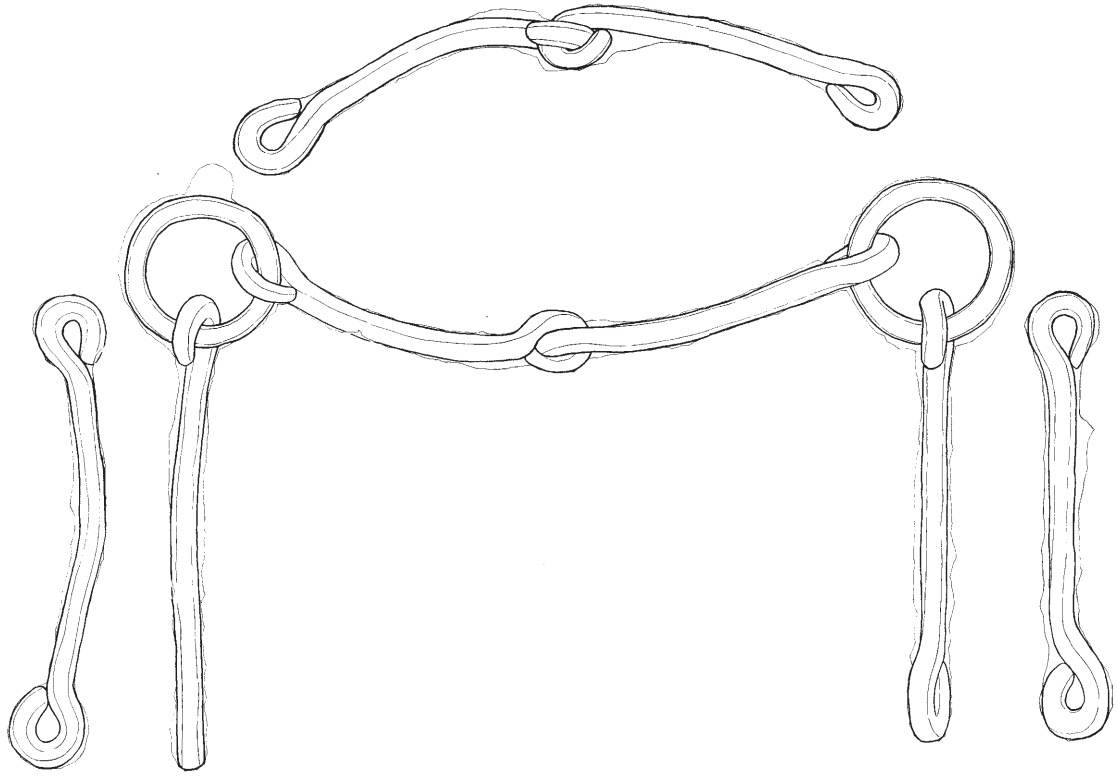


Fig.17 船原古墳 2 号土坑出土素環状鏡板付轡 C 展開図 (S=1/3)

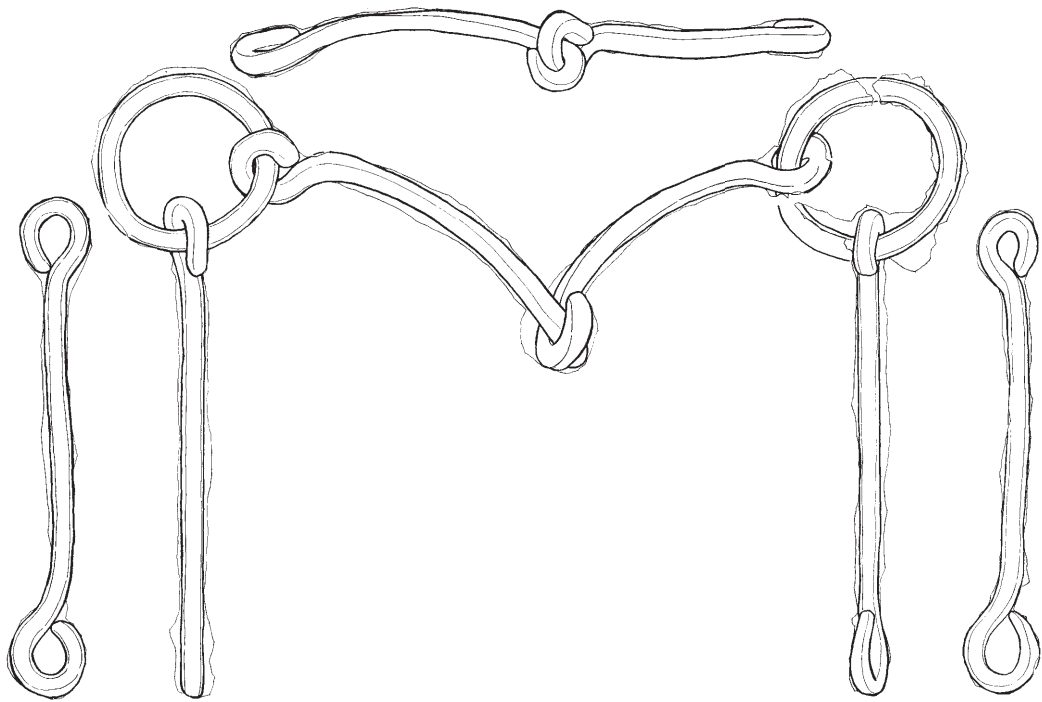


Fig.18 船原古墳 2 号土坑出土素環状鏡板付轡 D 展開図 (S=1/3)

2. 土坑の構築状況および性格

船原古墳2号土坑では同時期と目される馬具と須恵器が、土坑の最下層と最上層から分かれて出土した。ここで土層を見ると、土層上位の5層・6層は地山由来の土層であることから、船原古墳2号土坑は人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。また、12層は落ち込むように堆積していることから、土坑には何らかの覆いが被せられた可能性が高い。

よって、船原古墳2号土坑は土層の堆積状況から、床面に馬具を置いて、その上に何らかの覆いをした後、掘った際の土を被せて埋め戻し、さらにその上に土器を供献した、という様相が推測される。

ところで、船原古墳2号土坑のように古墳の埋葬施設ではなく、周溝内や墳丘裾部もしくは墳丘外の外側に造られた馬具や馬歯・馬骨が見つかる単独の土坑は、馬埋葬土坑(=殉葬馬土坑)の可能性があり、古賀市内でも楠浦・中里遺跡で馬具のみが出土した3基の土坑は、馬埋葬土坑の可能性が指摘されている⁽⁵⁾。

そこで、船原古墳2号土坑も平成26年に生物遺体の痕跡を確認するためにリン・カルシウム分析を実施した。結果、分析者は特に馬具が出土した遺構底部の19層からリンの含量が高い部分が認められ、リン・カルシウムを多く含む動物骨などの生物遺体が存在した可能性も想定した⁽⁶⁾。しかし、福岡県下の馬骨出土土坑を集成した神氏が提示した殉葬馬土坑の5つの傾向と照らし合わせてみると⁽⁷⁾、船原古墳2号土坑は「②基本的に馬具のみである。土器を供献する例がごく少数ある。」にしか該当しない。さらに、土坑の形態や隣接する古墳の形状、さらに複数点の轡が床面から出土していることなど、一般的な殉葬馬土坑と比べると相違点の方が多い。現状では殉葬馬土坑とは断言し難く、船原古墳2号土坑の性格を明らかにすることは難しい。上述した通り、船原古墳2号土坑で出土した轡も類例のない特異な馬具であり、系譜や来歴についてさらなる検討が必要である。出土した馬具、さらには船原古墳や船原古墳1号土坑の性格および歴史的背景と合わせて、船原古墳2号土坑の性格に迫る必要がある。総括報告書にて再度検討を行いたい。

(註)

- (2) 考古学上では、馬の体高で小型馬(108～121cm)、中型馬(124～142cm)、大型馬(150cm以上)と表現するが、現在一般的な馬の種類は、軽種(体重400～500kg)、重種(800～1000kg)、中間種(軽種と重種の間)、在来種の大きく4種類に分類され、体高150cm以下のものをポニーと呼ぶ。
- (3) 『吾妻鏡』文治5年(1189)8月10日条に登場する藤原国衡の高楯黒は体高四尺九寸(≒148cm)である。また明治26年(1893)の陸軍農商務両省合同馬匹現況調査要項によると、騎兵乗馬の平均体高は141.6cm、砲兵輓馬の平均体高は142.2cmである。
- (4) 花谷浩1986「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- (5) 神啓崇2017「4. 土壙墓ST02の検討」『乙金地区遺跡群21』大野城市教育委員会大野城市文化財調査報告書第157集
- (6) 古賀市教育委員会2016『船原古墳I』古賀市文化財調査報告書第68集
- (7) (5)と同一

第2節 船原古墳3号土坑

第1項 遺構および出土状況

船原古墳後円部の西南西に位置し、古墳主体部の主軸延長線上に直行する。船原古墳1号土坑から1.6m北東に離れる。遺構北側を18号土坑に切られる。主軸は船原古墳、船原古墳1号土坑と方位をほぼ同じくし、N-41°-Wを測る。

平面形は長方形を呈し、長軸2.23m、短軸0.84m、深さ0.21mを測る。床面は平坦で壁体は直線的に立ち上がる。18号土坑に切られた土坑北側の埋土は完掘していない。

床面からは、鉄鏃3束を含む鉄器類、有機質、土師器が出土した。土坑中央には鉄鏃2束と環1点が置かれ、西壁の中央南寄りに鉄鏃1束が壁に接した状況で出土した。有機質は南西側の角に近い位置にある。土層観察では、横断面土層図の1～3層が18号土坑の埋土で、船原古墳3号土坑の埋土である4層を掘り込んでいる。

出土土器から、6世紀後半代でも新しい時期と捉える。

第2項 出土遺物

船原古墳3号土坑からは、土師器1点、鉄鏃78点、刀子1点と有機質が出土した。土師器については、『船原古墳I』（古賀市教委2016）で報告しているため、ご参照願いたい。また、有機質については別稿で報告予定であるため、本稿では、鉄器類の報告を行う。なお、出土した各鉄鏃の法量及び形状は、Tab. 1の通りである。

ところで、船原古墳3号土坑出土遺物は整理担当者の不手際で遺物の正確な出土位置の記録を失ってしまっている。以下に記述した出土位置は、発掘調査時の写真を基に遺物の形状から再度照合したものであることを予めお断りしておく。

鉄鏃束① (Fig.20-1～36)

36本の長頸鏃が錆着した鉄鏃束である。土坑西壁中央南寄りから出土した。いずれも長頸鏃式で、うち3本は鏃身部、別の3本は頸部以下を欠損する。鏃身先端から茎関までの長さは13.5cm前後で、観察可能な茎関の形状はほぼ台形関だが、不明瞭ではあるがCTの観察では一部棘関も含まれていそうである。鉄鏃束は隙間なく束状に固まっており、埋納時には盛矢具あるいは収納具に納められていた可能性も想定されるが、表面には金属あるいは有機質の痕跡等は確認できない。

鉄鏃束② (Fig.21-37～57)

19本の長頸鏃と2本の鏃身部が執着した鉄鏃束である。土坑中央から出土した2本の鉄鏃束のうち、北側から出土した鉄鏃束である。いずれも長頸鏃式である。矢柄に錆着した鏃身部の2点(56、57)は、後述する鉄鏃70、鉄鏃68とそれぞれ接合する。鏃身先端から茎関までの長さは14.0cm前後のものが14本と、10.7cm前後のものが5本である。観察可能な茎関の形状はほぼ台形関だが、不明瞭ではあるがCTの観察では一部棘関も含まれていそうである。鉄鏃束は隙間なく束状に固まっており、埋納時には盛矢具あるいは収納具に納められていた可能性も想定されるが、表面には金属あるいは有機質の痕跡等は確認できない。

鉄鏃束③ (Fig.22-58～63)

長頸鏃6本が錆着する。土坑中央から出土した2本の鉄鏃束のうち、南側から出土した鉄鏃束の一部である。63は長頸鏃式で、鏃身先端から茎関までの長さは12.7cmを測る。58～62は鏃身部が欠損する。茎関の形状はいずれも台形関と見られる。口巻きと矢柄の痕跡が遺存する。

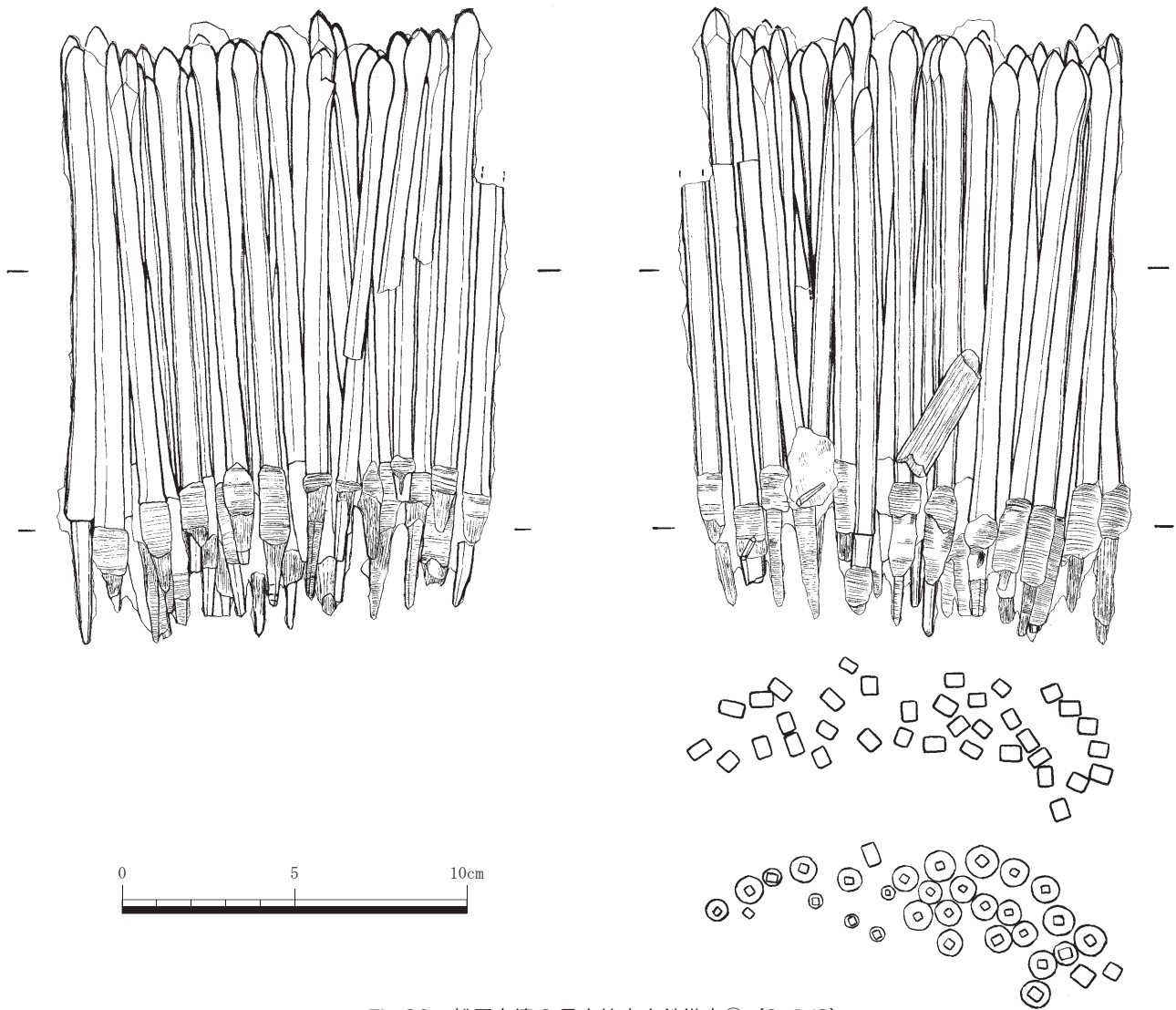


Fig.20 船原古墳 3号土坑出土鉄鏃束① (S=1/2)

鉄鏃 64～66 (Fig.22-64～66)

長頸鏃3本が鏃着する。整理担当者の不手際で出土箇所は不明である。しかし現場写真から鉄鏃58～63と接していたと思われ、土坑中央南側の鉄鏃束の一部と推測される。いずれも長頸鏃式で、66の茎関の形状は台形関である。また、鏃身先端から茎関までの長さは9.0cmである。口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存する。

鉄鏃 67・68 (Fig.22-67・68)

長頸鏃2本が鏃着する。68は鉄鏃束②の鏃身部57と接合する。よって、土坑中央南側の鉄鏃束の一部と判断できる。接合後の68の鏃身先端から茎関までの長さは10.7cmで、茎関はいずれも台形関で、口巻きと矢柄の有機質痕跡が良く残る。

鉄鏃 69 (Fig.22-69)

長頸鏃で、鏃身部は鉄鏃束②の56と接合する。よって、長頸鏃式で土坑中央南側の鉄鏃束の一部と判断できる。鏃身先端から茎関までの長さは約12.3cmで、茎関の形状は台形関である。茎端部を欠損する。口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存し、口巻き表面には漆の痕跡も見られる。

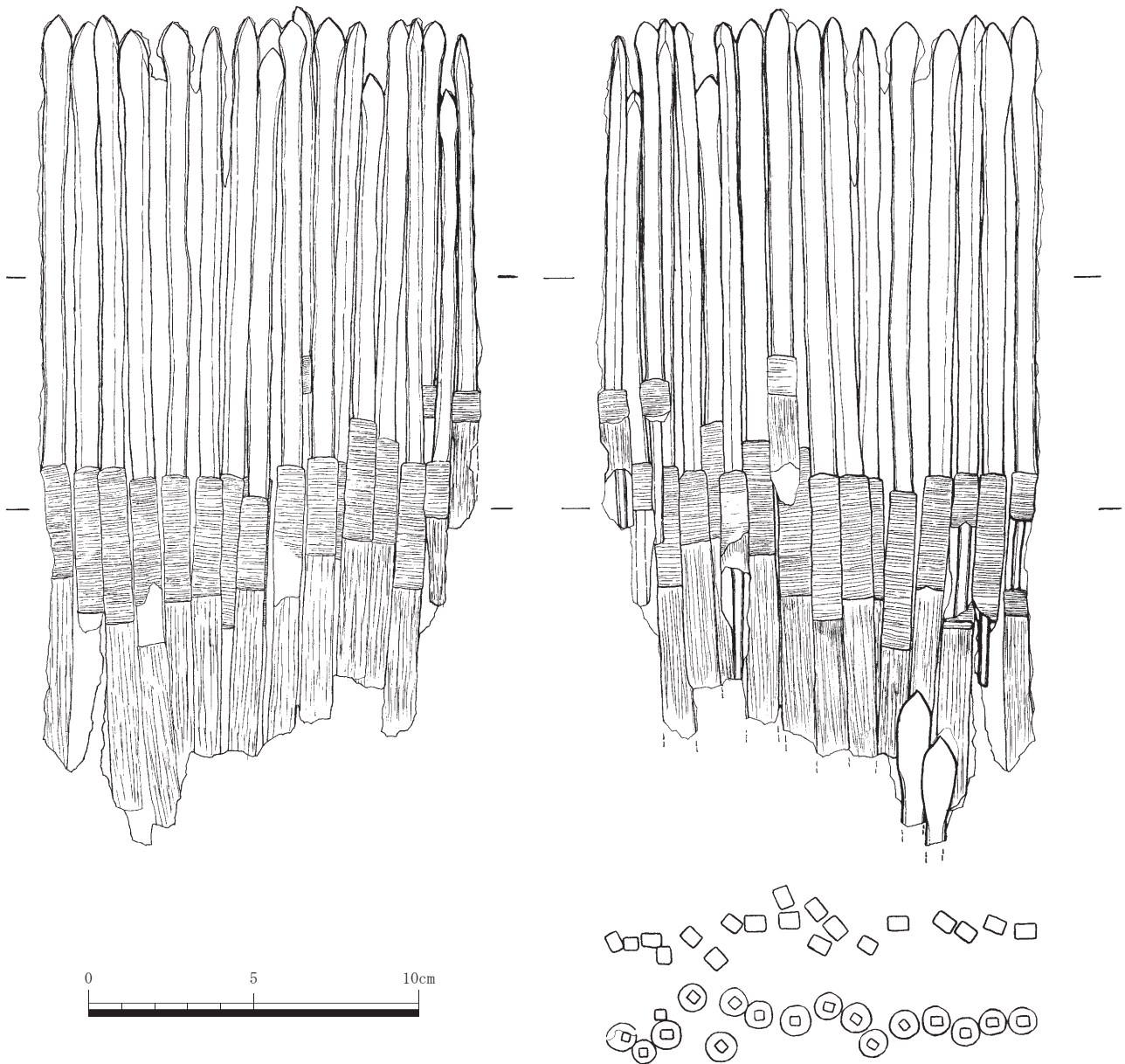


Fig.21 船原古墳 3号土坑出土鉄鏃束② (S=1/2)

鉄鏃 70・71 (Fig.22-70・71)

整理担当者の不手際で正確な出土箇所は不明だが、土坑中央南側の鉄鏃束の一部と思われる。いずれも長頸鏃式で、茎端部を欠損する。鏃身先端から茎関までの長さ11.0cm前後で、茎関の形状はいずれも台形関である。糸巻きによる口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存し、70は口巻き表面には漆の痕跡も見られる。

鉄鏃 72・73 (Fig.22-72・73)

いずれも長頸鏃式の鏃身部である。出土位置は不明だが、土坑中央南側の鉄鏃束の一部と思われる。72は鏃身先端が上向きに反り返える。鏃身部断面は片切刃造である。

鉄鏃 74～78 (Fig.22-74～78)

鉄鏃の茎部である。いずれも出土位置は不明である。74には茎巻き、75～77には矢柄の有機質痕跡が遺存する。

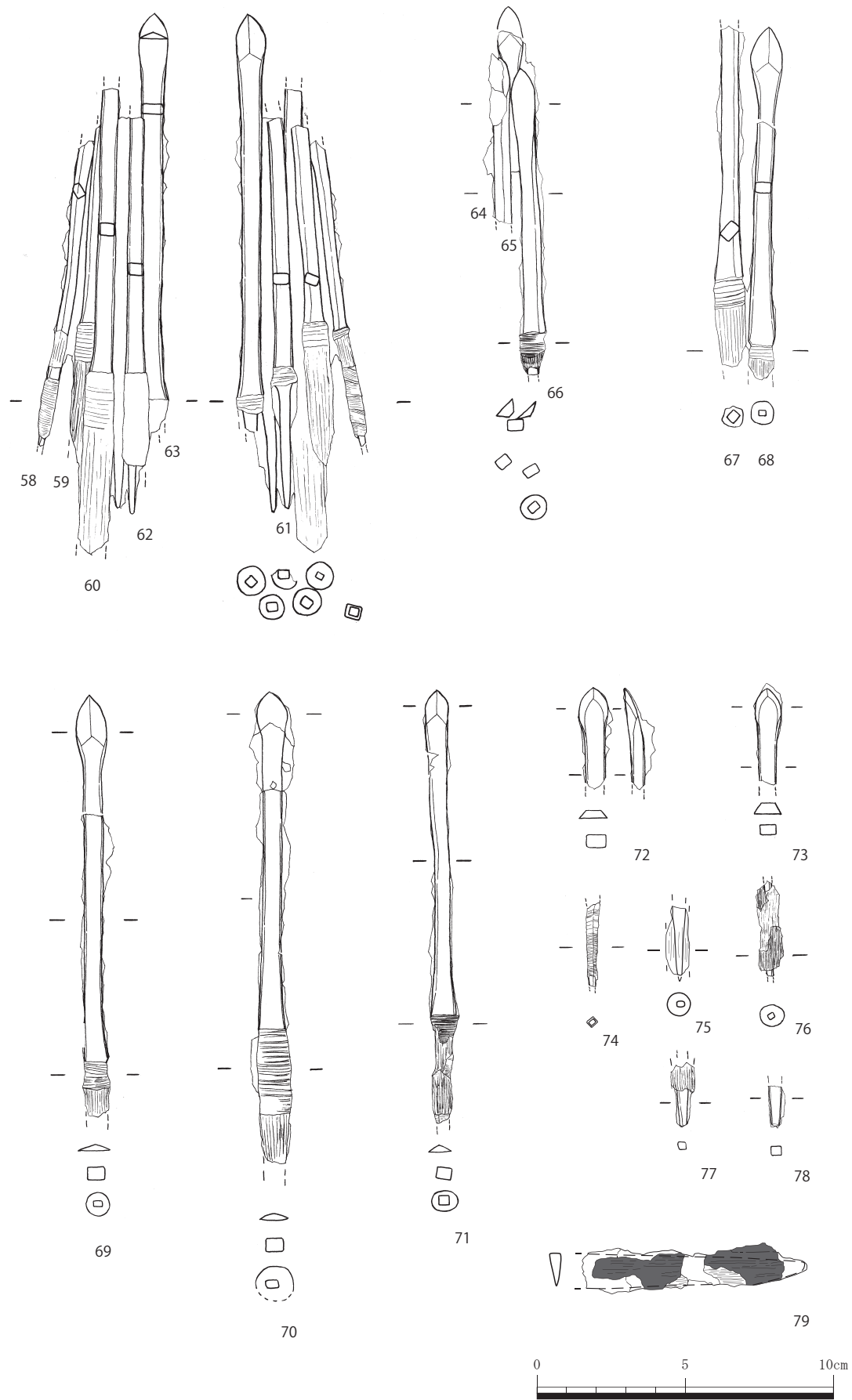


Fig.22 船原古墳 3号土坑出土鉄鏃・刀子 (S=1/2)

刀子 (Fig.22-79)

鉄製の刀子で、土坑中央南側の鉄鏃束から西側の少し離れた箇所から出土した。残存長 7.5cm、幅 1.2cm、厚さ 0.4cmである。関部以下は欠損。表面には木質と漆の痕跡が見られる。

小結

船原古墳 3号土坑から出土した鉄鏃は、鏃身部から茎関までが残るもの 58 本、鏃身部が残るもの 6 本、頸部以下が残るもの 9 本、茎部のみ残るもの 5 本、の合計 78 本である。よって、本来副葬されていた鉄鏃の本数としては、58 本 + 9 本前後で、67 本前後であったと想定される。

鉄鏃の形態は全て長頸鑿箭式で、茎関は台形関がほとんどだが、少量棘関も含んでいるとみられる (21、44)。また確認できたもののうち、鏃身部の幅は頸部幅よりも広いものが多いが、71 のみ鏃身部の幅が狭い。さらに、鏃身部断面は片丸造がほとんどだが、片切刃造のものも見られる (72、73)。

また、鏃身から茎までの長さを測ると、鉄鏃束①のうち確認できる 33 本はいずれも 13.5cm前後で長さが揃う。一方、鉄鏃束②は確認できる 19 本のうち、14.0cm前後のものが 14 本、10.5cm前後のものが 5 本で、長・短の 2 群に分かれる。また、土坑中央の南側から出土したと目される鉄鏃 (58～71) も、12.0cm以上のものが 2 本、12cmより短いものが 4 本であるため、こちらも長・短の鉄鏃に分かれると思われる。

以上から、船原古墳 3号土坑出土鉄鏃には、鏃身部が幅広の断面片丸造で台形関のものと棘関のもの、鏃身部が幅広の断面片切刃造のもの、鏃身部が幅狭のもの、の 4 種類が見られ、長さの長・短があるとまとめることができる。

編年的な位置は、茎関は TK43 併行期以降、台形関から棘関へと移行することが指摘されており、さらに鑿頭式長頸鏃は TK209 型式期以降出現し、刃部がふくらむタイプと刃部が平面形に影響を及ぼさないタイプの 2 系統が派生することが指摘されている⁽¹⁾。よって、長頸鑿箭式から成る船原古墳 3号土坑出土鉄鏃は TK209 型式併行期以降で、さらに棘関を一部含むものの、台形関が多くを占めることから、TK209 型式併行期でも古い段階に該当すると考えられる。

(註)

- (1) 水野敏之 2003 「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『《シンポジウム》後期古墳の諸段階』第 8 回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料

Tab.1 船原古墳 3号土坑出土鉄鏃観察表 (空所は計測不可)

番号	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	鏃身・断面	関形状	品質形状等
1	12.3	0.6	0.4	-	台形?	鏃身部および茎端部欠損。口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存。
2	12.2	0.9	0.4	-	台形	鏃身部および茎端部欠損。口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存。
3	12.9	0.8	0.4	-	台形	鏃身部欠損。口巻きと茎巻きの有機質痕跡が遺存。
4	16.7	0.8	0.4	鑿箭・片丸造	台形	
5	15.4	0.7	0.4	鑿箭・片丸造	台形?	
6	15.2	0.6	0.5	鑿箭・片丸造	台形	
7	17.1	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	
8	17.3	0.9	0.4	鑿箭・片丸造	台形	
9	16.1	1.0	0.4	鑿箭・片丸造	台形	
10	15.4	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	
11	16.6	0.8	0.5	鑿箭・片丸造	台形	
12	16.9	0.6	0.5	鑿箭・片丸造	台形	
13	16.8	1.1	0.5	鑿箭・片丸造	台形	
14	17.4	1.2	0.5	鑿箭・片丸造	台形	
15	16.3	1.1	0.5	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存。
16	16.1	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存。
17	15.3	0.8	0.5	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻き(糸巻き?)と矢柄の有機質痕跡が遺存。
18	15.2	1.0	0.4	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存。
19	16.5	0.9	0.4	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻き、矢柄と茎巻きの有機質痕跡が遺存。
20	15.5	0.6	0.4	鑿箭・片丸造	台形?	茎端部欠損。口巻きの有機質痕跡が遺存。
21	16	0.8	0.5	鑿箭・片丸造	棘?	
22	8.9	0.7	0.5	鑿箭・片丸造	-	頸部より下欠損
23	7.9	0.7	0.4	鑿箭・片丸造	-	頸部より下欠損
24	6.9	0.7	0.5	鑿箭・片丸造	-	頸部より下欠損
25	15.2	0.7	0.5	鑿箭・片丸造	台形?	茎端部欠損。口巻きと茎巻きの有機質痕跡が遺存。
26	15.5	0.8	0.4	鑿箭・片丸造	台形?	茎端部欠損。口巻きと茎巻きの有機質痕跡が遺存。
27	15.7	0.8	0.4	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻きと茎巻きの有機質痕跡が遺存。
28	13.7	0.8	0.5	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻きと茎巻きの有機質痕跡が遺存。
29			0.5	鑿箭・片丸造	台形	
30			0.4	鑿箭・片丸造	台形	
31			0.4	鑿箭・片丸造	台形	
32			0.4	鑿箭・片丸造	台形	
33			0.5	鑿箭・片丸造	台形	
34			0.5	鑿箭・片丸造	台形	
35			0.4	鑿箭・片丸造	台形	
36			0.4	鑿箭・片丸造	台形	
37	14.9	0.9	0.4	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻き(糸巻き)、矢柄、茎巻きの有機質痕跡が遺存。
38	15.7	0.8	0.4	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻き(糸巻き)、矢柄、茎巻きの有機質痕跡が遺存。
39	15.9	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻きと矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
40	26.3	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻きと矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
41	20.2	1.0	0.4	鑿箭・片丸造	台形	口巻きと矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
42	18.3	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻きと矢柄の有機質痕跡が遺存。
43	19.9	0.9	0.4	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
44	21.4	1.0	0.5	鑿箭・片丸造	棘?	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
45	15.1	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻きと矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
46	21.8	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	棘?	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
47	22.4	1.0	0.5	鑿箭・片丸造	棘?	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
48	22.5	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	棘?	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
49	22.1	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻きと矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
50	22.2	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
51	24.2	0.8	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
52	24.1	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
53	20	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
54	22.8	0.8	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
55	21.5	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡と漆の痕跡が遺存。
56	3.4	1.0	0.5	鑿箭・片丸造	-	鏃身部より下欠損(70と接合)
57	4.1	0.9	0.5	鑿箭・片丸造	-	鏃身部より下欠損(68と接合)
58	10.4	0.6	0.8	-	台形	茎端部欠損。口巻き、矢柄、茎巻きの有機質痕跡が遺存。
59	11.5	0.9	0.9	-	台形	茎端部欠損。口巻き(糸巻き)、矢柄の有機質痕跡が遺存。
60	15.7	1.0	0.9	-	台形	口巻き(糸巻き)、矢柄の有機質痕跡が遺存。
61	13.2	0.9	0.7	-	台形	口巻き、矢柄の有機質痕跡が遺存。
62	13.3	0.9	0.9	-	台形	口巻き、矢柄の有機質痕跡が遺存か。
63	14	1.0	1.0	鑿箭・片丸造	台形	口巻きの有機質痕跡が遺存。
64	5.7	0.9	0.4	鑿箭・片丸造	-	頸部より下欠損。鏃身に漆状の有機質が付着する。
65	4.8	0.8	0.4	鑿箭・片丸造	-	鏃身部端部および頸部以下欠損。
66	10.4	0.9	0.8	鑿箭・片丸造	台形	茎端部欠損。口巻き、矢柄、茎巻きの有機質痕跡が遺存。
67	11.4	1.0	0.4	-	台形	茎端部欠損。口巻き、矢柄の有機質痕跡が遺存。
68	8.6	1.0	0.4	(鑿箭・片丸造)	台形	茎端部欠損。口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡が遺存。57の鏃身と接合。
69	15.9	1.2	0.5	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡が遺存。
70	10.2	1.0	0.5	(鑿箭・片丸造)	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄の有機質痕跡が遺存。56の鏃身部と接合。
71	14.6	1.1	0.7	鑿箭・片丸造	台形	口巻き(糸巻き)と矢柄、茎巻きの有機質痕跡が遺存。
72	3.5	1.0	0.5	鑿箭・片切刃造	-	鏃身部以下欠損。刃部が反れる。
73	3.4	0.9	0.4	鑿箭・片切刃造	-	鏃身部以下欠損。
74	2.8	0.5	0.3	-	-	茎部。茎巻きの有機質痕跡が遺存。
75	2.5	0.8	0.8	-	-	茎部。矢柄の有機質痕跡が遺存。
76	3.2	0.9	0.7	-	-	茎部。矢柄の有機質痕跡が遺存。
77	2.2	0.8	0.8	-	-	茎部。矢柄の有機質痕跡が遺存。
78	1.4	0.4	0.3	-	-	茎部。茎巻きの有機質痕跡が遺存。

第3節 その他の遺構

第1項 調査区の概要

調査区は、船原古墳が立地する丘陵の南西側にあり、更に南西側には谷山川が丘陵と並行して流れている。調査面積は2,300㎡である。調査区の基本層位については、『船原古墳Ⅰ』（2016）の31 - 32頁に記述しているが、今回調査した遺構面は、暗灰茶褐色系の弱粘質土と暗褐色系の砂質土が相互に堆積する谷山川の氾濫原であり、礫を多く含む。氾濫原である堆積層の下層は黄褐色系の花崗岩層があり、基盤層となる。一方、遺構面の上層には、暗褐色系の弱粘質土が堆積しており、更にその上層には平成24年まで使用されていた水田の層があった。暗褐色系の弱粘質土層には、遺構が掘り込まれており、埋土から江戸時代初頭頃の陶器が確認されていることから、水田造成の時期は江戸時代以降と考えられる。

平成24年度に行った発掘調査では、船原古墳に伴う古墳時代の土坑群とともに古墳時代以外の遺構も多数確認されている。ここで報告する古墳時代以外の遺構は、土坑57基、溝状遺構3条、ピット多数である。報告する遺構が多数となり、各遺構の位置確認が煩雑となるので、ここでは遺構配置図のとおり、調査区の西側を調査区西、中央を調査区中央、東側を調査区東と3つに区分する。

なお、遺構密度は船原古墳が立地する丘陵側が密となり、等高線に沿って標高が低くなるにつれて疎になる。

第2項 土坑

1号土坑 (Fig.25 写真図版15)

調査区中央に位置する。44号・70号・73号土坑と接する。主軸はN - 37° - Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは2.78 m、幅は1.94 m程、深さは0.31 m程である。床面は平坦で、壁面はやや開き気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

2号土坑 (Fig.25 写真図版15)

調査区中央に位置する。7号・12号・17号・43号・44号土坑と接する。主軸はN - 30° - Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは2.96 m、幅は1.54 m程、深さは0.90 m程である。床面は平坦で、壁面はやや開き気味に立ち上がる。埋土中から土器が出土しており、本遺構の時期は出土土器から13世紀後半～14世紀前半と捉えておく。

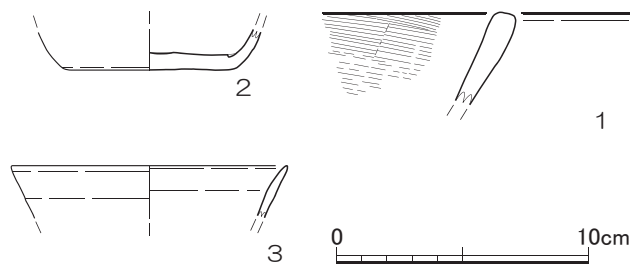


Fig.23 2号土坑出土土器実測図 (S=1/3)

出土土器 (Fig.23 写真図版20) は、瓦質土器 (1)、白磁 (2・3) である。1は鉢の口縁部である。2は平底の皿である。底部に釉の拭き取りがある。3は皿の口縁部である。

3号土坑 (Fig.28 写真図版15)

調査区東に位置する。7号・12号・52号・53号・56号土坑と接し、55号土坑を掘り込む。主軸はN - 28° - Eを測る。平面形は不定形な長方形を呈し、長軸の長さは4.04 m、幅は最大2.56 m、深さは0.24 m程である。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

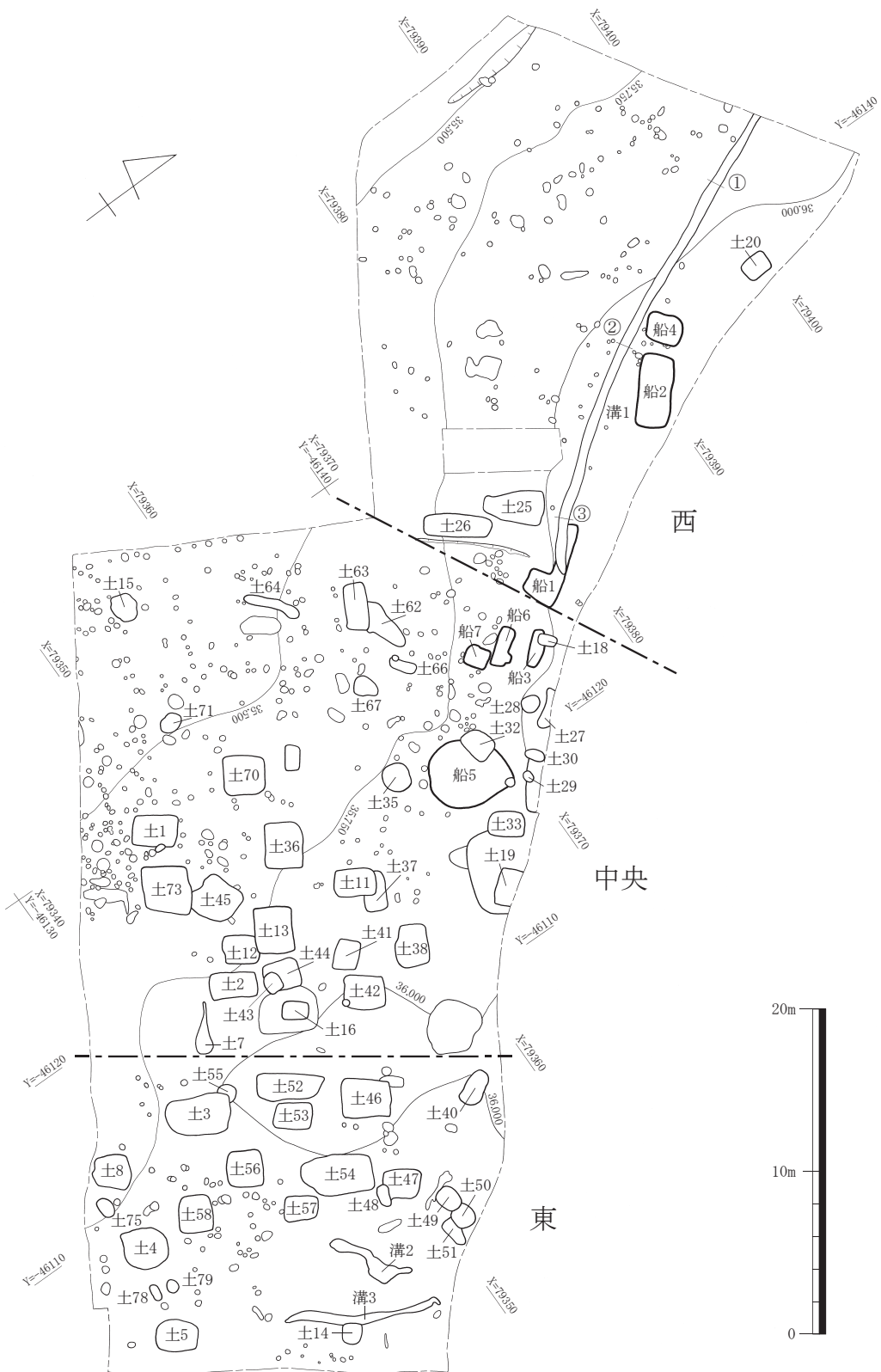


Fig.24 古墳時代以外の遺構の配置図 (S=1/400)

4号土坑 (Fig.28 写真図版 15)

調査区東の南寄りに位置する井戸である。78号・79号土坑と接する。主軸はN-70°-Wを測る。掘方の平面形は楕円形を呈し、主軸の長さは2.46m、最大幅は2.76m、深さは1.76m程である。床面は平坦である。壁面は垂直気味に立ち上がるが、上部で開き気味になる。掘方上端から0.30m程の位置から床面まで、0.20~0.40m程の礫を平積みして石組みを行っている。石組みは上部が内側に迫り出しているが、径は0.90m程の円形である。石組みの深さは1.40m程と浅いが、礫を多く含む堆積層を掘り込んで、花崗岩土の基盤層まで達している。本遺構が石組みであることと出土土器から16世紀後半代と捉えておくが、新手の土器も含まれている。

出土土器 (Fig.26、27 写真図版 20、21) は、須恵器(4)、土師器(5~17、20、21)、瓦質土器(18、19、22~24)、龍泉窯系青磁(25~29)、青磁(30、31)、白磁(32、33)、高麗象嵌青磁(34)、陶器(35~41)、磁器(42)、備前焼(43)である。4は甕の口縁部である。5は小皿である。6~14は坏である。6~12、14の底部の切り離しは糸切りである。6は底部に板状圧痕が付く。15は碗である。底部の切り離しは糸切りである。16は鉢の口縁部である。17は搦鉢

の底部である。すり目の数は6本になる。18、19は搦鉢である。19のすり目は摩滅が著しいが11本を数える。20、21は鍋である。20は口縁端部をくの字に折り曲げる。22~24は足鍋の脚部である。25~28は碗である。25は見込み内に線刻文、26は見込み内に片切彫文と沈線を施す。27、28は器壁外面に鎬蓮弁文を施す。29は皿である。器壁外面に蓮弁文を施す。30は碗である。31は皿である。32は皿である。33は小碗である。34は碗である。器壁外面に三重沈圏線、器壁内面に三重沈圏線と線文様を施す。35は高台付の皿である。見込み内に砂目跡が付く。36~38

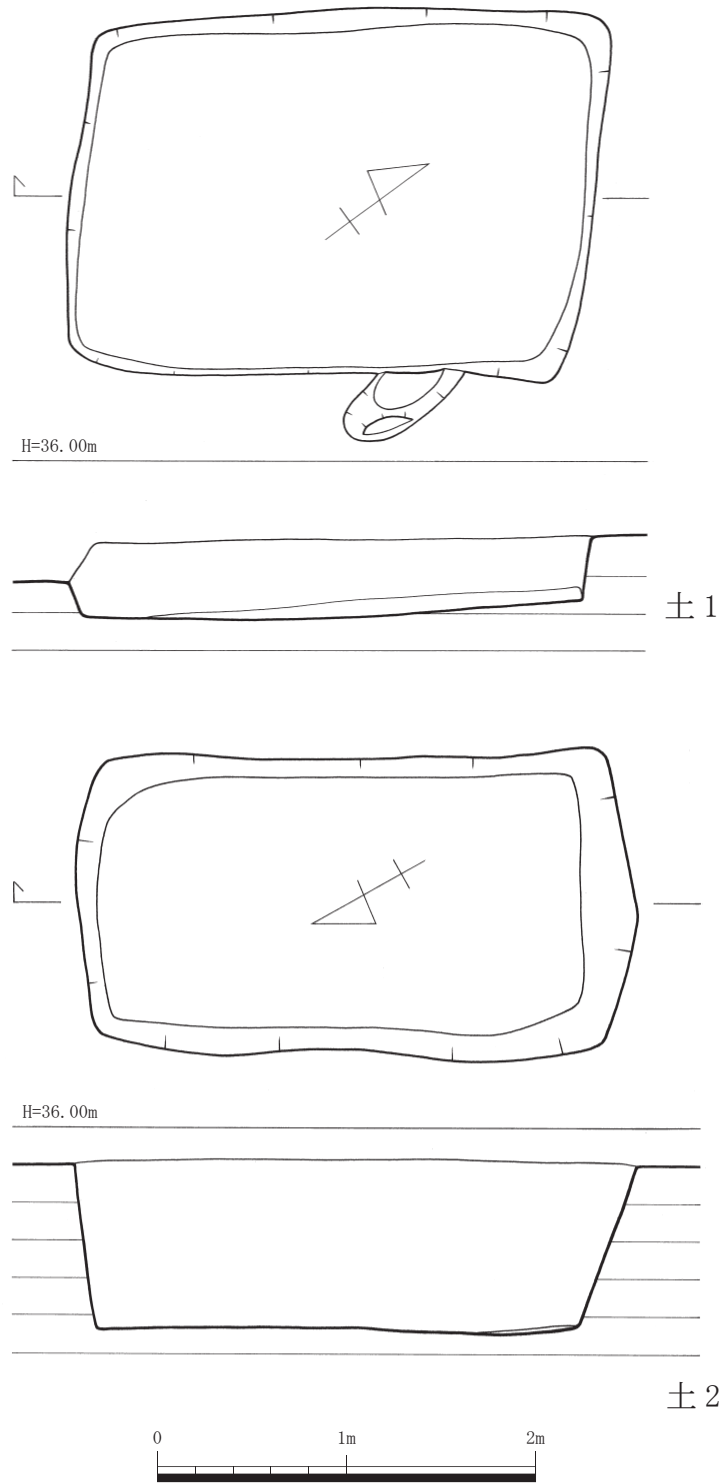


Fig.25 1号・2号土坑実測図 (S=1/40)

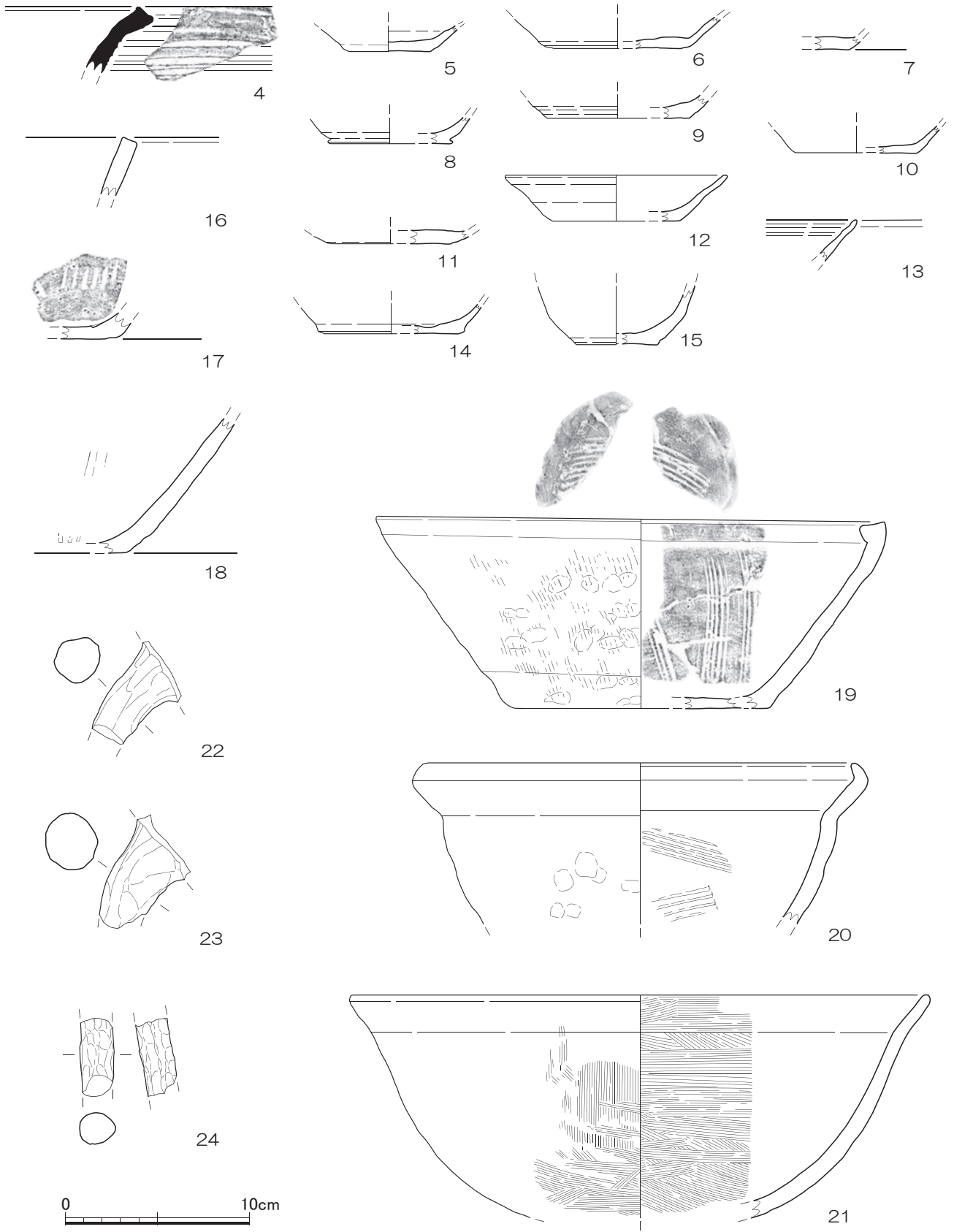


Fig.26 4号土坑出土土器実測図その1 (S=1/3)

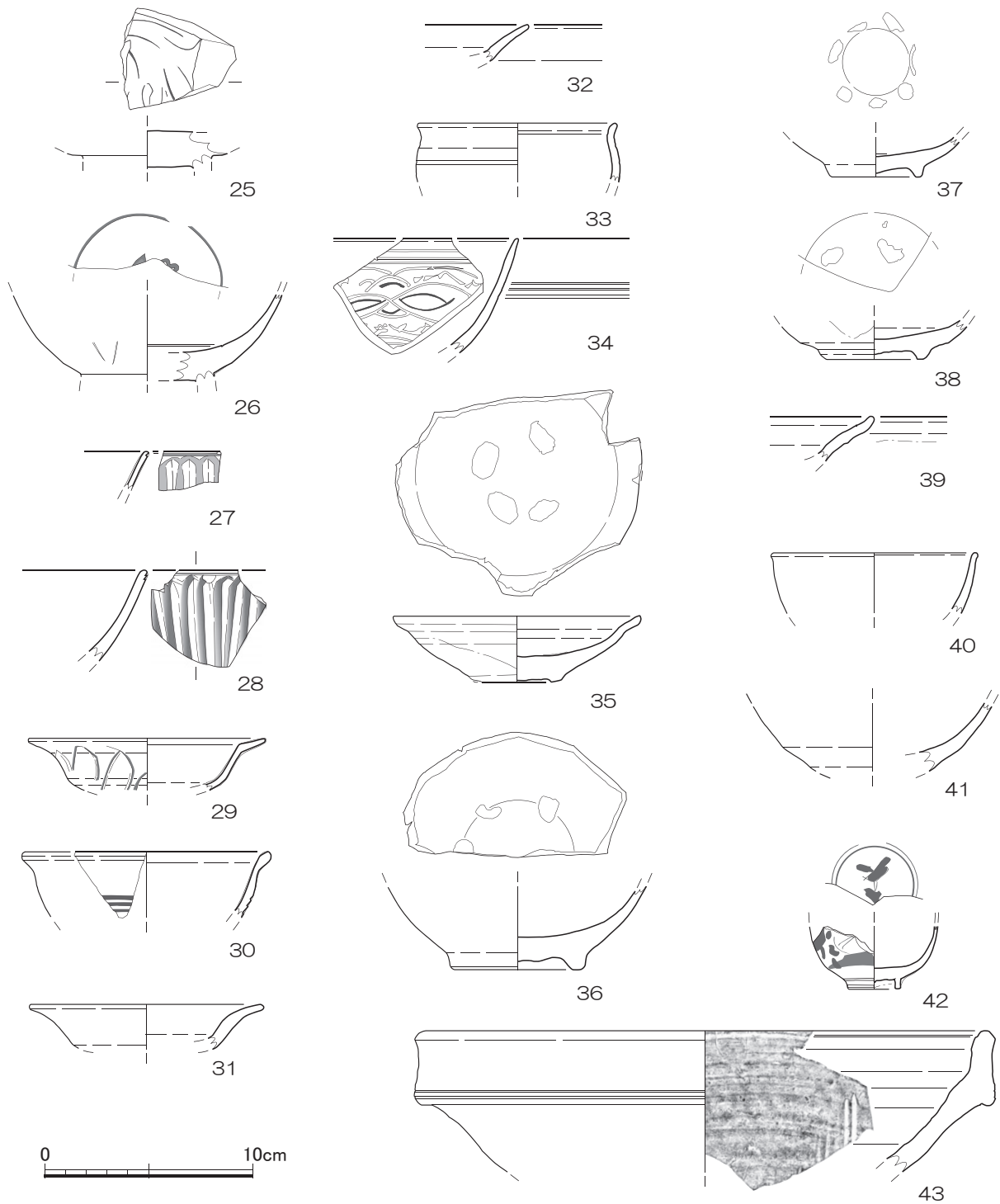


Fig.27 4号土坑出土土器実測図その2 (S=1/3)

は碗である。見込み内に砂目跡が付く。36、37は全面に施釉する。39は皿の口縁部である。40は小碗である。41は碗である。42は染付の坏である。器壁外面に呉須の二重沈圈線文と風景文様、見込み内には二重沈圈線文の内側に草花文様を施す。43は摺鉢である。

5号土坑 (Fig.28 写真図版15)

4号土坑と同じく、調査区東の南寄りに位置する井戸である。58号・75号～79号土坑と接する。主軸はN-60°-Wを測る。遺構は2段に成形され、上段の平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸の長さは2.60m、短軸の長さは1.98m、深さは0.56m程である。床面は平坦で、踏み場にするた

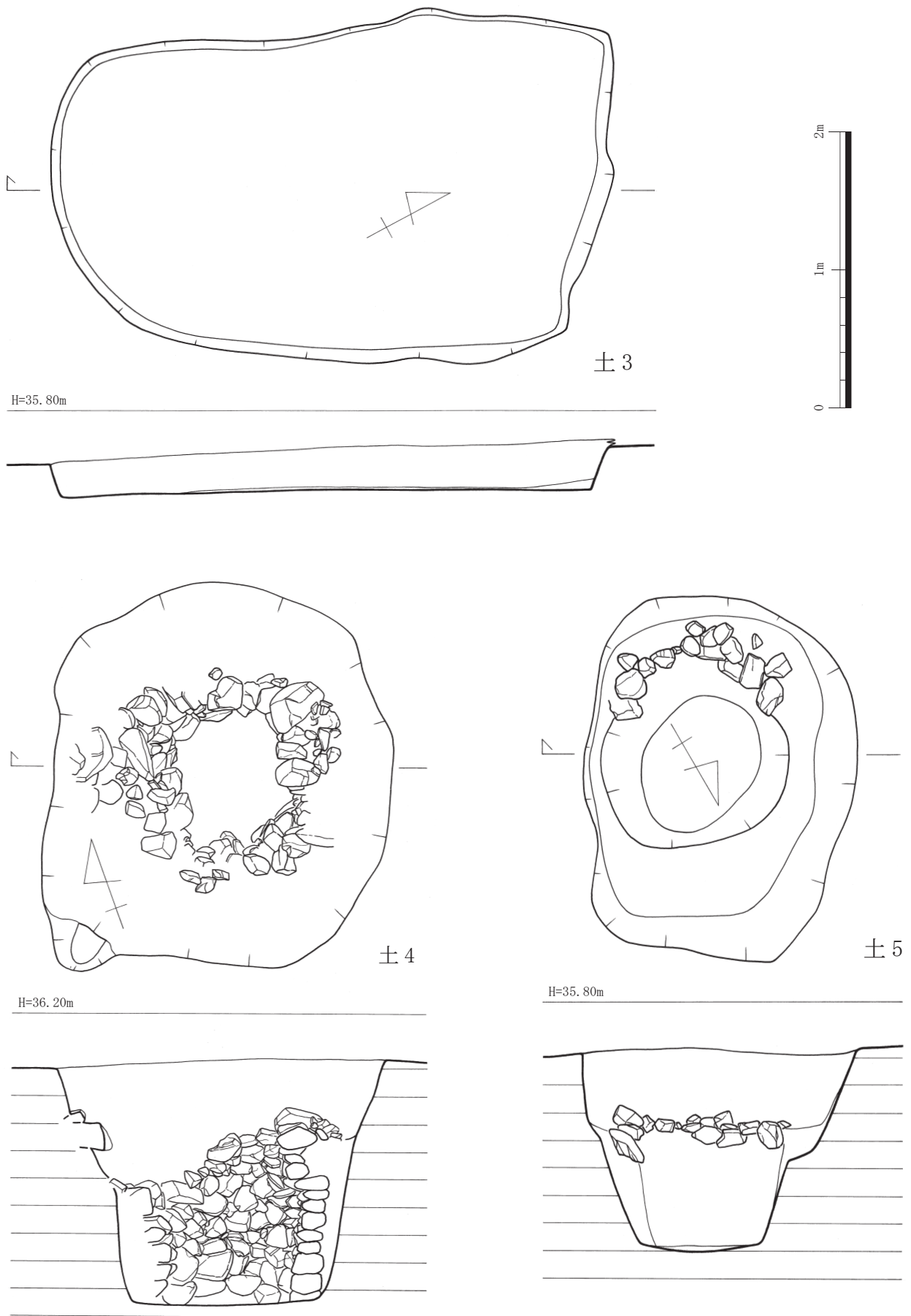


Fig.28 3号·4号·5号土坑实测图 (S=1/40)

めか南半分には礫が敷き詰められている。壁面はやや開き気味に立ち上がる。下段は円形を呈し、長軸の長さは 1.35 m、短軸の長さは 1.36 m、深さは 0.90 m 程である。床面は凸レンズ状となる。井戸の掘方も 2 段に掘り込まれ、花崗岩粘質土層に達するまで礫を多く含む堆積層を掘り込んでい。上段は隅丸長方形、下段は円形を呈す。本遺構は出土土器から 17 世紀代と捉えておく。

出土土器 (Fig.29 写真図版 21、22) は、土師器 (44)、土師質土器 (45)、磁器 (47、48)、陶器 (46、49～53)、滑石製石鍋 (54) である。44 は小皿である。底部の切り離しは糸切りである。45 は火舎である。口縁下に 2 条の突帯が貼り付けられ、突帯内には菊花文が等間隔にスタンプされている。46 は染付の小碗で、器壁外面に呉須で施文する。47 は肥前系の染付の小碗で、器壁外面に草花文を施す。48 は碗の口縁部である。49 は碗である。50～52 は播鉢である。器壁内面の摺り目は、50 と 52 が 8 本、51 が 7 本である。53 は皿である。口縁が外反して大きく開き、口唇が立ち上がる。器壁内面に白化粧土を刷毛塗りして鉄絵の文様を施す。54 は石鍋の口縁端部である。口縁部直下に断面不等辺台形の鏝が付く。混入品か。

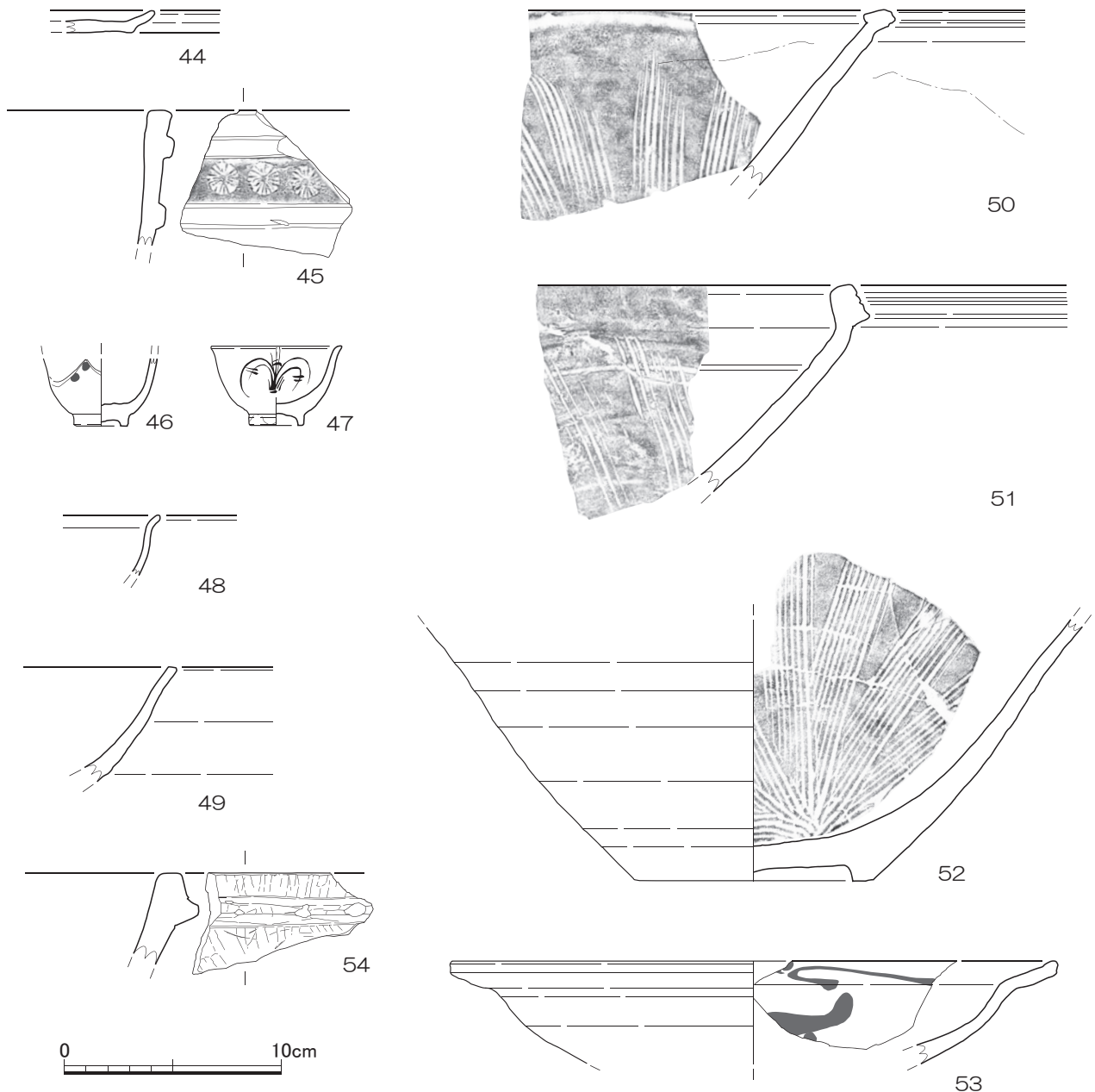


Fig.29 5号土坑出土土器実測図 (S=1/3)

7号土坑 (Fig.30 写真図版 15)

調査区中央の東寄りに位置する。2号・3号・17号・55号土坑と接する。主軸はN-56°-Wを測る。平面形は不定形の楕円形であるが、深さは溝も含めて最大で0.08 mしかないため、遺構上端はほとんど消失していると言え、遺構本来の平面形は不明である。但し、床面に長軸方向の溝が掘り込まれ、埋土に炭化物、焼土を含むこととその規模から、26号土坑と同じ遺構構造になる可能性がある。長軸の長さは溝を含め3.25 m、幅は最大1.10 mとなる。溝の幅は0.20 m前後である。床面は平坦で、中央に浅いピットが1つある。壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は土層観察から2層に分層される。1層はピットの埋土である。炭化物を少量含む。2層は茶褐色系粘質土で炭化物、焼土をきわめて多く含む。遺構に伴う遺構はない。

8号土坑 (Fig.30 写真図版 15)

調査区東に位置する。3号・58号・75号土坑と接する。主軸はN-35°-Eを測る。平面形は不正形な方形を呈し、長軸の長さは2.28 m、幅は1.99 m程、深さは0.44 m程である。床面は平坦で、壁面は開き気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はなく。

11号土坑 (Fig.30 写真図版 16)

調査区中央の東寄りに位置する。13号・36号・41号土坑と接し、37号土坑を掘り込む。主軸はN-31°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは2.57 m、幅は1.70 m程、深さは0.74 m程である。床面は平坦で、壁面はやや開き気味に立ち上がる。埋土は土層観察から5層に分層される。下層の1層、2層は暗茶褐色系の礫層と砂層である。中層の3層、4層は暗茶褐色系の粘質土で、礫を多く含む。上層の5層は黄褐色系の粘質土で茶褐色の粘土ブロックと礫を多く含む。遺構に伴う遺物はなく。

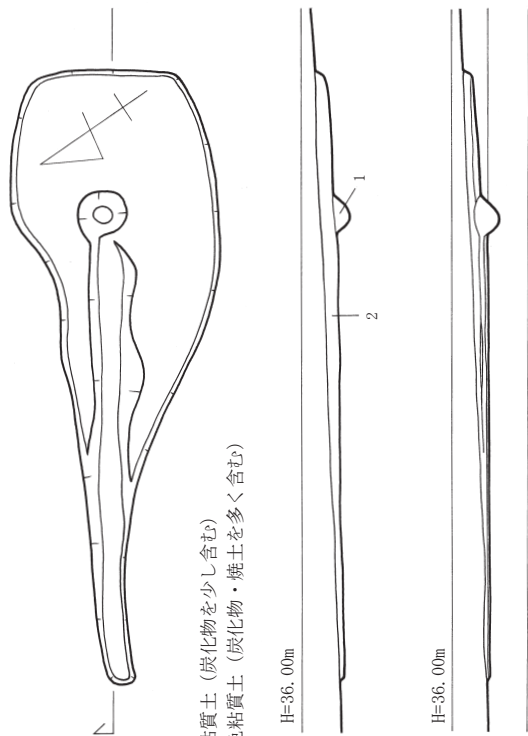
12号土坑 (Fig.30 写真図版 16)

調査区中央の東寄りに位置する。2号・43号・44号・45号土坑と接し、13号土坑に北壁面を掘り込まれている。主軸はN-34°-Eを測る。平面形は方形に近い長方形を呈し、長軸の長さは2.21 m、幅は1.80 m程、深さは0.58 m程である。床面は平坦で北東側が若干高くなる。壁面はやや開きながら立ち上がる。本遺構の時期は出土土器から12世紀中頃から後半と捉えておく。

出土土器 (Fig.31 写真図版 22) は、土師器 (55、56)、同安窯系青磁 (57) である。55、56は坏の口縁部である。57は碗の底部である。見込に沈圈線が一条廻り、器壁外面に粗い櫛目文を施す。

13号土坑 (Fig.33 写真図版 16)

調査区中央の東寄りに位置する。36号・41号・44号・45号土坑と接し、12号土坑を掘り込む。主軸はN-30°-Eを測る。平面形は方形に近い長方形を呈し、長軸の長さは2.88 m、短軸の長さは2.25 m、深さは0.56 m程である。床面は平坦であるが、北側が若干高くなる。壁面は垂直気味に立ち上がる。埋土は土層観察から4層に分層される。1層と2層は暗黄褐色系の粘質土で、小礫と暗褐色粘土ブロックを含む。3層は暗褐色粘質土、4層は暗灰黄褐色系の礫層である。遺構から出土した遺物はなく。

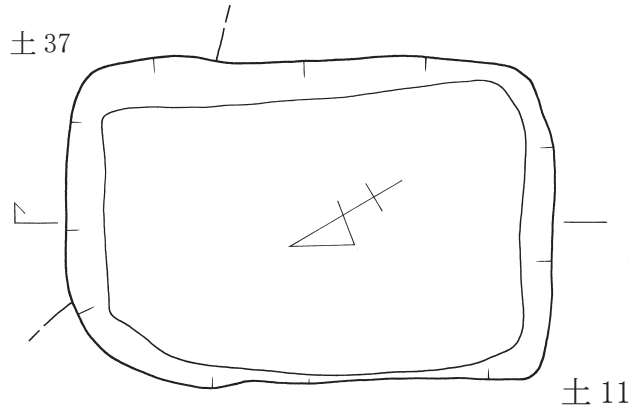


- 1 茶褐色粘質土 (炭化物を少し含む)
- 2 暗茶褐色粘質土 (炭化物・磁土を多く含む)

H=36.00m

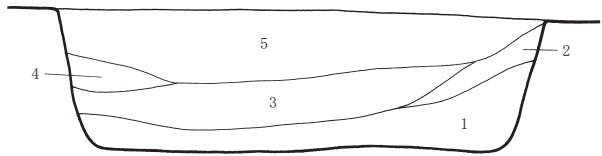
H=36.00m

±7

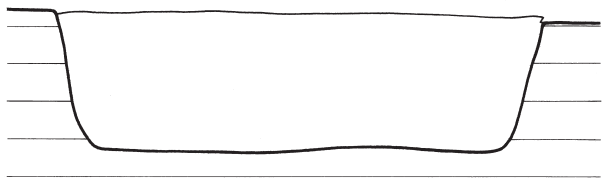


±11

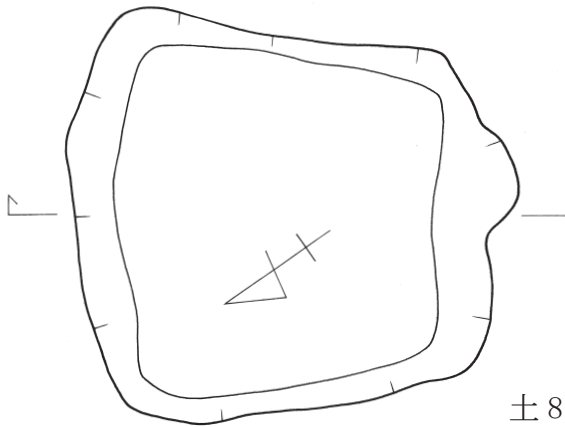
H=36.00m



H=36.00m

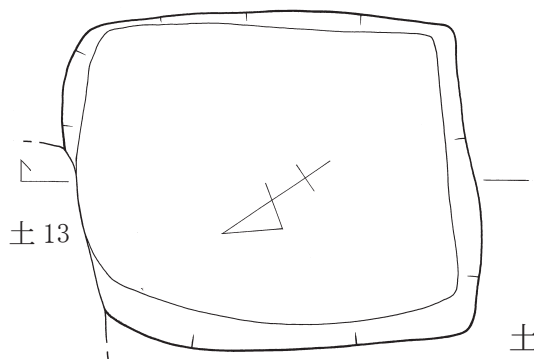
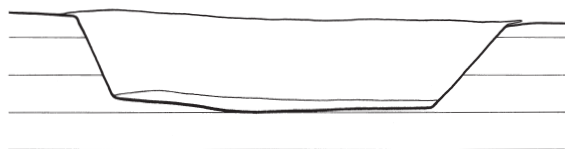


- 1 暗茶褐色砂質土 (礫を含む)
- 2 暗茶褐色砂質土
- 3 暗茶褐色粘質土 (暗黄褐色土・礫を多く含む)
- 4 暗茶褐色粘土 (礫を多く含む)
- 5 黄褐色粘質土 (茶褐色粘土ブロック・礫を多く含む)



±8

H=36.00m



±12

H=36.00m

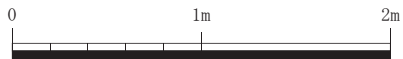
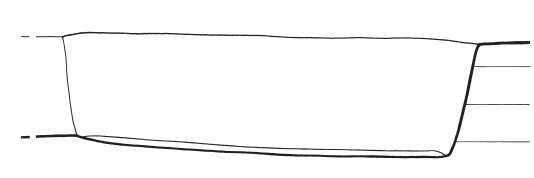


Fig.30 7号・8号・11号・12号土坑実測図 (S=1/40)

14号土坑 (Fig.33 写真図版 16)

調査区東の東寄りに位置する。3号溝状遺構を掘り込む。主軸はN-50°-Eを測る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸の長さは1.28m、最大幅は1.22m、深さは0.87m程である。床面は平坦で北側隅が若干高くなる。壁面は垂直気味に立ち上がる。埋土中から土器が出土しており、本遺構の時期は出土土器から17世紀代と捉えておく。

出土土器 (Fig.31 写真図版 22) は、白磁 (58)、陶器 (59)、滑石製品 (60) である。58は小碗である。59は割り高台を持つ鉢である。口縁をくの字に外反させ茶色の釉をかける。60は石鍋を転用した未成品で、内外面に削り痕が付く。用途は不明である。

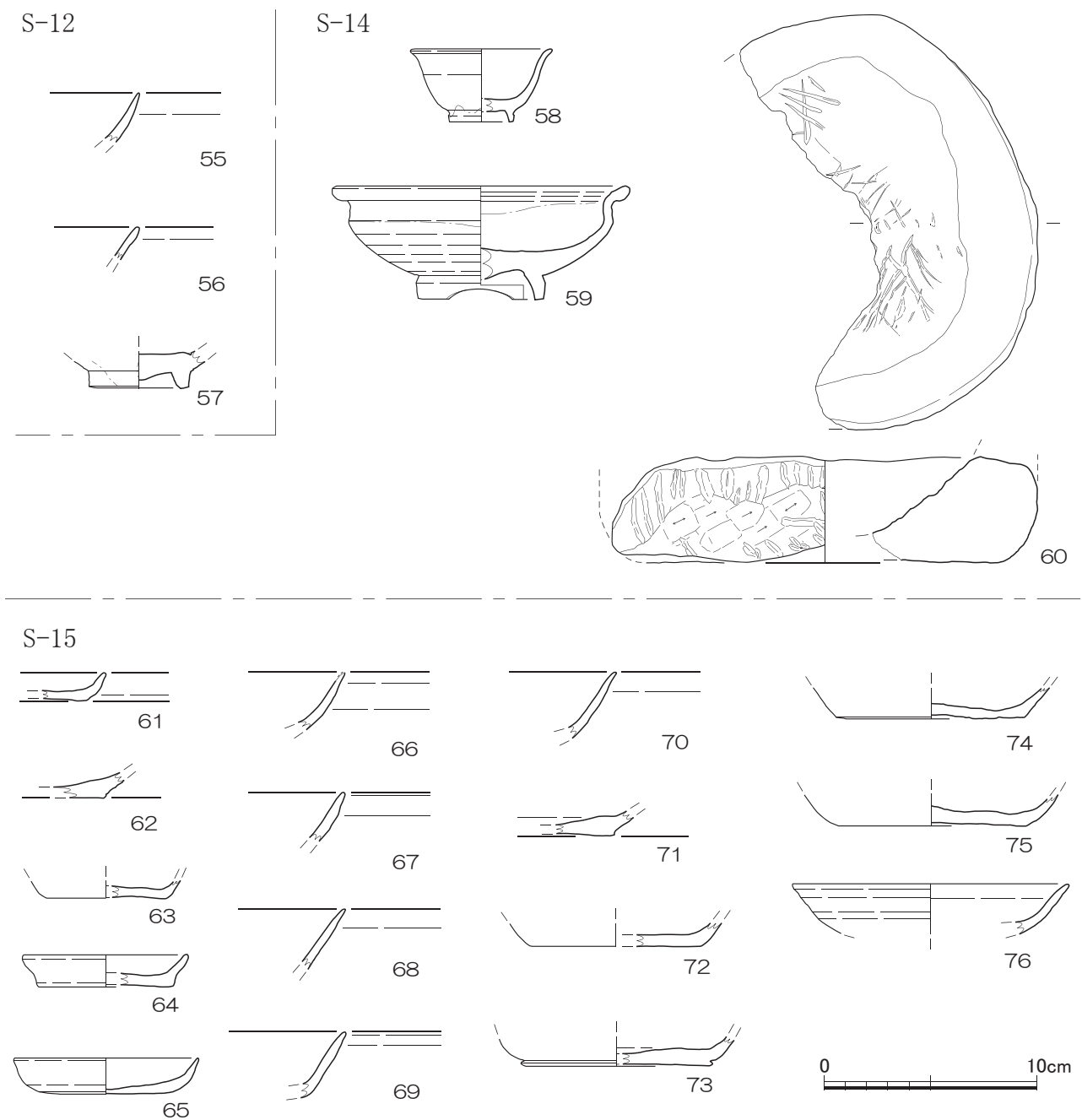


Fig.31 12号・14号・15号土坑出土土器実測図 (S=1/3)

15号土坑 (Fig.33)

調査区中央の西南寄りに位置する。主軸はN-37°-Eを測る。平面形は不定形の楕円形を呈し、主軸の長さは1.64 m、最大幅は1.74 m程、深さは0.15 m程である。床面は平坦であるが段差が付き、南側が低い。壁面はやや開き気味に立ち上がる。埋土から土器が出土しており、本遺構の時期は出土土器から13世紀後半から14世紀前半と捉えておく。

出土土器 (Fig.31 写真図版23) は、土師器(61~67)である。61~65は小皿である。66~76は坏である。全体的に摩滅が著しい。61~63、71、73、75の底部の切り離しは糸切りである。64、65、72~75の底部には板状圧痕が付く。

16号土坑 (Fig.33 写真図版16)

調査区東の東北寄りに位置する。3号溝状遺構を掘り込む。主軸はN-34°-Eを測る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸の長さは1.60 m、最大幅は1.08 m、深さは0.06 m程である。床面は平坦で、壁面はやや開きながら立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

18号土坑 (Fig.33 写真図版16)

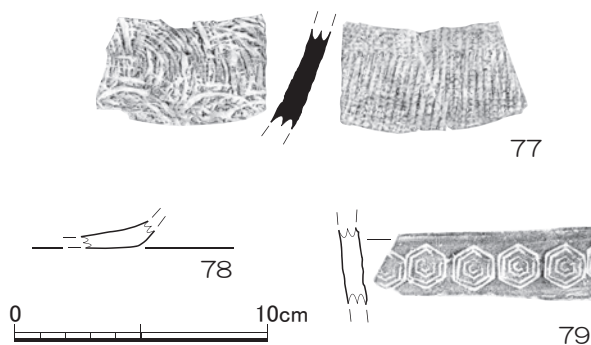
調査区中央の西寄りに位置する。船原古墳1号土坑、船原古墳6号土坑と接し、船原古墳3号土坑を掘り込んでいる。主軸はN-49°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは1.16 m、幅は0.65 m程、深さは0.30 m程である。床面は平坦で、壁面はやや開き気味に立ち上がる。埋土はトレンチの土層観察から3層に分層される。1層~3層は18号土坑の埋土、4層は船原古墳3号土坑の埋土となり、船原古墳3号土坑を切る。埋土は暗色系の粘質土である。遺構に伴う遺物はない。

19号土坑 (Fig.34 写真図版16)

調査区中央の北側調査区境界際に位置し、33号・34号土坑と接する。遺構は調査区境界にかかっていることから完掘できなかったが、平面形は長方形を呈すると思われる。主軸は調査区境界ラインに合わせて設定し、N-36°-Wを測る。長軸の長さは2.20 m、深さは最も深い所で1.54 mとなる。北西側の壁面には2段のテラスが付く。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

20号土坑 (Fig.34 写真図版17)

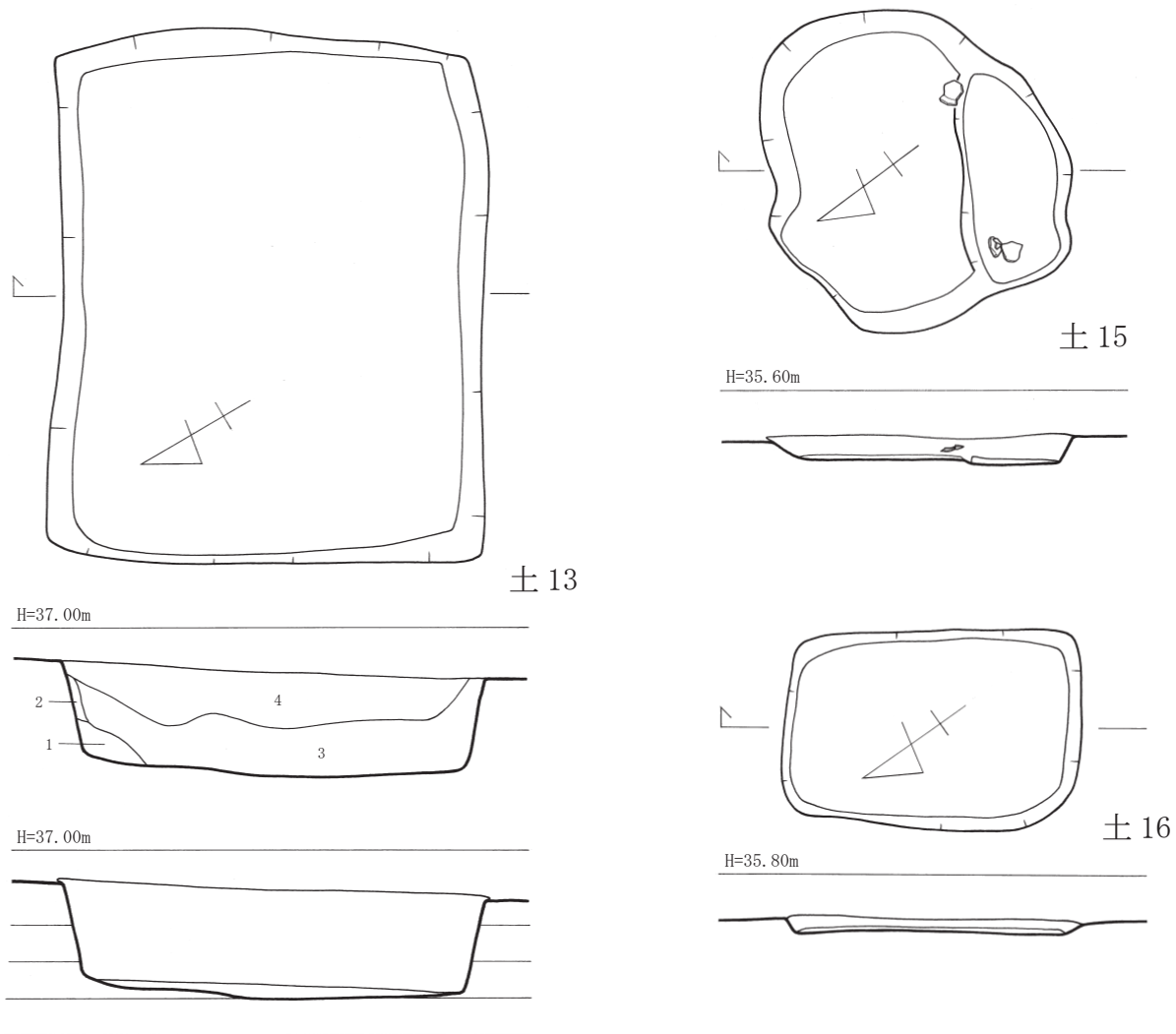
調査区西に位置する。船原古墳4号土坑、1号溝状遺構と接する。主軸はN-3°-Wを測る。平面形は長方形を呈し、南側にテラスが2段付く。長軸の長さは1.83 m、幅は1.43 m程、深さは1.24 m程である。床面は中央が若干窪む。壁面はやや開き気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。



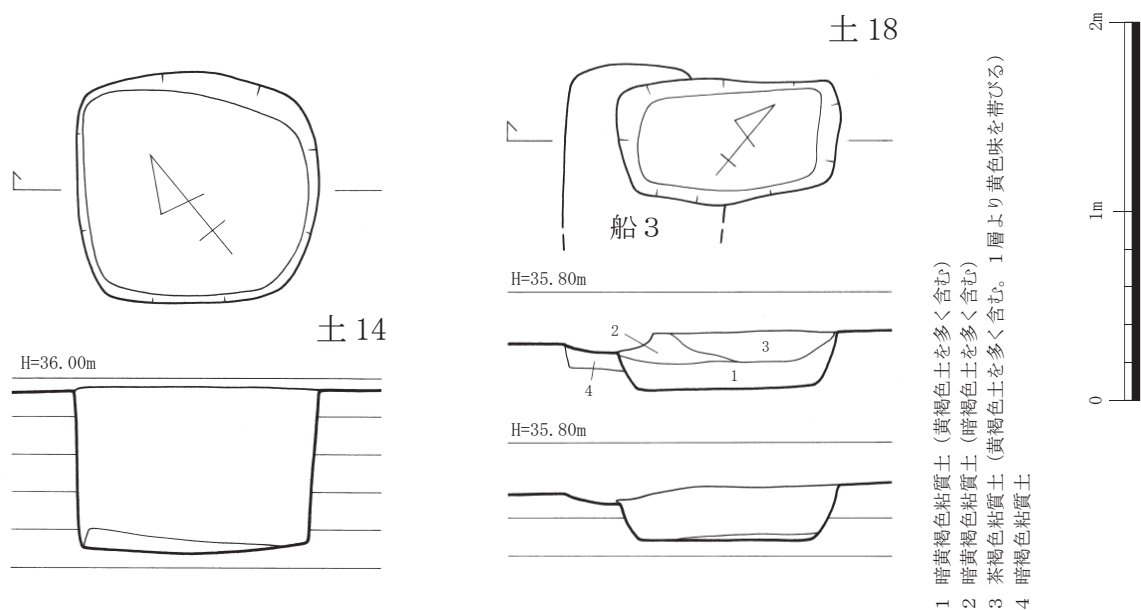
25号土坑 (Fig.34 写真図版17)

調査区西の東寄りに位置する。船原古墳1

Fig.32 25号土坑出土土器実測図 (S=1/3)



- 1 暗黄褐色粘質土 (小礫を含む 暗褐色粘土ブロックを少し含む)
- 2 暗黄褐色粘質土 (小礫を含む 暗褐色粘土ブロックを少し含む)
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗灰茶褐色砂質土 (礫を含む)



- 1 暗黄褐色粘質土 (黄褐色土を多く含む)
- 2 暗黄褐色粘質土 (暗褐色土を多く含む)
- 3 茶褐色粘質土 (黄褐色土を多く含む。1層より黄色味を帯びる)
- 4 暗褐色粘質土

Fig.33 13号・14号・15号・16号・18号土坑実測図 (S=1/40)

号土坑、26号土坑、1号溝状遺構に接する。平面形は不定形な長方形を呈する。長軸はN-46°-Eを測る。長軸の長さは3.77m、最大幅は2.17m、深さは最も深い所で0.24mとなる。北側隅は方形に一段掘り込まれ、更にピットが複数重なって掘り込まれている。床面は僅かに段差が付きながら、北東側を下がる。壁面は開き気味に立ち上がる。埋土は土層観察から3層に分層される。

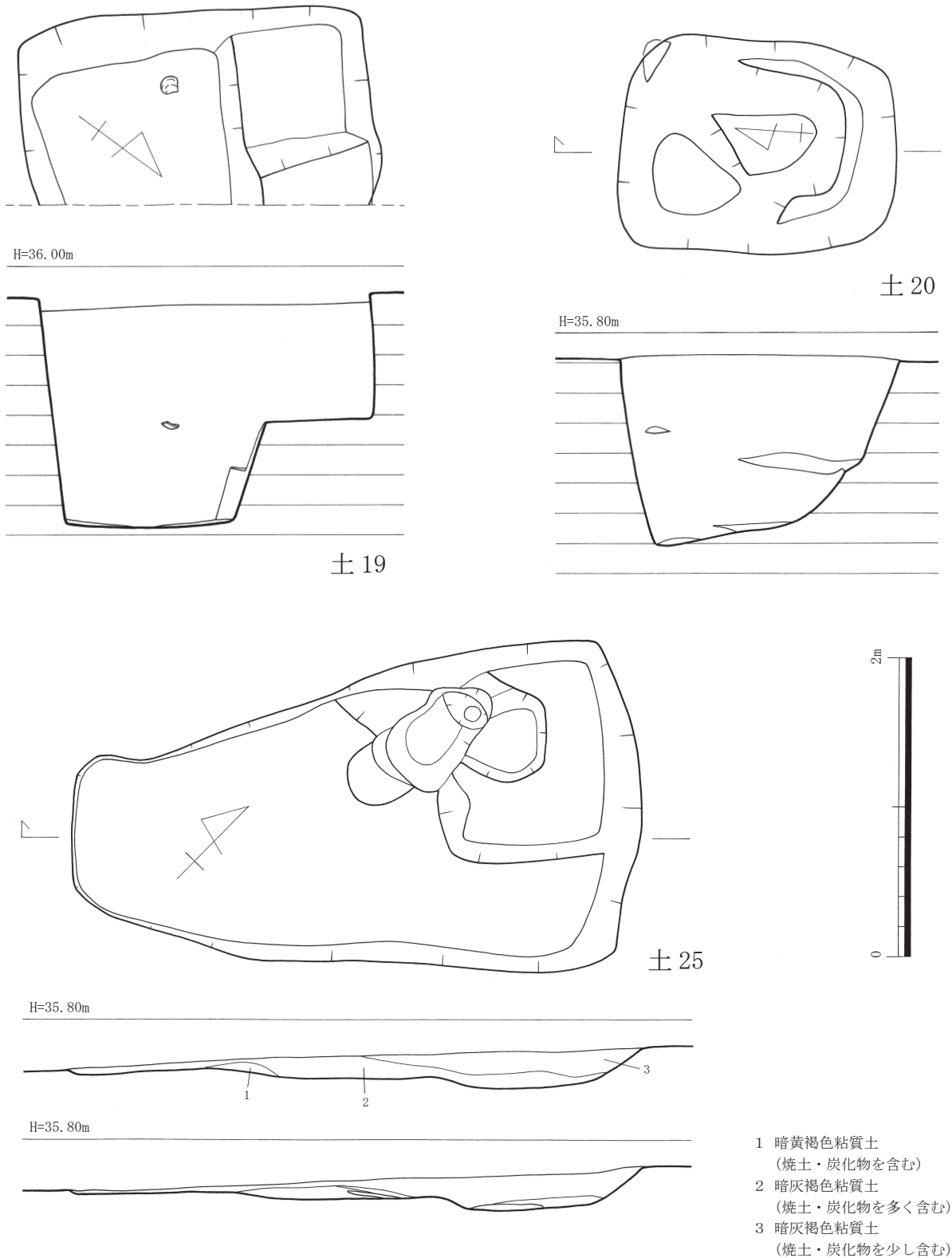


Fig.34 19号・20号・25号土坑実測図 (S=1/40)

1層は暗黄褐色粘質土で焼土と炭化物を含む。2層と3層は同じ暗灰褐色粘質土であるが、下層の2層は焼土と炭化物を多く含み、上層の3層はわずかしかなか含まない。埋土から土器が出土しており、本遺構の時期は出土土器から17世紀代と捉えておく。

出土土器 (Fig.32 写真図版23) は、須恵器(77)、土師器(78)、瓦質土器(79)である。77は甕の胴部である。78は坏の底部である。79は火舎である。肩部に型押文のスタンプが1列廻る。

26号土坑 (Fig.35 写真図版17)

調査区西の東寄りに位置する。船原古墳1号土坑、25号土坑、1号溝状遺構に接する。平面形は長方形を呈する。長軸はN-37°-Eを測る。長軸の長さは4.24 m、最大幅は2.17 m、深さは最も深い所で0.30 mとなる。床面は、掘方床面とは別に焼土化した面があり、上層の埋土と別けることができる。焼土化した面の南壁側は、テラス状に高くなる。壁面は開き気味に立ち上がる。掘方の床面中央には、長軸方向に浅い溝が1条掘り込まれている。溝の長さは3.70 m、幅は0.16 m前後、深さは0.04 m程である。また、床面から壁面にかけて赤く焼けた焼土面が数カ所確認できる。埋土は土層観察から16層に分層される。1層から4層は茶褐色系と暗褐色系の粘質土で2層は炭化物を多く含む。5層から14層は焼土化した面の下層となり、焼土、炭化物、花崗岩の地山ブロックを含む。特に、南壁側は1段高くテラス状になり、端部から幅0.30 mが带状に強く焼土化している。遺構は15層の暗褐色系の包含層から掘り込まれている。遺構に伴う遺物はない。

27号土坑 (Fig.35)

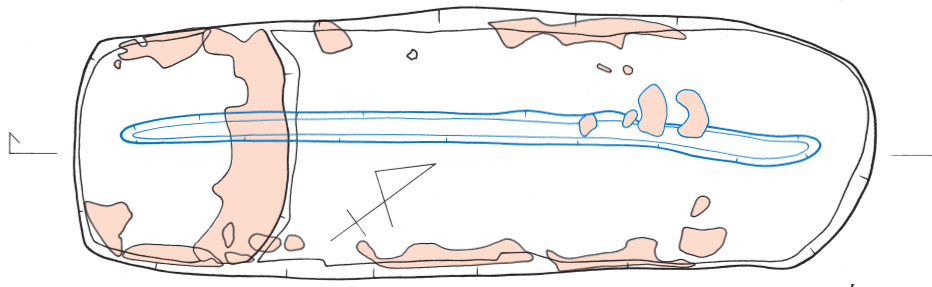
調査区中央の北側調査区境界際に位置し、船原古墳3号土坑、18号・28号・29号・30号土坑に接する。遺構は調査区境界にかかっていることから完掘できなかったが、平面形は不定形の長方形を呈すると思われる。主軸は調査区境界ラインに合わせて設定し、N-46°-Wを測る。主軸の長さは2.16 m、深さは最も深い所で0.33 m程である。床面は凸レンズ状を呈して中央が窪み、両側にテラスが付く。壁面はやや開きながら立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

28号土坑 (Fig.35)

調査区中央の北寄りに位置する。船原古墳3号土坑、船原古墳5号土坑、27号・30号・32号土坑と接する。主軸はN-1°-Eを測る。平面形は楕円形を呈し、主軸の長さは1.17 m、最大幅は1.08 m、深さは最も深い所で0.56 mである。床面は凸レンズ状を呈し、中央が窪む。壁面はやや開きながら立ち上がる。埋土は土層観察から2層に分層される。1層は茶褐色粘質土、2層は暗茶褐色粘質土で礫を含む。遺構に伴う遺物はない。

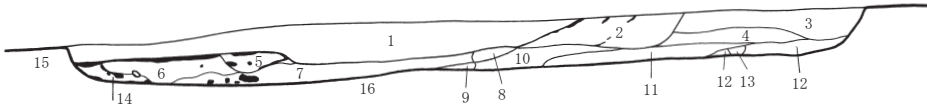
29号土坑 (Fig.35)

調査区中央の北側調査区境界際に位置する。船原古墳5号土坑、27号・33号土坑に接し、30号土坑に掘り込まれる。また、南西側の壁はピットに掘り込まれている。遺構は調査区境界にかかっていることから完掘できなかったが、平面形は長方形を呈すると思われる。主軸は調査区境界ラインに合わせて設定し、N-47°-Wを測る。主軸の長さは、北西側を30号土坑に掘り込まれているが、3.67 m以内に収まる。遺構は2段掘りとなり、北西側にテラスが付く。テラスには楯鉢状の掘り込みがあり、掘り込みの中央は平坦になる。深さは0.47 mを測る。南東側は1段深くなり、床面は平坦で西側が高くなる。壁面は垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。



± 26

H=36.00m



H=36.00m

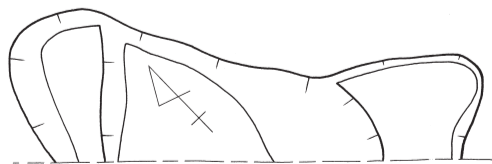


H=36.00m

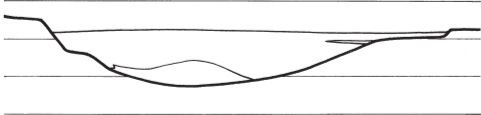


- 9 黄土色粘質土 (花崗岩土ブロック)
- 10 暗褐色粘質土
- 11 茶褐色粘質土 (焼土ブロック・炭化物・花崗岩土を含む)
- 12 褐色粘質土 (炭化物を少し含む)
- 13 黄褐色粘質土 (11層の混入)
- 14 茶褐色粘質土 (炭化物を多く含む)
- 15 暗褐色粘質土 (包含層)
- 16 黄土色粘質土 (f堆積土)

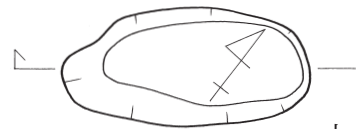
- 1 茶褐色粘質土 (炭化物を多く含む)
- 2 暗褐色粘質土 (炭化物を多く含む)
- 3 茶褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 赤橙粘質土 (焼土)
- 6 灰茶褐色粘質土 (焼土ブロック・炭化物を少し含む)
- 7 茶褐色粘質土 (炭化物を含む)
- 8 暗黄土色粘質土 (汚れた花崗岩土ブロック)



H=35.80m



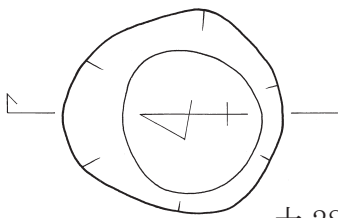
± 27



H=35.80m



± 30

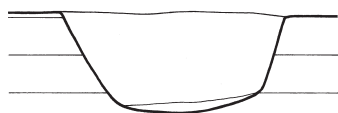


H=35.80m

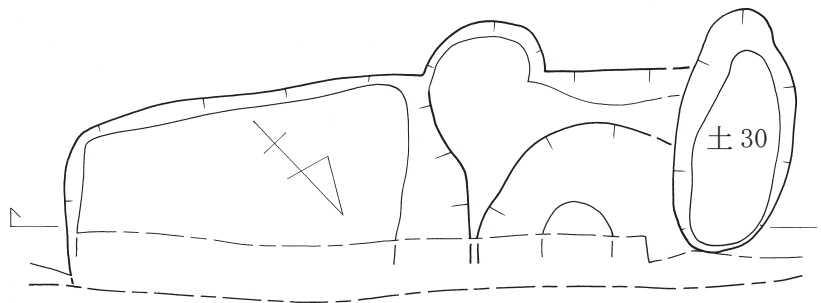
± 28



H=35.80m



- 1 茶褐色粘質土
- 2 暗茶褐色粘質土 (礫を含む)



H=36.20m

± 29

Fig.35 26号・27号・28号・29号・30号土坑実測図 (S=1/40)

本遺構は、土層観察ができていないため、構造が判然としない。構造的には、2段掘りの遺構のようにもみられるが、単に2つの遺構が切り合っているだけかもしれない。また、テラスの掘り込みが別遺構になる可能性もある。

30号土坑 (Fig.35)

調査区中央の西寄りに位置する。船原古墳5号土坑、27号・28号・32号土坑と接し、29号土坑を掘り込む。主軸はN-54°-Eを測る。平面形は楕円形を呈し、長軸の長さは1.32m、幅は0.65m程、深さは0.26m程である。床面は平坦で、壁面はやや開き気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

32号土坑 (Fig.36 図版17)

調査区中央の北寄りに位置する。28号・29号・30号土坑と接し、船原古墳5号土坑を掘り込む。主軸はN-79°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは1.97m、最大幅は1.59m、深さは0.51m程である。床面は平坦で、壁面はやや開きながら立ち上がる。埋土は土層観察から5層に分層される。1層は暗灰褐色砂質土、2層から5層は暗褐色系の粘質土である。また、1層から4層は礫を多く含む。遺構に伴う遺物はない。

33号土坑 (Fig.36)

調査区中央の北寄りに位置する。28号・29号・30号土坑と接し、船原古墳5号土坑を掘り込む。主軸はN-37°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは2.23m、幅は1.59m程、深さは0.19m程である。床面は平坦で中央が若干窪み、壁面はやや垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

35号土坑 (Fig.36 写真図版17)

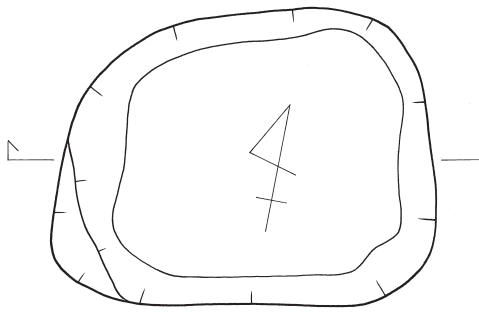
調査区中央の北寄りに位置する。船場古墳5号土坑、68号土坑と接する。主軸はN-72°-Wを測る。平面形は不定形の楕円形を呈し、主軸の長さは1.77m、最大幅は1.65m、深さは0.07m程である。床面は平坦で、壁面はやや垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

36号土坑 (Fig.36 写真図版17)

調査区中央に位置する。11号・13号・45号・69号・70号土坑と接する。長軸はN-55°-Wを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは2.88m、幅は2.35m程、深さは1.60m程である。床面は平坦で、壁面はやや垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

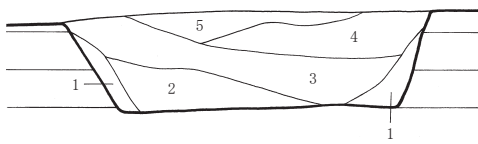
37号土坑 (Fig.36)

調査区中央に位置する。38号・41号土坑と接し、11号土坑に掘り込まれる。主軸はN-63°-Wを測る。遺構の西側を掘り込まれているが、平面形は遺存する形状から長方形を呈すると思われる。主軸の長さは1.08m、幅は1.40m程、深さは0.07m程である。床面は平坦で、壁面はやや開き気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

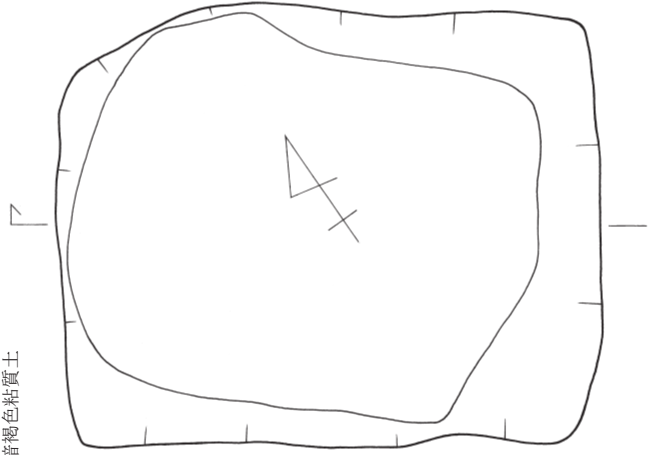


± 32

H=36.00m

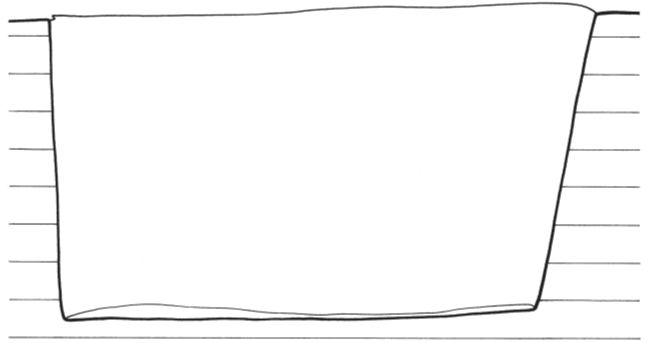


- 1 暗灰褐色砂質土 (礫を含む)
- 2 暗褐色粘質土 (礫を含む)
- 3 暗褐色砂質土 (礫を含む)
- 4 暗褐色粘質土 (礫を含む)
- 5 暗褐色粘質土

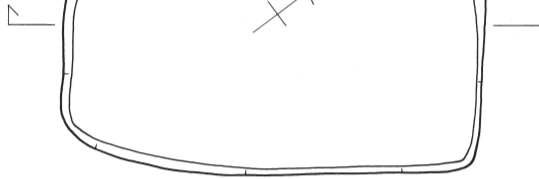


± 36

H=36.00m

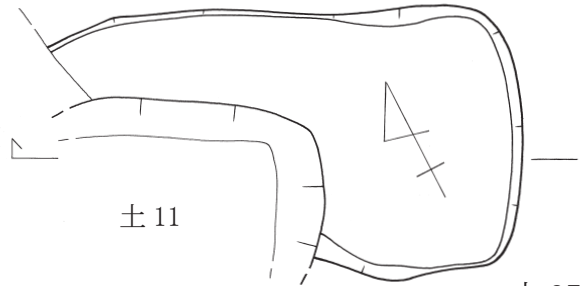


H=36.00m



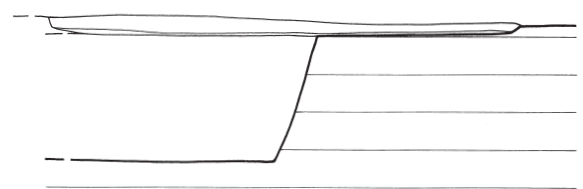
± 33

H=36.00m



± 37

H=36.00m



± 35

H=36.00m

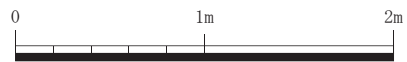
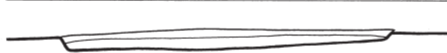


Fig.36 32号・33号・35号・36号・37号土坑実測図 (S=1/40)

38号土坑 (Fig.38 写真図版 17)

調査区中央の北寄りに位置する。39号土坑と接する。主軸はN-30°-Wを測る。平面形は不定形の長方形を呈し、長軸の長さは2.26 m、幅は1.21 m程、深さは1.85 m程である。西壁にテラスが付き、床面は平坦で中央が若干窪み、壁面はやや垂直気味に立ち上がる。南側の壁体は一部崩落している。遺構に伴う遺物はない。

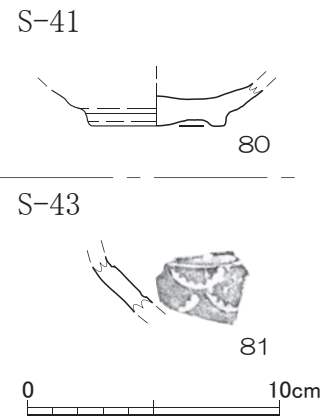
40号土坑 (Fig.38 写真図版 17)

調査区東の北寄りに位置する。39号土坑と接する。主軸はN-30°-Wを測る。平面形は不定形な楕円形を呈し、長軸の長さは2.24 m、最大幅は1.28 m程、深さは最も深い所で0.23 mとなる。床面は平坦で中央が若干窪み、壁面はやや開き気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

41号土坑 (Fig.38 写真図版 18)

調査区中央に位置する。11号・13号・17号・37号・38号・42号・44号土坑と接する。主軸はN-44°-Wを測る。平面形は正方形に近い長方形を呈し、長軸の長さは1.80 m、幅は1.50 m程、深さは0.60 m程である。床面は中央が凸レンズ状に窪み、壁面はやや開き気味に立ち上がる。

出土土器 (Fig.37 写真図版 23) は、陶器 (80) である。80は碗の底部である。



42号土坑 (Fig.38 写真図版 18)

調査区中央の東寄りに位置する。17号・38号・39号・46号土坑と接する。主軸はN-35°-Eを測る。平面形は方形に近い長方形を呈し、長軸の長さは2.54 m、幅は2.08 m程、深さは0.37 m程である。床面は平坦で中央が若干窪む。壁面はやや開きながら立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

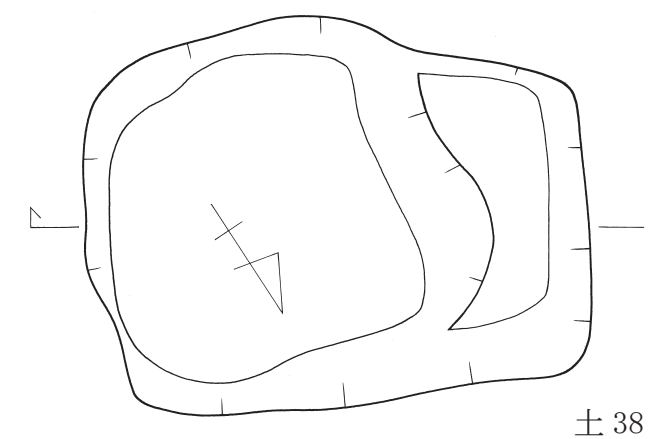
43号土坑 (Fig.38 写真図版 18)

調査区中央の東寄りに位置する。2号・12号・13号・16号・41号・42号土坑と接し、17号土坑と44号土坑を掘り込む。主軸はN-77°-Wを測る。平面形は楕円形を呈し、長軸の長さは1.25 m、最大幅は1.05 m、深さは0.36 m程である。床面は平坦で、東側にテラス付く。壁面はやや開きながら立ち上がる。

出土土器 (Fig.37 写真図版 23) は、瓦質土器 (81) である。81は残りが悪く、器種は不明である。

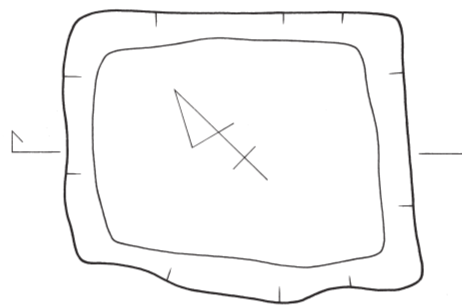
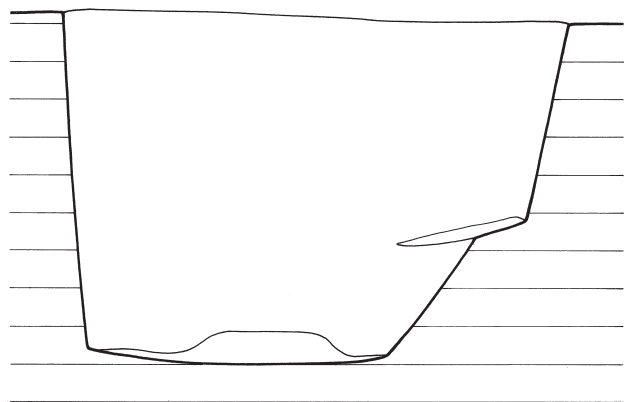
44号土坑 (Fig.40 写真図版 18)

調査区中央の東寄りに位置する。2号・12号・13号・16号・41号・42号土坑と接する。17号土坑の西壁を掘り込み、43号土坑に北東隅を掘り込まれる。主軸はN-19°-Eを測る。平面形は方形に近い長方形を呈し、長軸の長さは2.28 m、幅は1.77 m程、深さは0.22 m程である。床面は平坦で北東側が若干高くなる。壁面はやや開きながら立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。



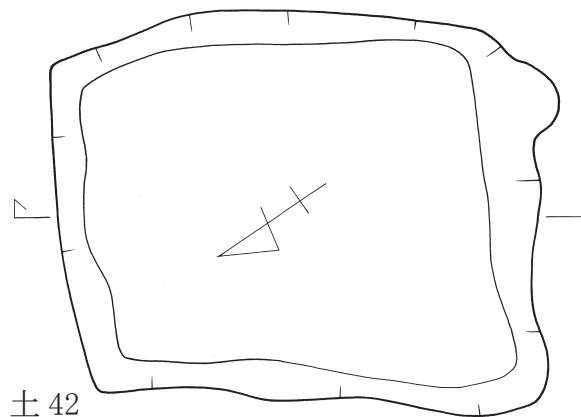
± 38

H=36.00m



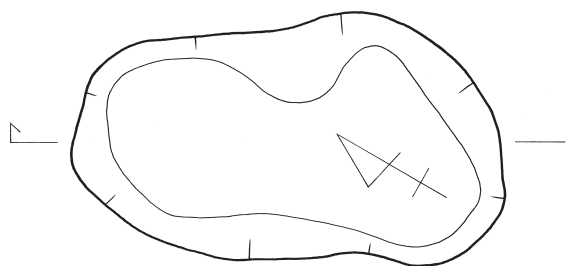
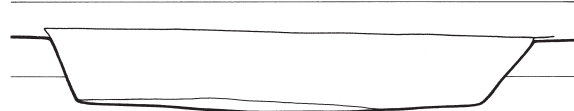
± 41

H=36.00m



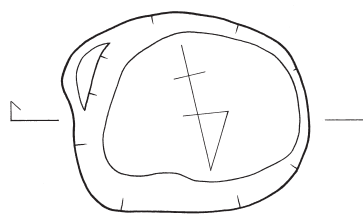
± 42

H=35.80m



± 40

H=35.80m



± 43

H=36.00m



Fig.38 38号·40号·41号·42号·43号土坑实测图 (S=1/40)

45号土坑 (Fig.40)

調査区中央の南寄りに位置する。12号・13号・36号・73号土坑と接する。主軸はN-59°-Eを測る。平面形は方形に近い楕円形を呈し、主軸の長さは2.95m、最大幅は3.20m、深さは最も深い所で0.42m程である。床面の南半分は平坦であるが、北側が低くなり、北西隅には浅いピットが掘り込まれている。また、北西隅にはテラスが付き、北壁の際には径0.20m程のピットが3つ掘り込まれている。壁面はやや開きながら立ち上がる。埋土からは土器が出土しており、本遺構の時期は出土土器から13世紀後半から14世紀前半と捉えておく。

出土土器 (Fig.39 写真図版23) は、土師器(82、83)、龍泉窯系青磁(84)、白磁(85)である。82、83は坏の底部である。底部の切り離しは糸切りである。84は碗である。器壁外面に鎬蓮弁文を施す。85は皿である。口唇は口禿である。

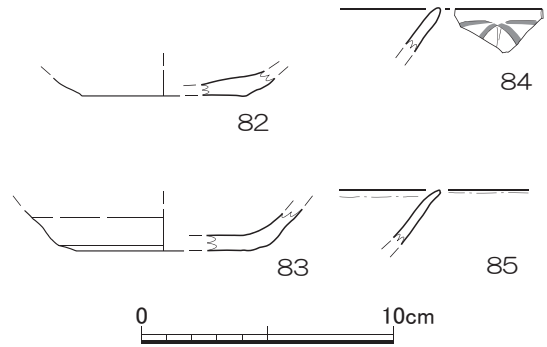


Fig.39 45号土坑出土土器実測図 (S=1/3)

46号土坑 (Fig.41、写真図版18)

調査区東の西寄りに位置する。17号・40号・52号・53号・54号土坑と接する。主軸はN-35°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは3.08m、最大幅は2.52m、深さは0.50m程である。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。

47号土坑 (Fig.41)

調査区東の西寄りに位置する。46号・49号・54号土坑、2号溝状遺構と接し、48号土坑に掘り込まれる。主軸はN-32°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは2.17m、最大幅は1.82m、深さは最も深い所で1.52m程である。遺構は2段に掘り込まれ、北東半分にテラスが付く。テラスは長軸に直交して更に浅い段が付く。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。本遺構と構造的に類似する遺構として19号土坑、57号土坑がある。

48号土坑 (Fig.40 写真図版18)

調査区東に位置する。49号・54号土坑、2号溝状遺構と接し、47号土坑を掘り込む。主軸はN-3°-Wを測る。遺構は南方向に袋状に地下へと掘り込まれ、壁体はオーバーハングしている。平面形は上端が不定形の長方形を呈し、床面は楕円形を呈す。土坑の上端は穴の入口となり、東側と北側の壁体にテラスが付く。テラスは地表から0.40m(東側壁体)と1.45m(北側壁体)の位置にあり、階段状になっていない。構造的には、一見すると袋状の貯蔵穴のようにも見えるが、穴は礫層を掘り込み花崗岩土の基盤層まで達している。このため、床面に水が溜まることから貯蔵穴とは考えにくい。上端の主軸の長さは0.93m、最大幅は1.38m、深さは1.94m程である。床面の主軸は1.18m、最大幅は1.04mとなり、平坦である。遺構に伴う遺物はない。

49号土坑 (Fig.40 写真図版18)

調査区東の北寄りに位置する。47号・51号土坑と接する。主軸はN-90°-Wを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸の長さは1.56m、最大幅は1.34m、深さは最も深い所で0.90mである。

床面は平坦であるが、西側が高くなる。壁面はやや開き気味に立ち上がる。床面は南西隅を掘り込み、壁体がオーバーハングしているが、掘り過ぎの可能性はある。遺構に伴う遺物はない。

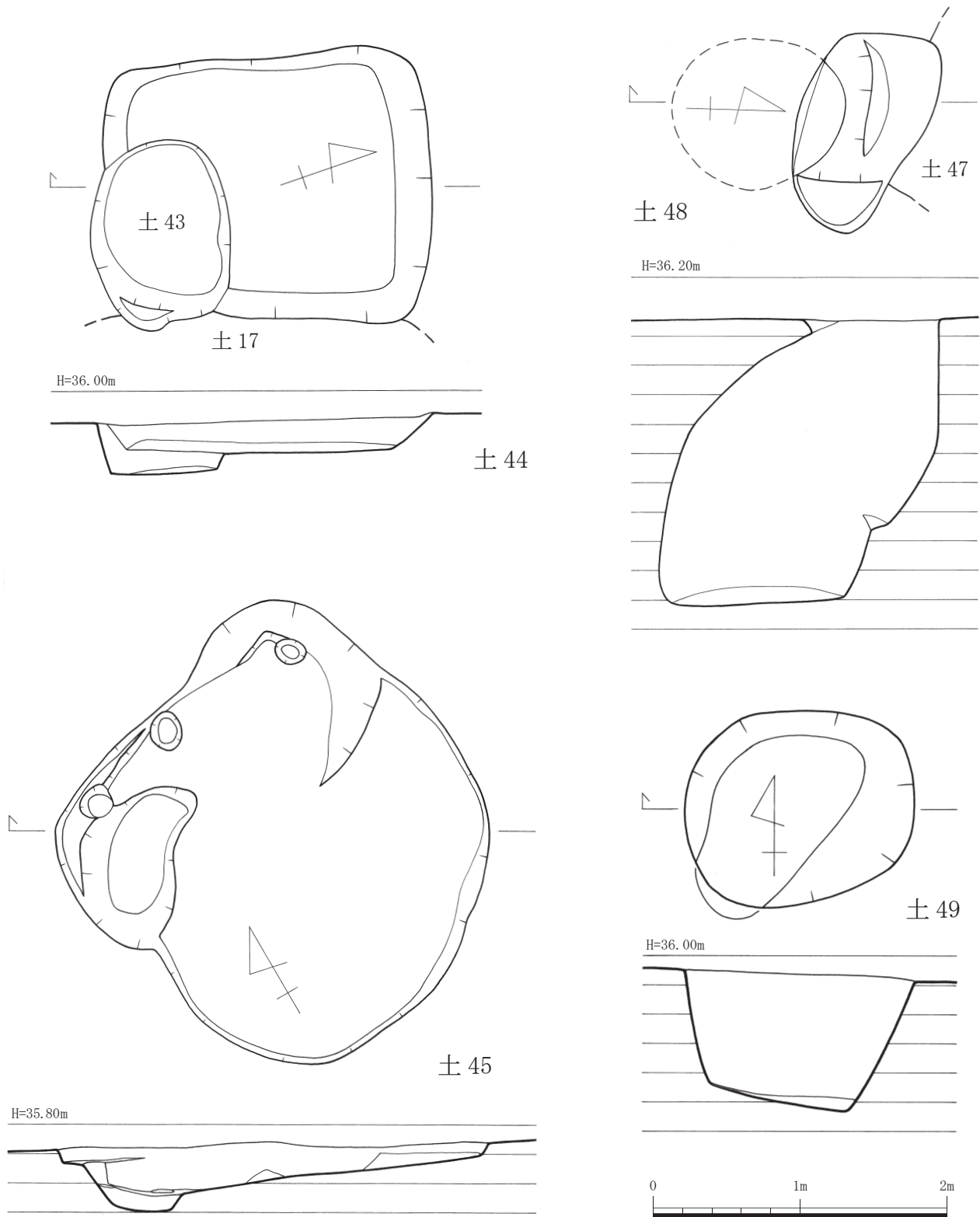


Fig.40 44号・45号・48号・49号土坑実測図 (S=1/40)

50号土坑 (Fig.41 写真図版 18)

調査区東の北寄りに位置する。49号土坑と接し、51号土坑を掘り込む。主軸はN-51°-Wを

測る。平面形は楕円形を呈し、主軸の長さは 1.49 m、最大幅は 1.53 m、深さは最も深い所で 0.79 m である。床面は平坦であるが、北西に向かって低くなり、北西壁際を一段深く掘り込んでいる。壁面はやや開き気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

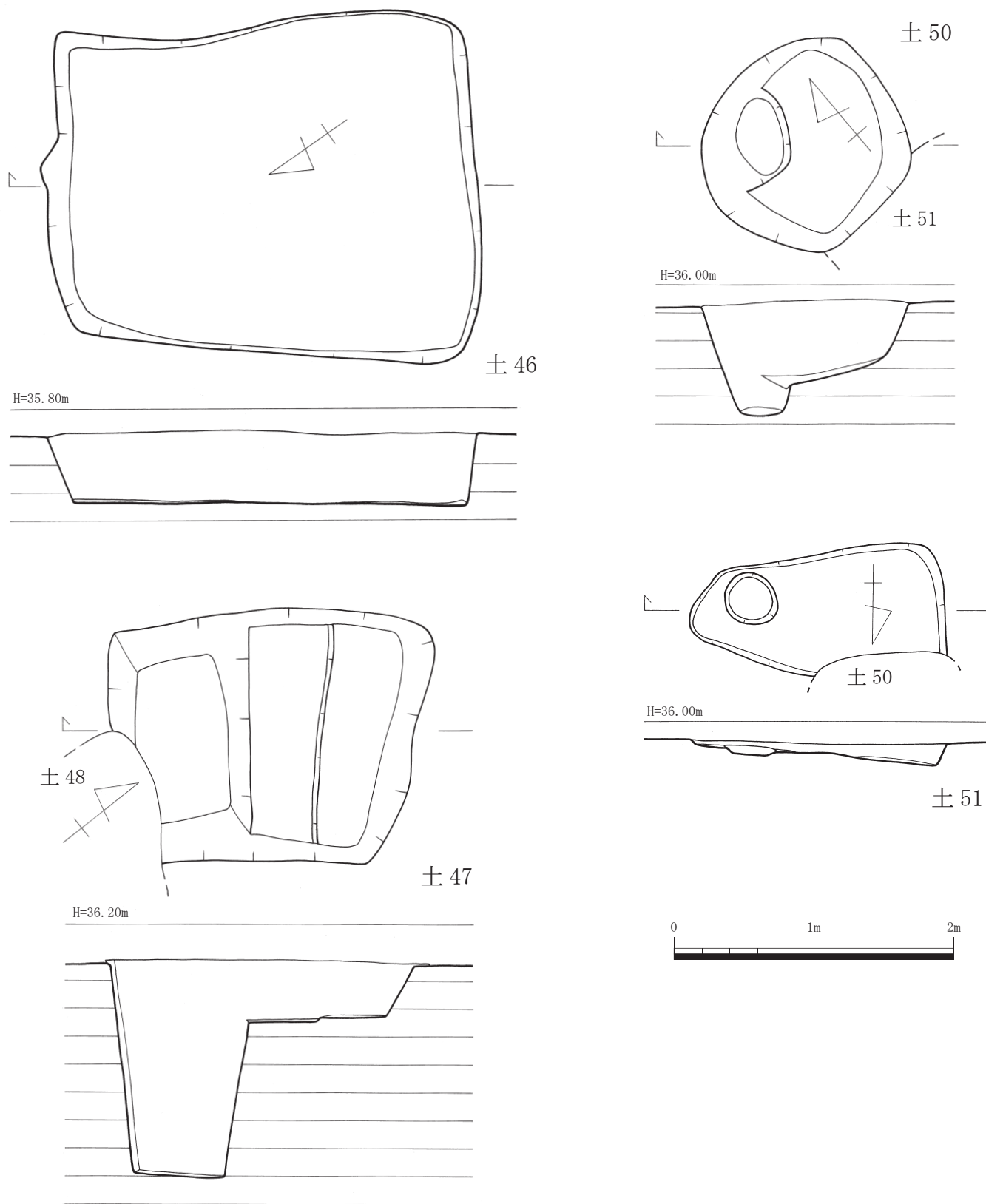


Fig.41 46号・47号・50号・51号土坑実測図 (S=1/40)

51号土坑 (Fig.41)

調査区東の西寄りに位置する。49号土坑と接し、50号土坑に掘り込まれている。主軸はN-90°-Eを測る。平面形は不定形の長方形を呈し、長軸の長さは1.82m、残存する最大幅は0.87m、深さは最も深い所で0.16mである。床面東側には径0.38m程の浅い穴が1つある。床面は平坦であるが、西側に向かって低くなる。壁面は垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

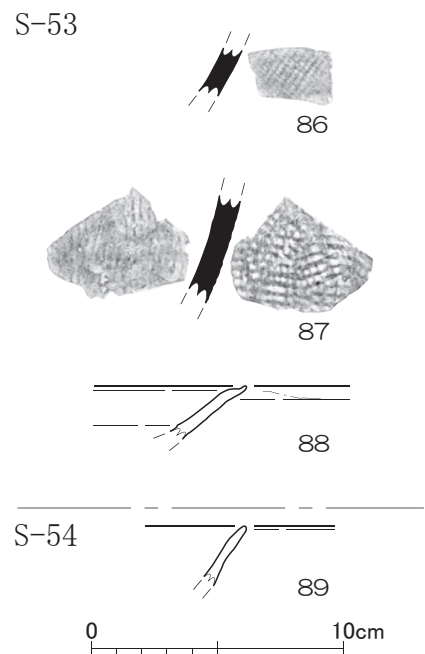
52号土坑 (Fig.43 写真図版19)

調査区中央の北寄りに位置する。船原古墳3号土坑、船原古墳5号土坑、27号・30号・32号土坑と接する。主軸はN-1°-Eを測る。平面形は不定形な長方形を呈し、主軸の長さは1.17m、最大幅は1.08m、深さは0.10m程である。床面は水平を保つが、若干の凹凸がある。壁面はやや開きながら立ち上がる。埋土は土層観察により4層に分層されているが、基本的には暗茶褐色粘質土であり、炭化物と焼土を含む比率により細分している。

53号土坑 (Fig.44 写真図版19)

調査区東の西寄りに位置する。3号・46号・52号・54号・55号・56号土坑と接する。主軸はN-37°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは2.30m、最大幅は1.60m、深さは0.19m程である。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。

出土土器 (Fig.42 写真図版23) は、須恵器(86、87)、陶器(88)である。86、87は甕の胴部である。88は皿の口縁部である。



54号土坑 (Fig.43 写真図版19)

調査区東に位置する。46号・47号・48号・56号・57号土坑、2号溝状遺構と接する。主軸はN-31°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは3.83m、幅は2.50m程、深さは1.79m程である。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。北東隅の壁体にテラスが付く。

出土土器 (Fig.42 写真図版23) は、土師器(89)である。89は坏の口縁である。

55号土坑 (Fig.44)

調査区西の東寄りに位置する。7号・17号・52号・53号・56号土坑と接し、3号土坑に掘り込まれている。主軸はN-14°-Eを測る。平面形は円形を呈し、主軸は残存長で1.05m、最大幅は1.21mである。遺構は3段に掘り込まれており、最も深い3段目の深さは0.77m程となる。1段目の床面は南側に傾斜し、最も深い所で0.25m程掘り込む。2段目は土坑中央北寄りを掘り込み、床面は北側に強く傾斜して最も深い所で0.62mを測る。3段目は北壁際を掘り込み、床面は平坦となる。遺構に伴う遺物はない。

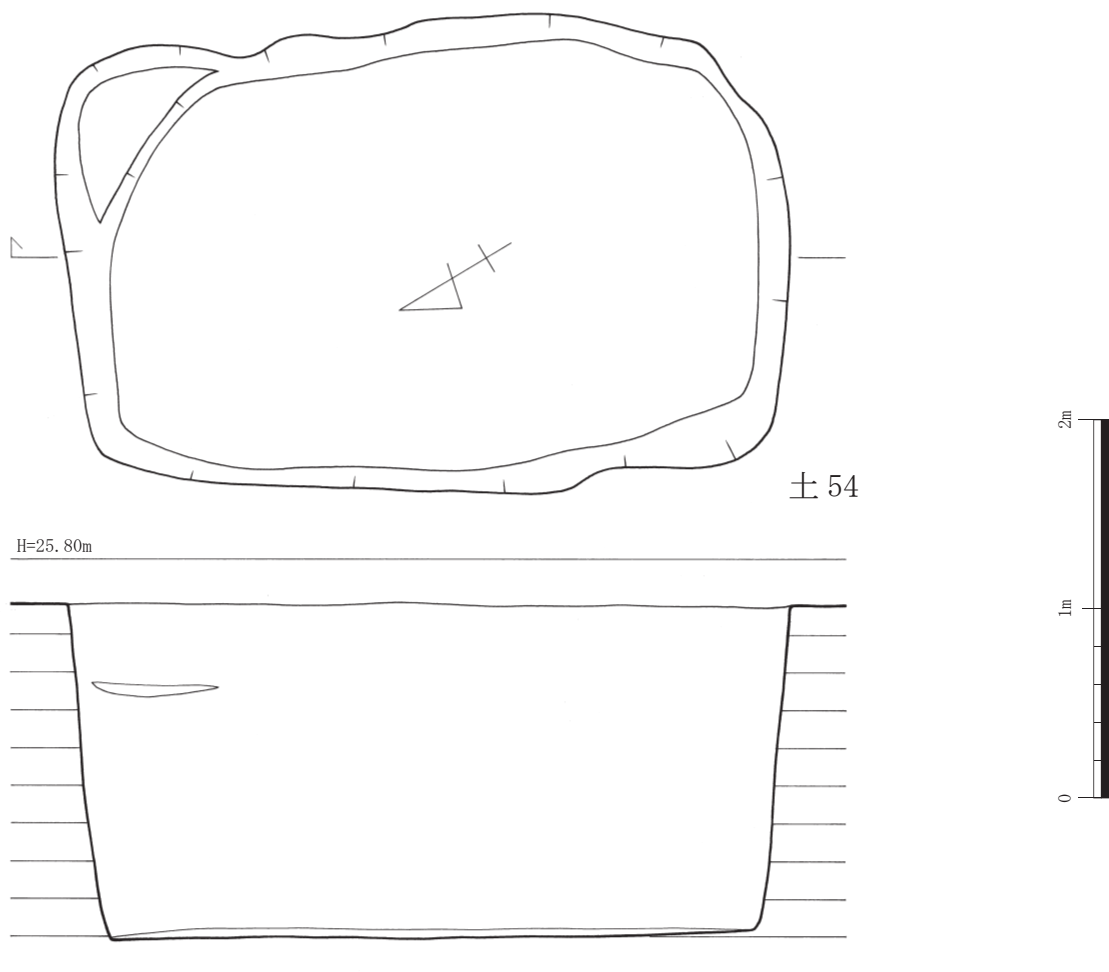
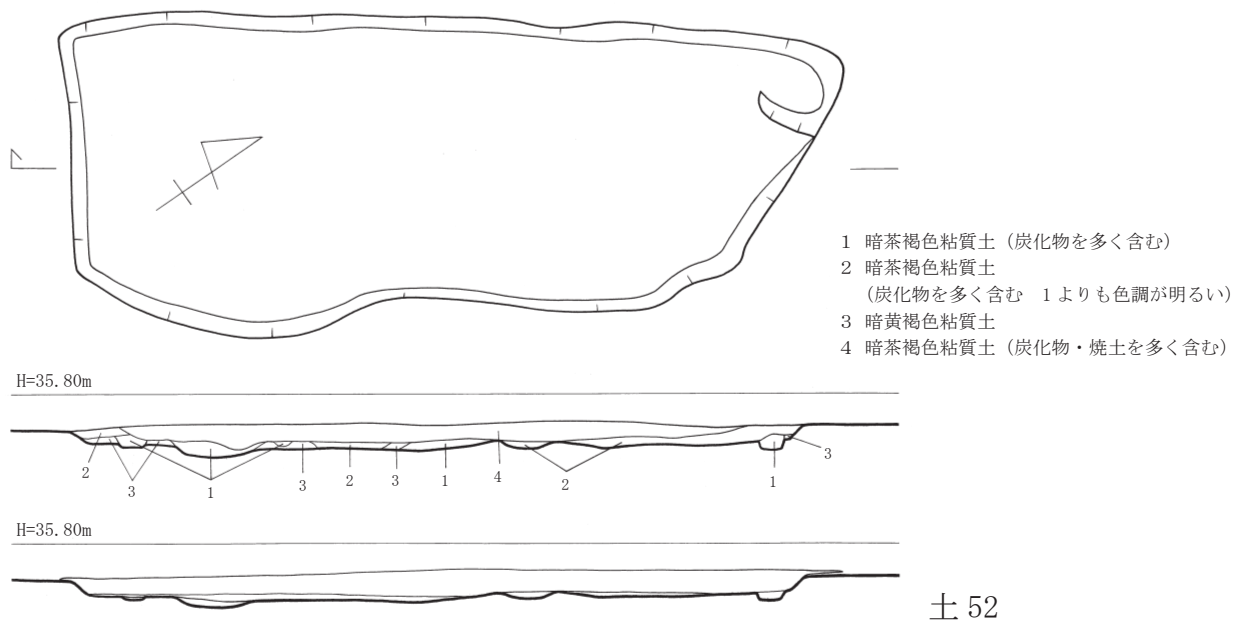
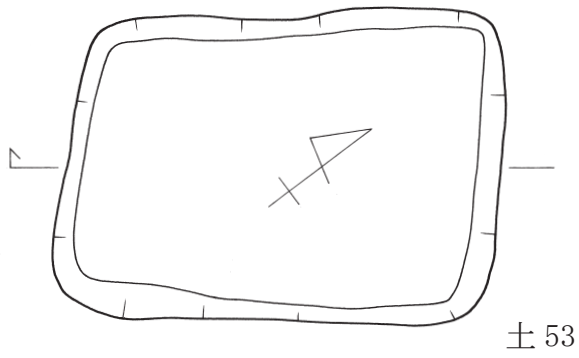
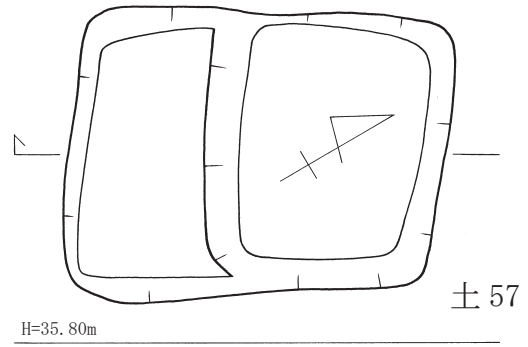


Fig.43 52号・54号土坑実測図 (S=1/40)



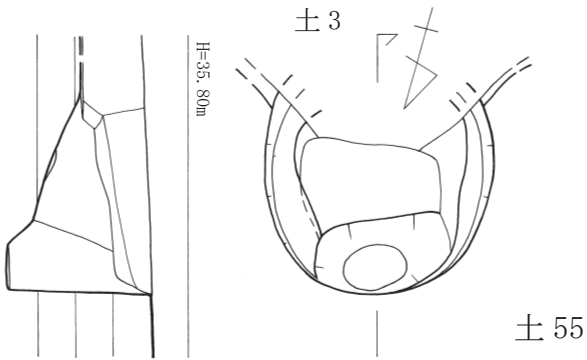
± 53

H=35.80m



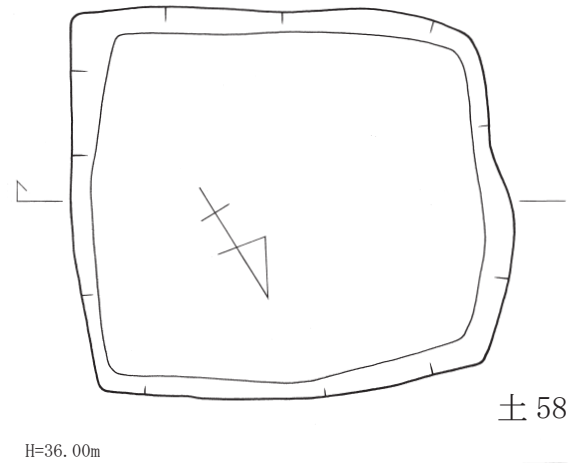
± 57

H=35.80m



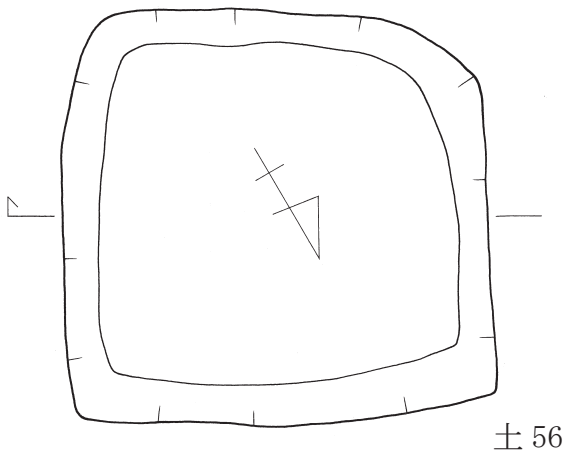
± 55

H=35.80m



± 58

H=36.00m



± 56

H=36.00m



Fig.44 53号·55号·56号·57号·58号土坑实测图 (S=1/40)

56号土坑 (Fig.44 写真図版 19)

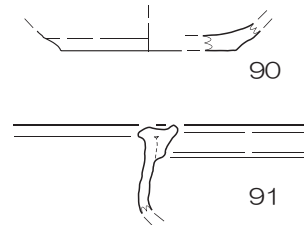
調査区東に位置する。3号・53号・55号・57号・58号土坑と接する。主軸はN-60°-Wを測る。平面形は方形を呈し、主軸の長さは2.26 m、最大幅は2.20 m、深さは0.54 m程である。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

57号土坑 (Fig.44 写真図版 19)

調査区東に位置する。54号・56号土坑、2号溝状遺構と接する。主軸はN-31°-Eを測る。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは2.00 m、最大幅は1.50 m程、深さは最も深い所で1.65 m程である。遺構は2段に掘り込まれ、南西半分にはテラスが付く。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。本遺構の時期は出土土器から17世紀代と捉えておく。

出土土器 (Fig.45 写真図版 23) は、土師器 (90)、陶器 (91) である。90は坏の底部である。91は壺の口縁部である。

S-57



S-58

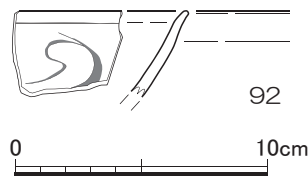


Fig.45 57号・58号土坑
出土土器実測図 (S=1/3)

58号土坑 (Fig.44 写真図版 19)

調査区東に位置する。4号・56号土坑と接する。主軸はN-58°-Wを測る。平面形は方形に近い長方形を呈し、主軸の長さは2.33 m、最大幅は2.06 m、深さは0.30 m程である。床面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。埋土から土器が出土しており、本遺構の時期は出土土器から12世紀中頃から後半と捉えておく。

出土土器 (Fig.45 写真図版 23) は、龍泉窯系青磁 (92) である。92は碗である。器壁内面にへう描き文を施す。

62号土坑 (Fig.46 写真図版 19)

調査区中央の西寄りに位置する。66号・67号土坑と接し、63号土坑に掘り込まれる。長軸はN-75°-Eを測る。平面形は不定形の楕円形を呈し、長軸の残存長は2.88 m、最大幅は1.60 m、深さは0.10 m程である。床面は平坦で、壁面はやや垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

63号土坑 (Fig.46 写真図版 19)

調査区中央の西寄りに位置する。64号・66号・67号土坑と接し、62号土坑を掘り込む。主軸はN-61°-Wを測る。平面形は長方形を呈し、主軸の長さは2.93 m、最大幅は1.66 m、深さは0.12 m程である。床面は平坦で、壁面は開きながら立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

64号土坑 (Fig.46)

調査区中央の西寄りに位置する。63号・65号土坑と接する。主軸はN-50°-Eを測る。平面形は溝状の楕円形を呈す。土坑の長軸方向の両端にはテラスが付き、その内側にピット状の掘り込みがある。土坑中央の床面には段差があり、西側が若干高く、それぞれの中央は若干窪む。長軸の長さは3.50 m、幅は0.54 m程、深さは中央付近で0.57 m程である。壁面は開き気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

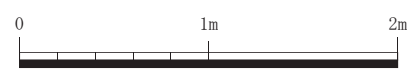
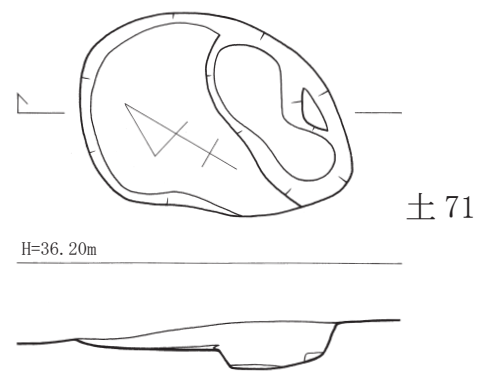
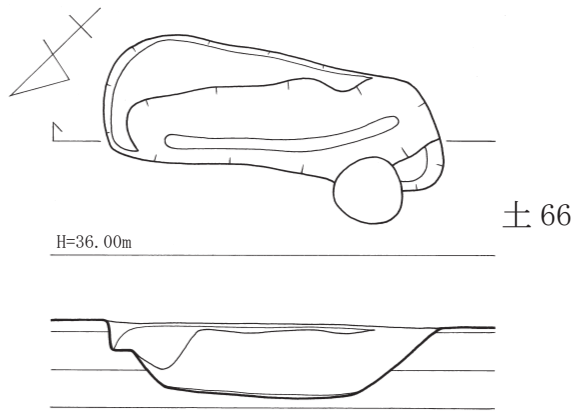
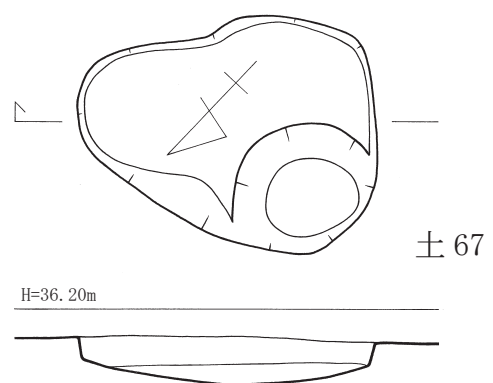
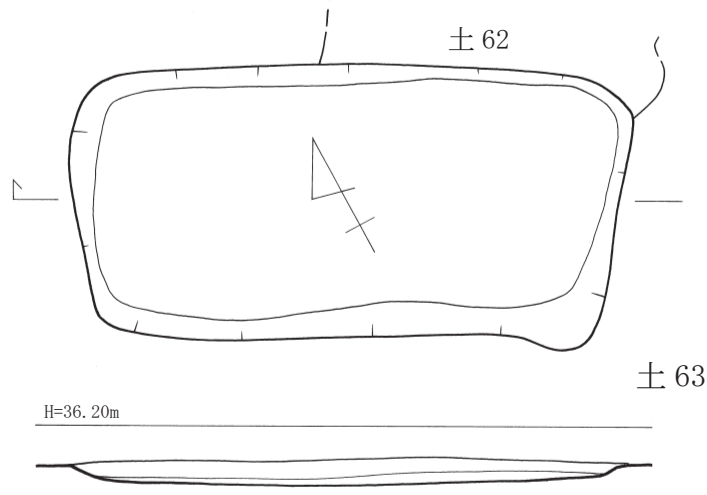
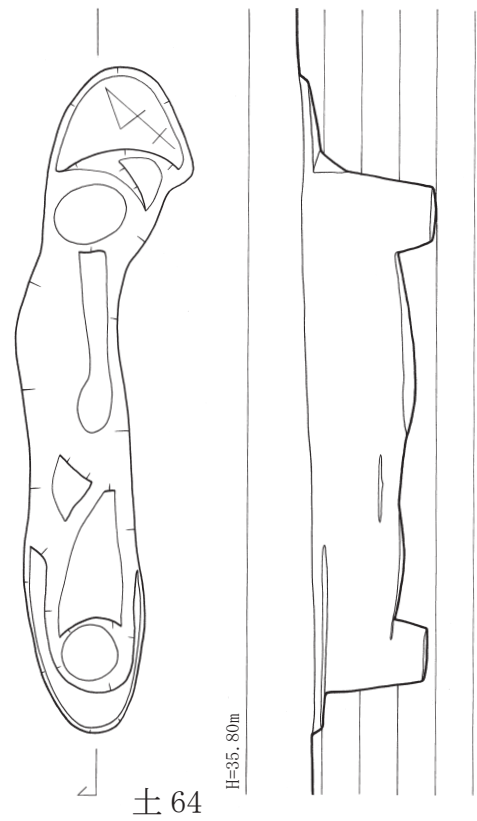
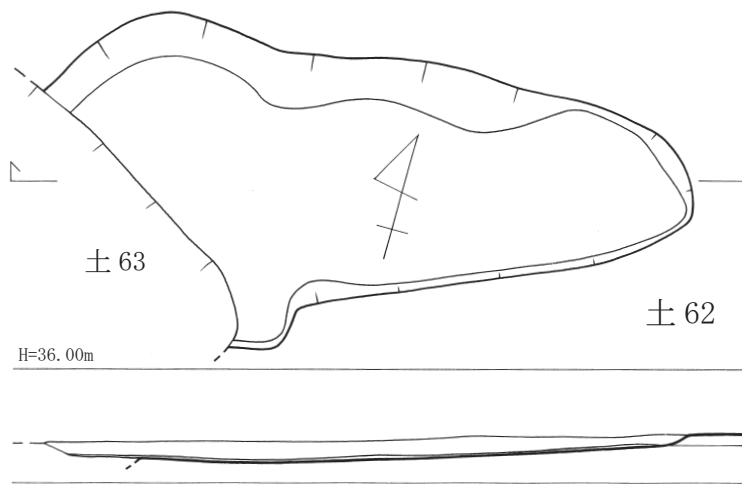


Fig.46 62号·63号·64号·66号·67号·71号土坑实测图 (S=1/40)

66号土坑 (Fig.46)

調査区中央の西寄りに位置する。62号・67号土坑と接する。北西壁をピットに切られる。主軸はN-44°-Wを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は残存長で1.74m、幅は0.61m、深さは0.39m程となる。東西両隅にはテラスが付き、床面は溝状に細長いが平坦である。出土遺物はない。

67号土坑 (Fig.46)

調査区の中央に位置する。62号・63号・66号土坑と接し、土坑西側の床面をピットに切られる。主軸はN-47°-Eを測る。平面形は不定形の楕円形を呈し、長軸の長さは1.56m、最大幅は1.26m程、深さは0.22m程である。床面はレンズ状を呈して中央が窪む。壁面は直立気味に立ち上がる。本遺構の時期は出土土器から13世紀後半から14世紀前半と捉えておく。

出土土器 (Fig.47 写真図版23) は、土師器(93~99)である。93~95は小皿である。93、95の底部の切り離しは糸切である。底部に板状圧痕が残る。96~99は坏である。97、98の底部の切り離しは糸切である。96~98は底部に板状圧痕が残る。

70号土坑 (Fig.48 写真図版20)

調査区中央に位置する。1号・36号・69号・71号土坑と接する。長軸はN-31°-Wを測る。平面形は方形を呈し、長軸の長さは2.54m、幅は2.42m程、深さは1.49m程である。床面は平

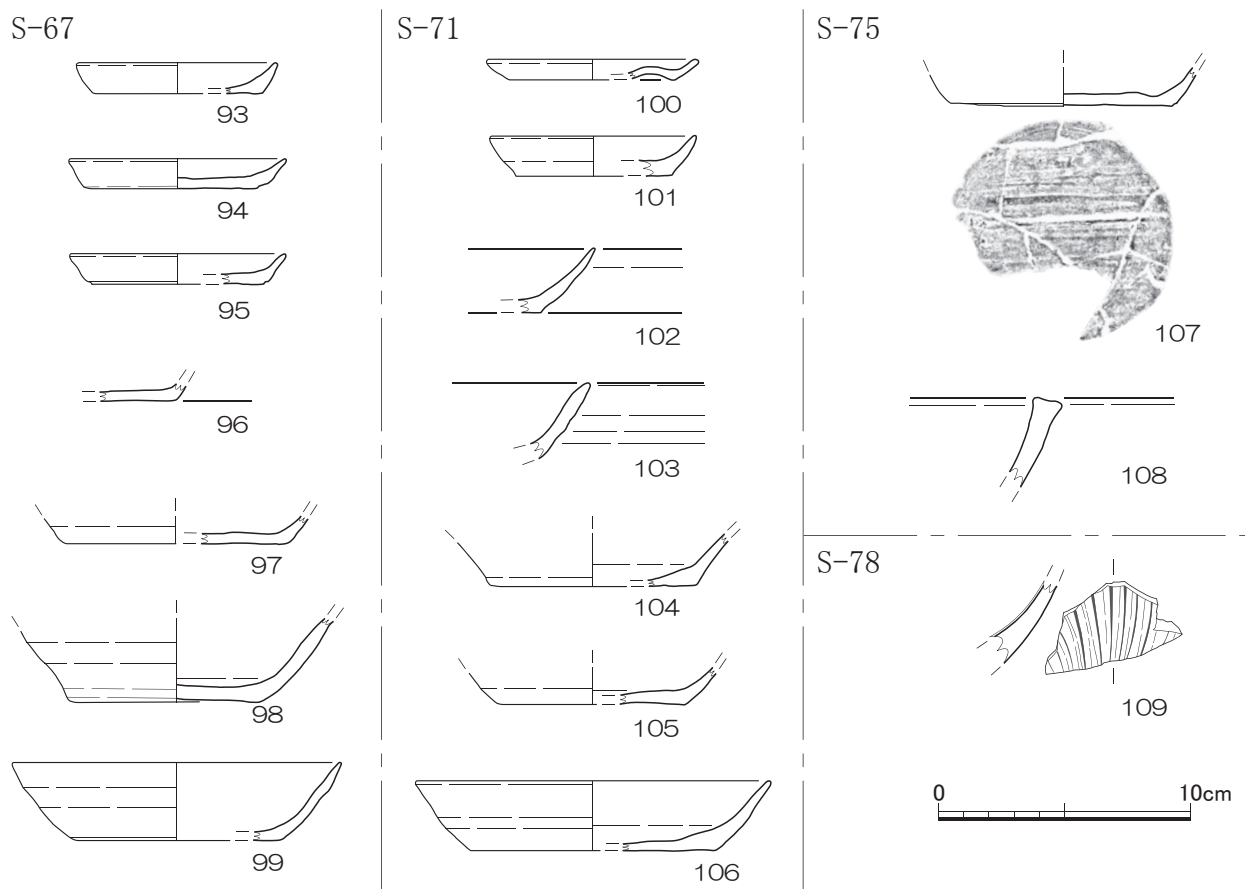


Fig.47 67号・71号・75号・78号土坑出土土器実測図 (S=1/3)

坦で、壁面はやや垂直気味に立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

71号土坑 (Fig.46)

調査区中央の南寄りに位置する。1号・15号・70号土坑と接する。主軸はN-31°-Wを測る。平面形は楕円形を呈し、主軸の長さは1.36 m、最大幅は1.05 m、深さは最も深い所で0.22 mである。床面は平坦であるが、南東壁際を一段深く掘り込んでいる。壁面はやや開き気味に立ち上がる。本遺構の時期は出土土器から13世紀後半から14世紀前後と捉えておく。

出土土器 (Fig.47 写真図版23) は、土師器(100～106)である。100、101は小皿である。102～106は坏である。全体的に摩滅が著しい。104、106の底部の切り離しは糸切りである。

73号土坑 (Fig.48 写真図版20)

調査区中央の南寄りに位置する。1号・45号土坑と接する。主軸はN-38°-Eを測る。平面形は方形を呈し、長軸の長さは3.05 m、幅は2.70 m程、深さは0.78 m程である。床面は平坦で、壁面はやや開きながら立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

75号土坑 (Fig.48)

調査区東の南寄りに位置する。4号・8号土坑と接する。主軸はN-90°-Eを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸の長さは1.26 m、最大幅は0.94 m、深さは0.07 m程である。床面は平坦で、壁面はやや開きながら立ち上がる。埋土からは土器が出土しており、本遺構の時期は出土土器から13世紀後半から14世紀前半と捉えておく。

出土土器 (Fig.47 写真図版23) は、土師器(107、108)である。107は坏である。底部の切り離しは糸切りで、底部に板状圧痕が残る。108は鉢の口縁部である。

78号土坑 (Fig.48)

調査区東の南寄りに位置する。4号・5号・79号土坑と接する。主軸はN-78°-Wを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸の長さは1.02 m、幅は0.62 m程、深さは0.08 m程である。床面は平坦であるが若干中央が窪む。壁面はやや開きながら立ち上がる。埋土からは土器が出土しており、本遺構の時期は出土土器から12世紀末から13世紀前半と捉えておく。

出土土器 (Fig.47 写真図版23) は、龍泉窯系青磁(109)である。109は碗である。器壁外面に鎬蓮弁文を施す。

79号土坑 (Fig.48)

調査区中央の南寄りに位置する。4号・5号・78号土坑と接する。主軸はN-45°-Wを測る。平面形は円形を呈し、主軸の長さは0.78 m、最大幅は0.74 m、深さは0.17 m程である。床面は平坦で、壁面はやや開きながら立ち上がる。遺構に伴う遺物はない。

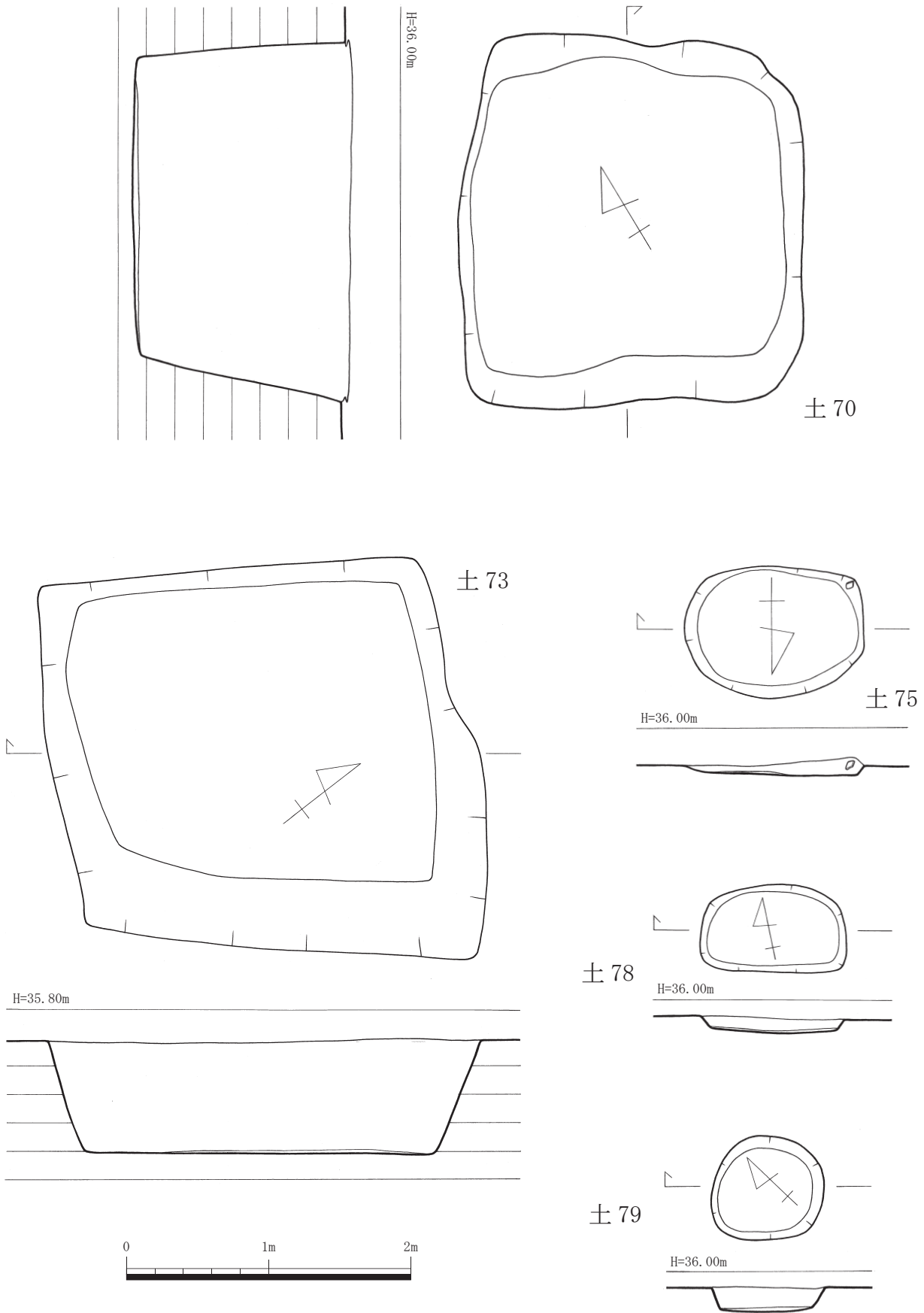


Fig.48 70号·73号·75号·78号·79号土坑实测图 (S=1/40)

第3項 溝状遺構

調査区に3条を検出した。

1号溝状遺構 (Fig.49)

調査区西の丘陵側に位置する。船原古墳2号・4号土坑、20号・25号土坑に接し、船原古墳1号土坑を掘り込む。軸はおよそN-27°-Wを測り、等高線に並行して31.20m掘り込んでいる。北西側の端は調査区境界にかかり、南東側の端は船原古墳1号土坑を掘り込みながら途切れる。断面形は逆台形を呈し、上端幅は0.60m前後、下端幅は0.50m、深さは最も深い所で0.20m程となる。遺構に伴う遺物はない。

2号溝状遺構 (Fig.49)

調査区東の丘陵側に位置する。3号溝状遺構に接する。軸はおよそN-52°-Wを測り、等高線に直交して蛇行しながら6.10m掘り込んでいる。断面形は逆台形を呈するが、床面は段差が付き、高低差が激しい。上端幅は1.24m～0.42m、下端幅は0.36m～0.10m、深さは0.26m～0.07mとなる。遺構に伴う遺物はない。

3号溝状遺構 (Fig.49)

調査区東の丘陵側に位置する。2号溝状遺構と接し、14号土坑に掘り込まれる。軸はおよそN-32°-Wを測り、等高線に直交しながら8.80m延びる。断面形は逆台形を呈し、上端幅は0.68m～0.18m、下端幅は0.64m～0.13m、深さは0.06m程となる。遺構に伴う遺物はない。

その他の土器 (Fig.50 写真図版23)

ピットから出土した土器は、須恵器(110)、土師器(111～128)、瓦質土器(129)、白磁(130、131)、陶器(132、133)である。110は壺の口縁部である。111は甕の口縁部である。口唇部に内弯する段を有する。112～115は小皿である。113～115の底部の切り離しは糸切りである。116～126は杯である。119、121、123、124の底部の切り離しは糸切りである。127は鉢の口縁部である。128は鍋の口縁部である。129は鉢である。口唇部を内側につまみ出す。小碗の口縁部である。131は皿である。132は鉢である。133は染付の碗である。器壁外面に沈圈線一条とも文様を施し、器壁内面に沈圈線を一条廻らす。

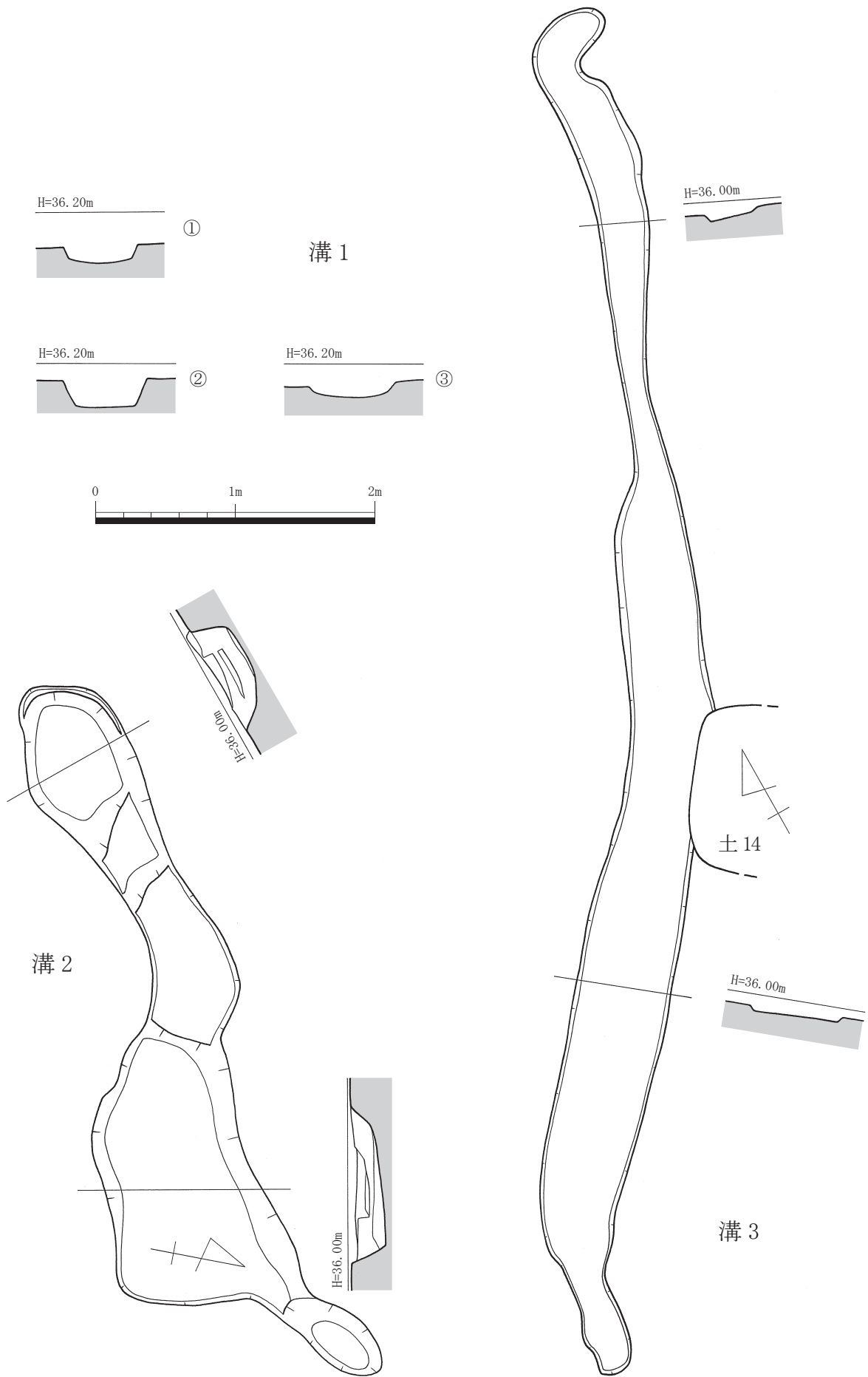


Fig.49 1号・2号・3号構状遺構実測図 (S=1/40)

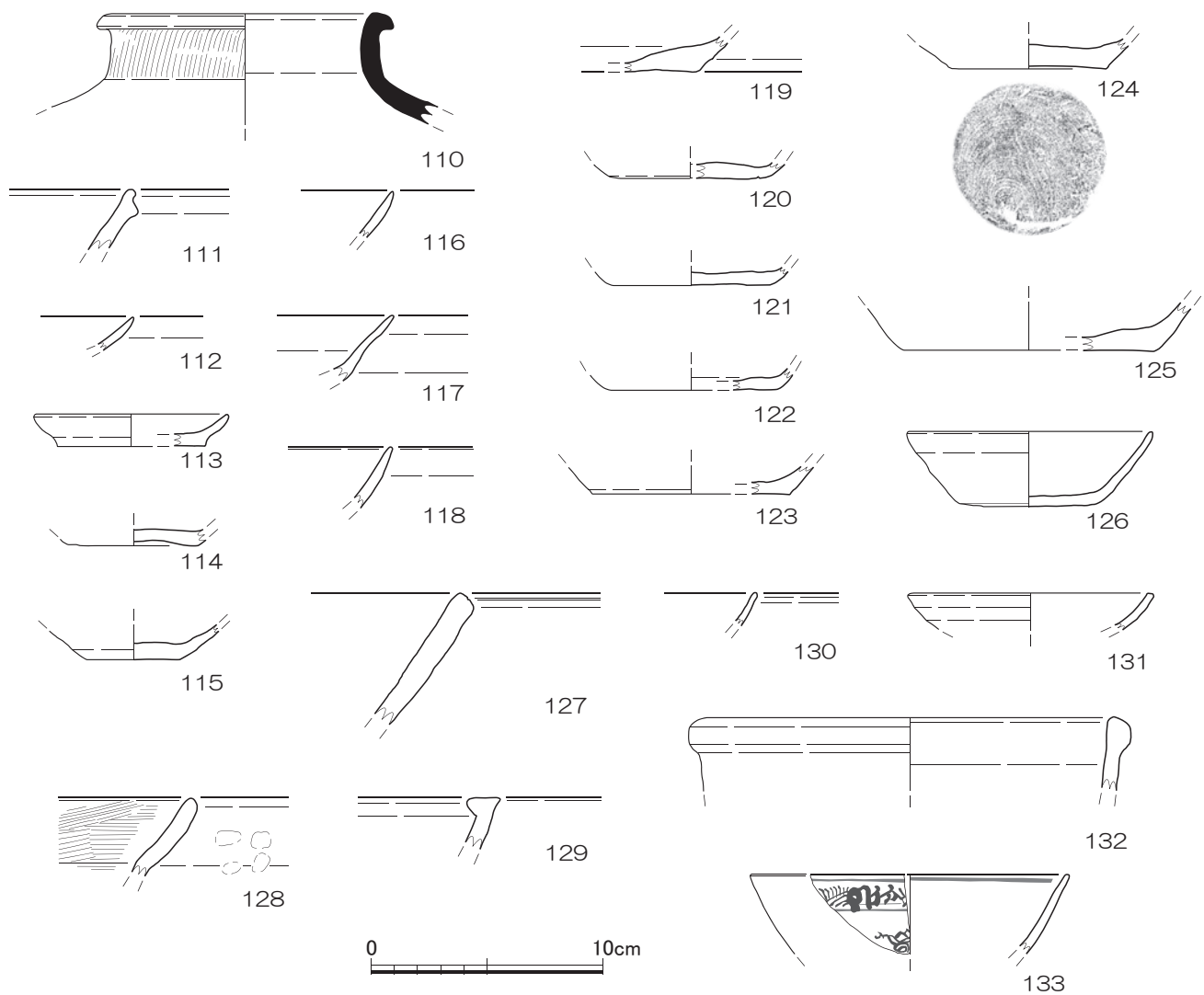


Fig50 ピット出土土器実測図 (S=1/3)

小結

ここで報告した遺構は、史跡地内に遺存する古墳時代以外の土坑 57 基、溝状遺構 3 条、ピット多数である。今回の調査では、出土土器も少なく、遺跡の性格を判断する材料に乏しいものの、古墳時代以降では、12 世紀中頃から 17 世紀にかけて散発的な土地利用がなされ、その後、水田となる。時期的には、14 世前後と 17 世紀代の遺構が多い。遺構は、用途不明なものも多いが、構造から大きく 4 タイプの土坑が抽出でき、それぞれの特徴は下述のとおりである。

①石組みを持つ土坑 4 号土坑 5 号土坑

②平面形が方形か長方形を呈する大型の土坑

深さ 1 m 未満：1 号土坑 2 号土坑 8 号土坑 11 号土坑 12 号土坑 13 号土坑 33 号土坑

42 号土坑 44 号土坑 46 号土坑 53 号土坑 56 号土坑 58 号土坑 73 号土坑

深さ 1 m 以上：36 号土坑 38 号土坑 54 号土坑 70 号土坑

③片側にテラスを持つ 2 段掘りの土坑 19 号土坑 47 号土坑 57 号土坑

④埋土に炭化物と焼土を含む浅い長方形の土坑

溝を持つ土坑：7 号土坑 26 号土坑

溝を持たない土坑：25 号土坑 52 号土坑

① 石組みを持つ土坑は、調査区東の南寄りに2基確認されている。4号土坑は掘方の床面まで石組みを行っているが、5号土坑は上端のみ石組みを施している。4号土坑の石組みの内径は0.90 m程である。これらの土坑の掘方は、深さ1.50 m前後と土坑深度は深くないが、礫を多く含む堆積層を掘り込み、基盤層となる花崗岩土層まで達している。これにより、床面から湧水することはないが、礫を多く含む谷山川の氾濫原である堆積層を掘り込んでいるため、壁面から水が染み出し、花崗岩土層を掘り込んだ床面に水が溜まる構造となっている。土坑は石組みの井戸と考えられる。井戸の使用時期は、出土遺物の時期から4号土坑→5号土坑の順になる。

② 調査区中央から東にかけて多く確認されている。平面形は、方形或いは長方形を呈し、長軸は2.24 m～3.83 m、短軸は1.21 m～2.70 mである。壁面は垂直気味に立ち上がるものが多い。深さは0.20 m～1.85 mと幅が広く、深さ1.00 mを境に大きく2つに分類できる。1.00 m未満の土坑は14基、1.00 m以上の土坑が4基となる。深さ1.00 m未満の土坑は、掘方が礫を多く含む堆積層内に収まるが、1.00 m以上の土坑は、堆積層を掘り抜き、花崗岩土層まで達する。特に、深さ1.00 m以上の土坑は、近隣では鹿部田淵遺跡8次調査等で確認されている収納坑や博多遺跡（福岡市）の方形竪穴遺構と構造や規格が類似しているが、方形竪穴遺構のように土坑の4隅に柱穴等は確認されていない。また、土坑は、礫を多く含む氾濫原の堆積層を掘り抜き、花崗岩土層まで達していることから、石組井戸と同じく水が壁面から染み出して床面に溜まる。このため、貯蔵用の土坑とは考え難く、用途としては素掘りの井戸になるか。

③ 調査区の中央から東側に掘り込まれた片側にテラスが付く2段掘りの土坑である。長軸2.00～2.20 m、最大幅1.52～1.82 mの長方形を呈し、深さ1.52～1.65 mと規模が近似する。壁面は垂直気味に立ち上がる。テラスは、床面との高低差が0.70～1.20 m、長軸の長さが0.63～0.98 mとなる。テラスの空間は広い。土坑は礫を多く含む堆積層を掘り込み、花崗岩土層に達する。構造的には石組井戸と同じであるため、井戸になる可能性がある。

④ 遺構は、平面形が長方形を呈する浅い土坑で、埋土に炭化物と焼土を含み、焼土面が残るものもある。床面の中央に長軸方向の溝を持つものと持たないものがあり、2タイプに分けることができる。26号土坑は、長軸4.23 m、最大幅2.17 m、最大深度0.30 mで、礫を多く含む堆積層の上層となる暗褐色系の包含層から掘り込まれている。床面中央には長軸方向の溝が1条ある。埋土には炭化物と焼土を多く含み、床面や壁面にも焼けた焼土面がある。なお、このタイプの土坑からは、骨など生物遺体も確認されておらず、火を使ったこと以外、用途は不明である。溝を持つ土坑からは、遺物が出土していないので時期は不明であるが、遺構が暗褐色系の包含層を掘り込み、水田遺構に切られていることから、調査区の基本層位から上限は江戸時代初頭と考えられる。溝を持たない土坑の時期も出土土器から17世紀代と考えられ、これらはほぼ同時期の遺構と考えられる。

Tab.2 滑石製品観察表

遺物番号	種別	器種	材質	縦(cm)	横(cm)	高さ(cm)	重量	備考
54	石製品	石鍋	滑石	—	—	4.7以上	86g	
60	石製品	不明	滑石	19.5	14.0	5.0	1220g	石鍋加工品

Tab.3 土器観察表 1

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm) ()は復元			調 整		焼成	胎 土	色 調	備 考
			口 径	器 高	底 径	外 面	内 面				
1	瓦質土器	鉢	—	3.7以上	—	—	ハケ目	やや不良	石英・長石・雲母	(外)暗灰色(内)黒灰色	外面摩滅
4	須恵器	甕	—	3.5以上	—	回転ナデ	回転ナデ	良好	石英・長石	(外)灰色(内)暗灰色	
5	土師器	小皿	—	1.4以上	4.6	糸切り	—	不良	石英・長石・雲母	にぶい橙色	内外面摩滅
6	土師器	坏	—	1.7以上	(8.0)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	良好	石英・長石・ 茶褐色粒子・雲母	橙色	外面摩滅 板状圧痕
7	土師器	坏	—	0.7以上	—	糸切り	ナデ	やや不良	白色粒子・雲母	橙色	内外面摩滅
8	土師器	坏	—	1.5以上	(6.8)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	良好	白色粒子・雲母	橙色	
9	土師器	坏	—	1.3以上	(7.8)	ヨコナデ・糸切り	ナデ	良好	白色粒子	橙色	
10	土師器	坏	—	1.5以上	(6.7)	糸切り	—	不良	石英・長石・雲母	にぶい黄橙色	内外面摩滅
11	土師器	坏	—	0.8以上	—	糸切り	—	やや不良	白色粒子・雲母	にぶい橙色	内外面摩滅
12	土師器	坏	(12.1)	2.5	(7.0)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや不良	石英・長石	橙色	
13	土師器	坏	—	2.2以上	—	—	—	不良	白色粒子・雲母	にぶい橙色	内外面摩滅
14	土師器	坏	—	1.6以上	(8.0)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	良好	白色粒子・雲母	橙色	
15	土師器	椀	—	3.2以上	(4.6)	ヨコナデ・糸切り	ナデ	良好	白色粒子・褐色粒子	橙色	
16	土師器	鉢	—	3.2以上	—	—	ヨコナデ	やや不良	石英・長石・雲母	(外)浅黄橙色・にぶい黄 橙色(内)浅黄橙色	外面摩滅
17	土師器	擂鉢	—	1.4以上	—	ナデ	ナデ	やや不良	石英・長石・雲母	にぶい黄橙色	外面剥離
18	瓦質土器	擂鉢	—	3.2以上	—	指押え	—	やや不良	石英・長石	(外)暗灰黄色 (内)灰黄色	内外面摩滅
19	瓦質土器	擂鉢	27.7	10.3	14.1	ハケ目、ナデ消し 指押え	ヨコナデ・ナデ	やや不良	石英・長石	暗灰色・灰色	
20	土師器	鍋	(24.8)	8.8以上	—	ヨコナデ・ナデ・ 指押え	ヨコナデ・ナデ ・ハケ目	やや不良	石英・長石	(外)灰黄褐色 (内)淡灰黄色	
21	土師器	鍋	(31.6)	12.6以上	—	ヨコナデ・ナデ・ ハケ目	ハケ目	良好	石英・長石・雲母	にぶい黄橙色	
22	瓦質土器	足鍋	—	5.6以上	—	指ナデ	ナデ	良好	石英・長石	(外)灰黄褐色 (内)淡灰黄色	脚部 煤付着
23	瓦質土器	足鍋	—	6.1以上	—	指ナデ	ナデ	良好	石英・長石	(外)淡白黄橙色 (内)黒灰色	脚部 煤付着
24	瓦質土器	足鍋	—	4.3以上	—	指ナデ	—	良好	石英・長石	灰色	脚部 煤付着
44	土師器	小皿	—	1.0	—	ヨコナデ・糸切り	—	やや不良	白色粒子・雲母	橙色	内面摩滅
45	土師器	火舎	—	6.7以上	—	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子・雲母	にぶい黄橙色	スタンプ(菊花文)
55	土師器	坏	—	2.3以上	—	—	—	やや不良	白色粒子・雲母	橙色	内外面摩滅
56	土師器	坏	—	1.5以上	—	—	—	やや不良	白色粒子・雲母	(外)にぶい橙色 (内)橙色	内外面摩滅
61	土師器	小皿	—	1.3以上	—	ヨコナデ・糸切り	—	不良	石英・長石	橙色	内外面摩滅
62	土師器	小皿	—	1.2以上	—	ヨコナデ・糸切り	ナデ	やや不良	白色粒子・雲母	橙色	内外面摩滅
63	土師器	小皿	—	0.8以上	(5.6)	糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや不良	石英・長石	橙色	内外面摩滅
64	土師器	小皿	(7.8)	1.5	(6.4)	—	—	やや不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅 板状圧痕
65	土師器	小皿	(8.7)	1.7	(6.4)	—	ナデ	やや不良	石英・長石	橙色	内外面摩滅 板状圧痕
66	土師器	坏	—	2.7以上	—	ヨコナデ	—	不良	石英・長石	にぶい橙色	内外面摩滅
67	土師器	坏	—	2.3以上	—	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子	橙色	
68	土師器	坏	—	2.8以上	—	ヨコナデ	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅
69	土師器	坏	—	3.1以上	—	—	—	不良	石英・長石	橙色	内外面摩滅
70	土師器	坏	—	3.1以上	—	ヨコナデ	—	不良	石英・長石	橙色	内外面摩滅
71	土師器	坏	—	1.2以上	—	ヨコナデ・糸切り	—	やや不良	白色粒子・雲母	(外)にぶい橙色 (内)橙色	内面摩滅
72	土師器	坏	—	1.1以上	(9.0)	—	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅 板状圧痕
73	土師器	坏	—	1.4以上	(9.0)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや不良	石英・長石・金雲母	にぶい橙色	内外面摩滅 板状圧痕
74	土師器	坏	—	1.4以上	8.9	—	ナデ	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅 板状圧痕
75	土師器	坏	—	1.5以上	(8.8)	糸切り	ナデ	やや不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅 板状圧痕
76	土師器	坏	(13.0)	2.4以上	—	ヨコナデ	—	不良	白色粒子・雲母	橙色	内外面摩滅
77	須恵器	甕	—	4.0以上	—	タタキ	当具	良好	石英・長石・雲母	(外)暗灰色(内)灰色	
78	土師器	坏	—	1.1以上	—	—	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅

Tab.4 土器観察表 2

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm) ()は復元			調 整		焼成	胎 土	色 調	備 考
			口 径	器 高	底 径	外 面	内 面				
79	瓦質土器	火舎	—	3.0以上	—	—	ナデ	やや 不良	白色粒子・黒色粒 子・雲母	(外)灰白色 (内)灰色	スタンプ
81	瓦質土器	不明	—	2.2以上	—	ヨコナデ	—	良好	白色粒子・雲母	灰色	内面摩滅 肩部に型押文
82	土師器	坏	—	1.0以上	(6.6)	糸切り	—	やや 不良	白色粒子・雲母	橙色	内外面摩滅
83	土師器	坏	—	1.6以上	(7.0)	糸切り	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅
86	須恵器	甕	—	1.9以上	—	タタキ	ナデ消し	良好	白色粒子	(外)黒褐色 (内)暗灰色	
87	須恵器	甕	—	4.3以上	—	タタキ	当具・ナデ消し	良好	白色粒子	(外)褐灰色 (内)灰色	
89	土師器	坏	—	2.4以上	—	—	—	やや 不良	白色粒子・雲母	にぶい橙色	内外面摩滅
90	土師器	坏	—	1.1以上	(7.0)	—	—	不良	石英・長石・雲母	(外)にぶい橙色・褐灰色 (内)にぶい橙色	内外面摩滅
93	土師器	小皿	(8.0)	1.2	(6.8)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ	やや 不良	石英・長石・雲母	橙色	内面摩滅 板状圧痕
94	土師器	小皿	(8.6)	1.2	7.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	不良	石英・長石・雲母	橙色	内面摩滅 板状圧痕
95	土師器	小皿	(8.6)	1.2	(7.2)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや 不良	石英・長石・雲母	橙色	板状圧痕
96	土師器	坏	—	0.7以上	—	—	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅 板状圧痕
97	土師器	坏	—	1.1以上	(9.0)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	不良	石英・長石・雲母	橙色	板状圧痕
98	土師器	坏	6.8	3.3以上	—	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや 不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅 板状圧痕
99	土師器	坏	(13.0)	3.1	(8.4)	—	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅
100	土師器	小皿	(8.4)	0.8	(6.6)	—	—	不良	白色粒子・雲母	(外)にぶい橙色 (内)橙色	内外面摩滅
101	土師器	小皿	(8.2)	1.6	(6.2)	—	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅
102	土師器	坏	—	2.6	—	—	—	不良	白色粒子	橙色	内外面摩滅
103	土師器	坏	—	3.0以上	—	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	良好	石英・長石	橙色	
104	土師器	坏	—	2.1以上	(8.6)	糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや 不良	石英・長石・雲母	橙色	外面摩滅
105	土師器	坏	—	1.5以上	(7.4)	—	—	不良	白色粒子・茶褐色粒 子・雲母	橙色	内外面摩滅
106	土師器	坏	(14.2)	2.8	(9.8)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	良好	石英・長石	橙色	内外面摩滅
107	土師器	坏	—	1.5以上	(9.0)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや 不良	石英・長石・雲母	にぶい黄橙色	板状圧痕
108	土師器	鉢	—	3.5以上	—	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	良好	石英・長石・雲母・角 閃石	(外)にぶい黄橙色 (内)褐灰色	
110	須恵器	壺	(12.8)	4.7以上	—	回転ナデ・ハケ目	回転ナデ・ナデ	良好	石英・長石	(外)灰色 (内)褐色	
111	土師器	甕	—	2.6以上	—	ナデ	ナデ	不良	石英・長石・雲母	橙色	内面摩滅
112	土師器	小皿	—	1.4以上	—	—	—	不良	石英・長石	橙色	内外面摩滅
113	土師器	小皿	(8.4)	1.4	(6.4)	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや 不良	白色粒子・雲母	橙色	
114	土師器	小皿	—	0.7以上	5.6	糸切り	ナデ	やや 不良	石英・長石・雲母	にぶい橙色	内外面摩滅
115	土師器	小皿	—	1.5以上	—	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	良好	石英・長石・雲母	橙色	
116	土師器	坏	—	2.0以上	—	—	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅
117	土師器	坏	—	2.8以上	—	—	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅
118	土師器	坏	—	2.6以上	—	—	—	やや 不良	白色粒子・雲母	橙色	内外面摩滅
119	土師器	坏	—	1.5以上	4.0	糸切り	—	やや 不良	白色粒子・雲母	にぶい橙色	内外面摩滅
120	土師器	坏	—	0.7以上	(7.0)	ナデ	ナデ	やや 不良	白色粒子・雲母	橙色	外面摩滅
121	土師器	坏	—	0.8以上	(7.0)	糸切り	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅
122	土師器	坏	—	0.9以上	(7.4)	—	ヨコナデ	やや 不良	白色粒子・雲母	にぶい黄橙色・灰黄色	外面摩滅
123	土師器	坏	—	1.2以上	(8.6)	糸切り	—	不良	石英・長石・雲母	橙色	内外面摩滅
124	土師器	坏	—	1.3以上	6.7	ヨコナデ・糸切り	ヨコナデ・ナデ	やや 不良	石英・長石・雲母	橙色	
126	土師器	坏	(10.6)	3.25	6.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	やや 不良	石英・長石	橙色	
127	土師器	鉢	—	5.5以上	—	ヨコナデ・ナデ	—	やや 不良	石英・長石・雲母	にぶい橙色	内面摩滅
128	土師器	鍋	—	3.4以上	—	ヨコナデ・ナデ	ハケ目	良好	石英・長石・雲母	(外)黒褐色 (内)橙色	
129	瓦質土器	鉢	—	2.2以上	—	—	—	不良	石英・長石・雲母	(外)灰色 (内)灰白色	内外面摩滅

Tab. 5 陶磁器観察表

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm) ()は復元			成形	装飾				製作地	備考
			口 径	器 高	底 径		絵付・釉薬	文様				
2	磁器	平底皿	—	1.5以上	(6.4)	ロク口	白磁	—	—	—		
3	磁器	皿	(11.0)	2.0以上	—	ロク口	白磁	—	—	—		
25	磁器	碗	—	1.9以上	—	ロク口	青磁	線刻文	—	—	龍泉窯系	
26	磁器	碗	—	4.1以上	—	ロク口	青磁	片切彫文	沈線	—	龍泉窯系	
27	磁器	碗	—	1.9以上	—	ロク口	青磁	鑄蓮弁文	—	—	龍泉窯系	
28	磁器	碗	—	4.7以上	—	ロク口	青磁	鑄蓮弁文	—	—	龍泉窯系	
29	磁器	皿	(11.5)	2.5以上	—	ロク口	青磁	蓮弁文	—	—	龍泉窯系	
30	磁器	碗	(12.0)	3.2以上	—	ロク口	青磁	—	—	—		
31	磁器	皿	(11.3)	2.1以上	—	ロク口	青磁	—	—	—		
32	磁器	皿	—	1.8以上	—	ロク口	白磁	—	—	—		
33	磁器	小碗	—	2.1以上	—	ロク口	白磁	—	—	—		
34	磁器	碗	—	6.5以上	—	ロク口	青磁	三重沈圏線	—	—		
35	陶器	高台付皿	12.0	3.2	4.2	ロク口	—	—	—	—		砂目跡
36	陶器	碗	—	4.0以上	6.4	ロク口	—	—	—	—		砂目跡
37	陶器	碗	—	1.7以上	4.4	ロク口	—	—	—	—		砂目跡
38	陶器	碗	—	1.6以上	4.7	ロク口	—	—	—	—		砂目跡
39	陶器	皿	—	2.1以上	—	ロク口	—	—	—	—		
40	陶器	小碗	(10.0)	2.9以上	—	ロク口	—	—	—	—		
41	陶器	碗	—	3.3以上	—	ロク口	—	—	—	—		
42	磁器	杯	—	3.0以上	2.6	ロク口	染付	風景文	二重沈圏線	草花文		
43	陶器	搦鉢	(25.0)	6.8以上	—	ロク口	—	—	—	—		摺り目8本
46	陶器	小碗	—	3.1以上	2.5	ロク口	染付	—	—	—		
47	磁器	小碗	6.0	3.7	2.5	ロク口	染付	草花文	—	—		
48	磁器	碗	—	2.8以上	—	ロク口	白磁?	—	—	—		
49	陶器	碗	—	5.3以上	—	ロク口	—	—	—	—		
50	陶器	搦鉢	—	8.1以上	—	ロク口	—	—	—	—		摺り目8本
51	陶器	搦鉢	—	9.5以上	—	ロク口	—	—	—	—		摺り目7本
52	陶器?	搦鉢	—	12.1以上	(11.0)	ロク口	—	—	—	—		摺り目8本
53	陶器	皿	(28.0)	4.7以上	—	ロク口	鉄絵	—	—	—		
57	磁器	碗	—	1.7以上	4.7	ロク口	青磁	櫛目文	—	—	同安窯系	
58	磁器	小碗	(6.6)	3.5	(3.0)	ロク口	白磁	—	—	—		
59	陶器	鉢	(14.0)	5.3	(6.0)	ロク口	—	—	—	—		高台に弧状の抉り
80	陶器	碗	—	1.7以上	5.5	ロク口	—	—	—	—		
84	磁器	碗	—	1.7以上	—	ロク口	青磁	鑄蓮弁文	—	—	龍泉窯系	
85	磁器	皿	—	2.2以上	—	ロク口	白磁	—	—	—		口禿
88	陶器	皿	—	2.0以上	—	ロク口	—	—	—	—		
91	陶器	壺	—	3.5以上	—	ロク口	—	—	—	—		
92	磁器	碗	—	3.4以上	—	ロク口	青磁	へら描き文	—	—	龍泉窯系	
109	磁器	碗	—	3.3以上	—	ロク口	青磁	鑄蓮弁	—	—	龍泉窯系	
130	磁器	小碗	—	1.4以上	—	ロク口	白磁	—	—	—		
131	磁器	皿	(10.6)	1.6以上	—	ロク口	白磁	—	—	—		
132	陶器	鉢	(19.1)	3.1以上	—	ロク口	—	—	—	—		
133	磁器	碗	(13.8)	3.5以上	—	ロク口	染付	沈圏線	—	—		

写真図版

図版 1

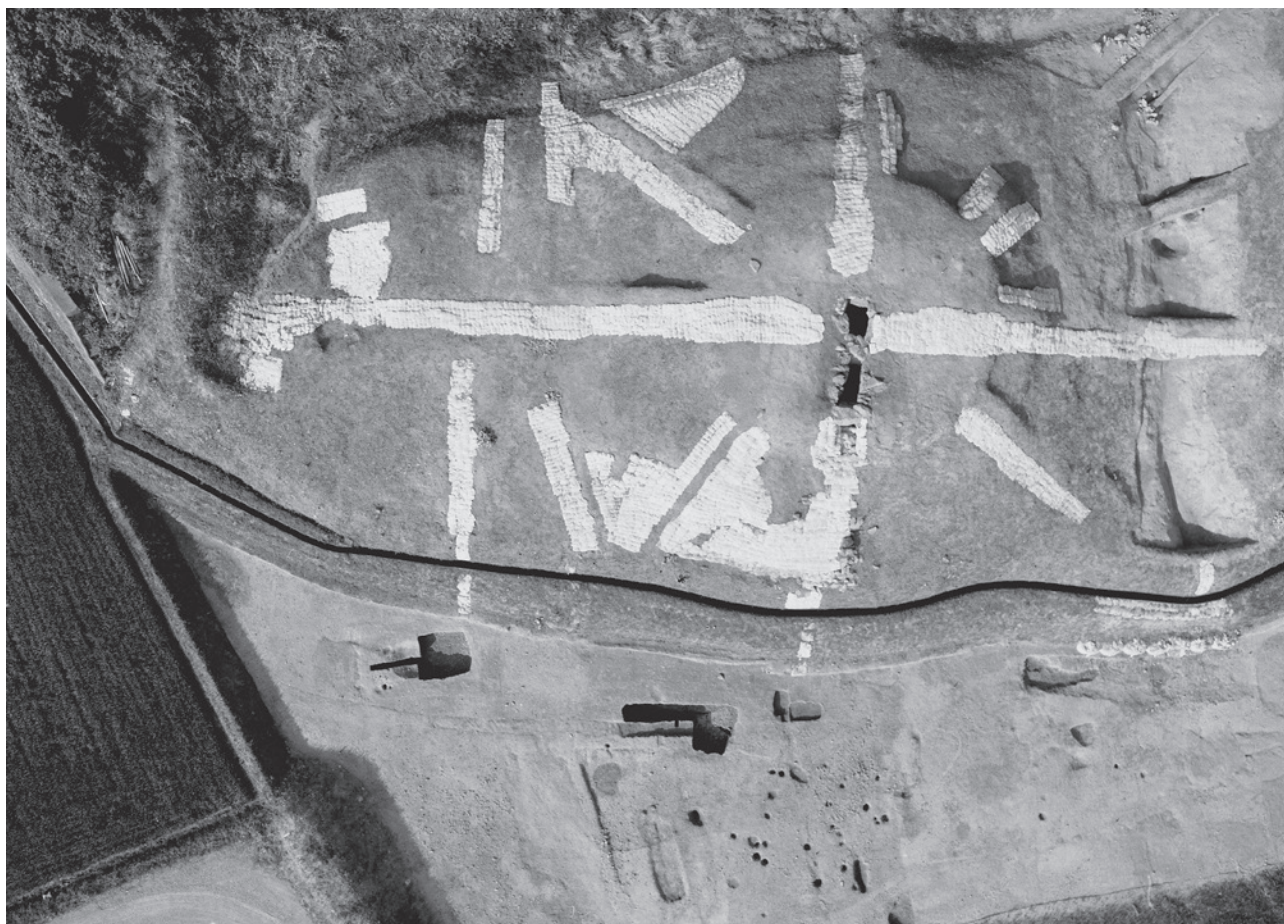


船原古墳 全景 東から



船原古墳 全景 その2 北西から

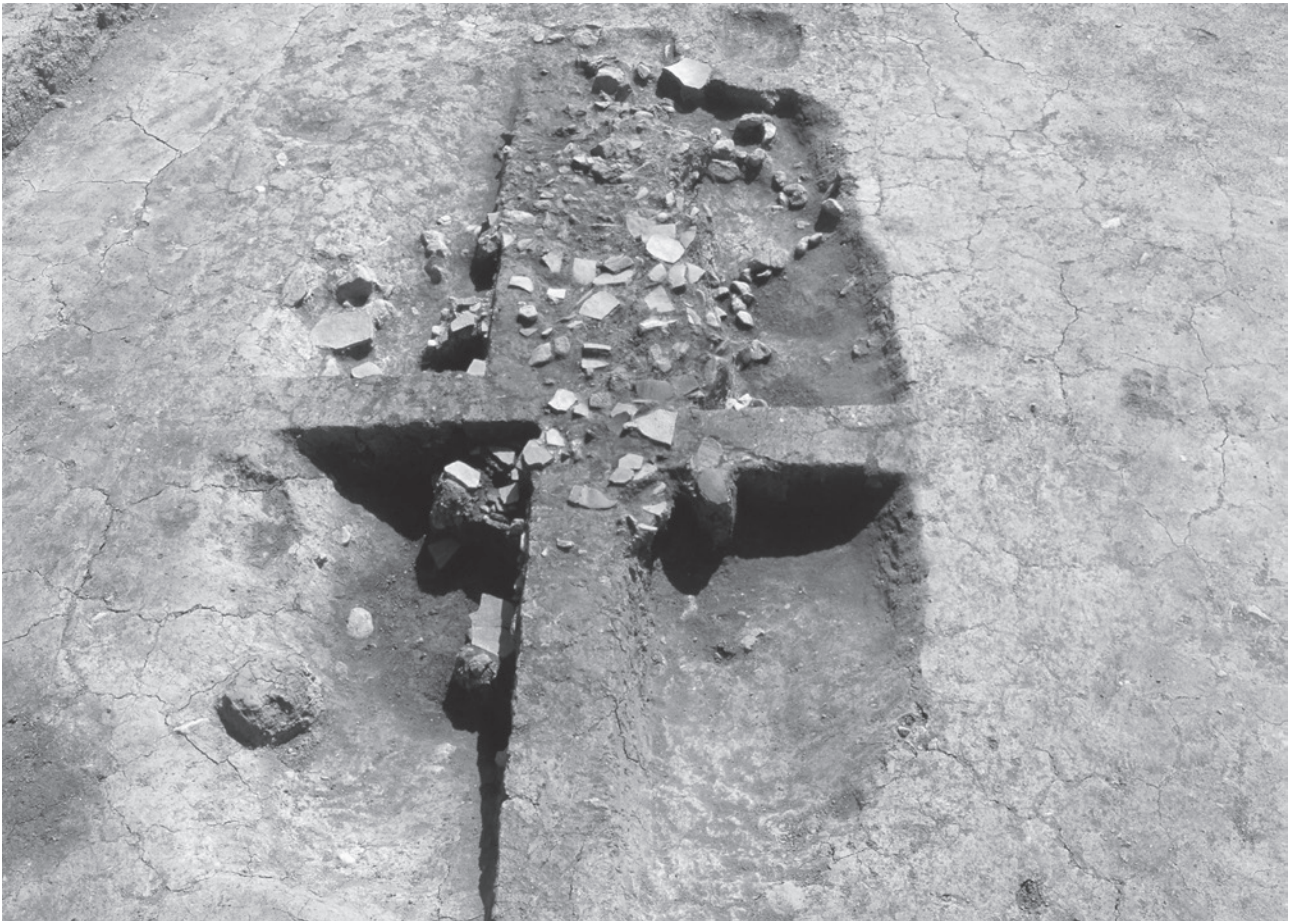
図版 3



船原古墳 全景 上から



船原古墳（古墳時代以外の遺構）全景 上から



船原古墳 2 号土坑 遺構検出その 1 北西から



船原古墳 2 号土坑 遺構検出その 2 東北から

図版 5



船原古墳 2号土坑 馬具出土状況 その1 南東から



船原古墳 2号土坑 馬具出土状況 その2 北東から



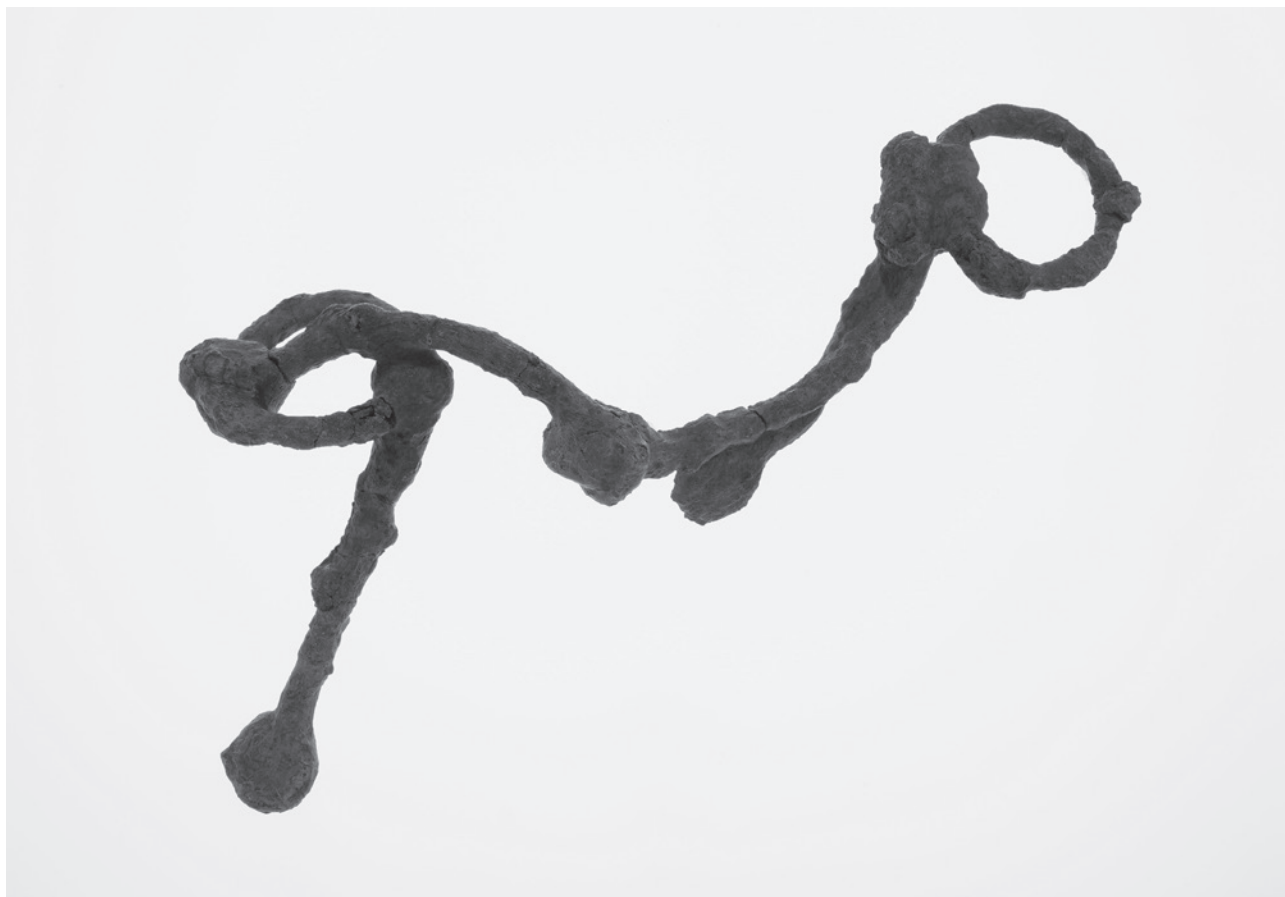
船原古墳 2号土坑 出土状況 その3 上から



船原古墳 2号土坑 完掘 南東から



船原古墳 2 号土坑出土 轡 A



船原古墳 2 号土坑出土 轡 B



船原古墳 2 号土坑出土 轡 C



船原古墳 2 号土坑出土 轡 D



船原古墳 2 号土坑出土 方形鉄器



船原古墳 2 号土坑出土 円形鉄器



船原古墳 3号土坑 南東から



船原古墳 3号土坑 遺物出土状況 その1 南西から



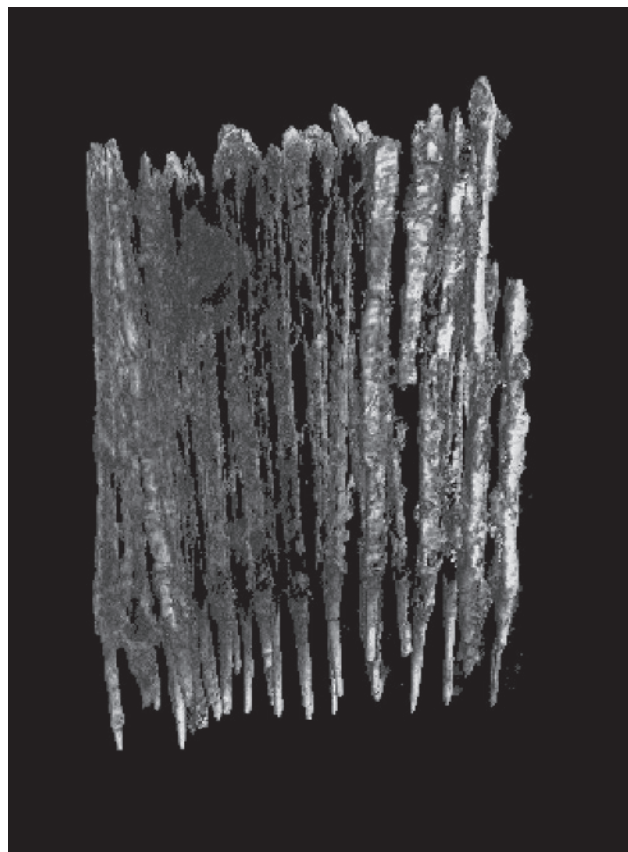
船原古墳 3号土坑 遺物出土状況 その2 南東から



船原古墳 3号土坑 完掘 北東から



船原古墳 3 号土坑出土鉄鏃束①



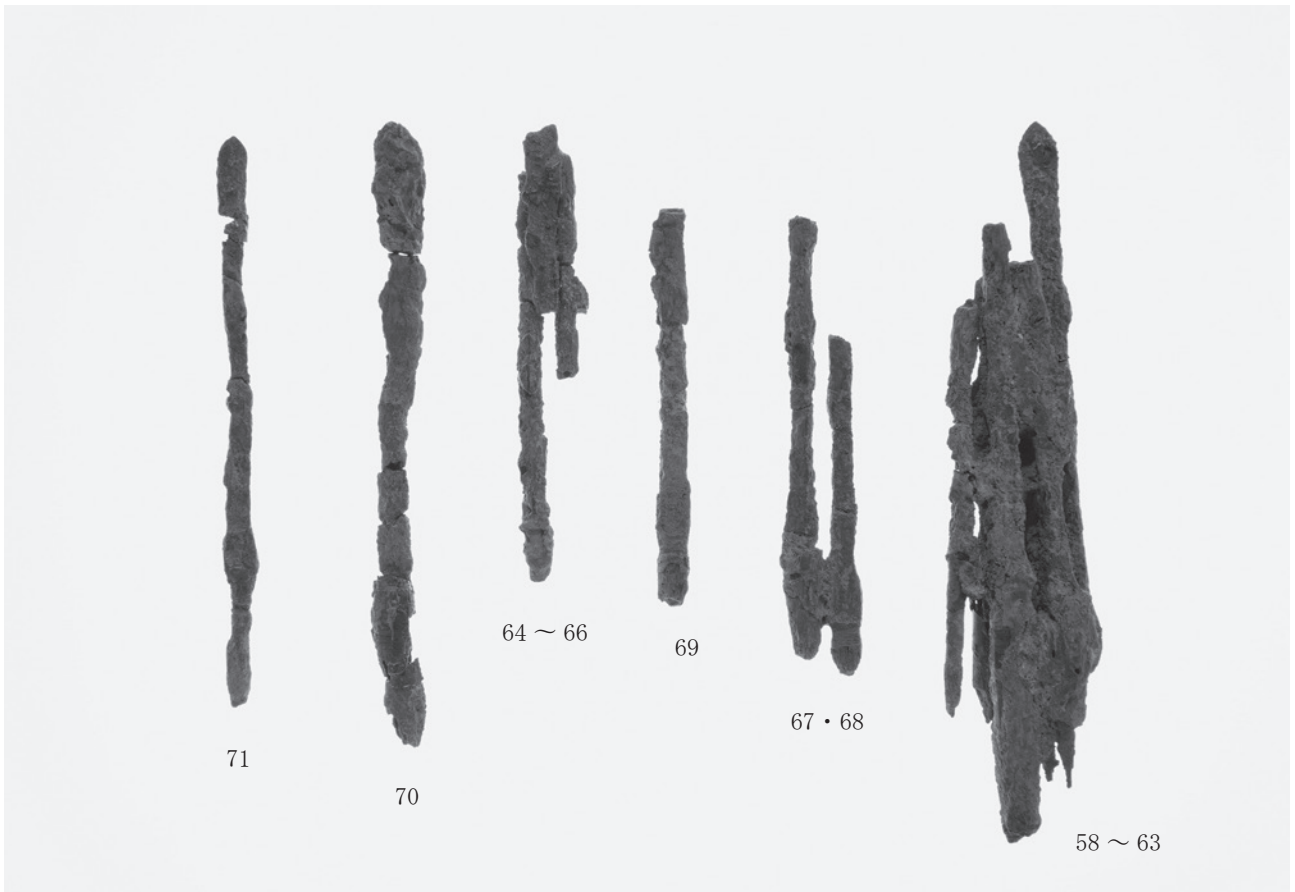
船原古墳 3 号土坑出土鉄鏃束① (CT 画像)



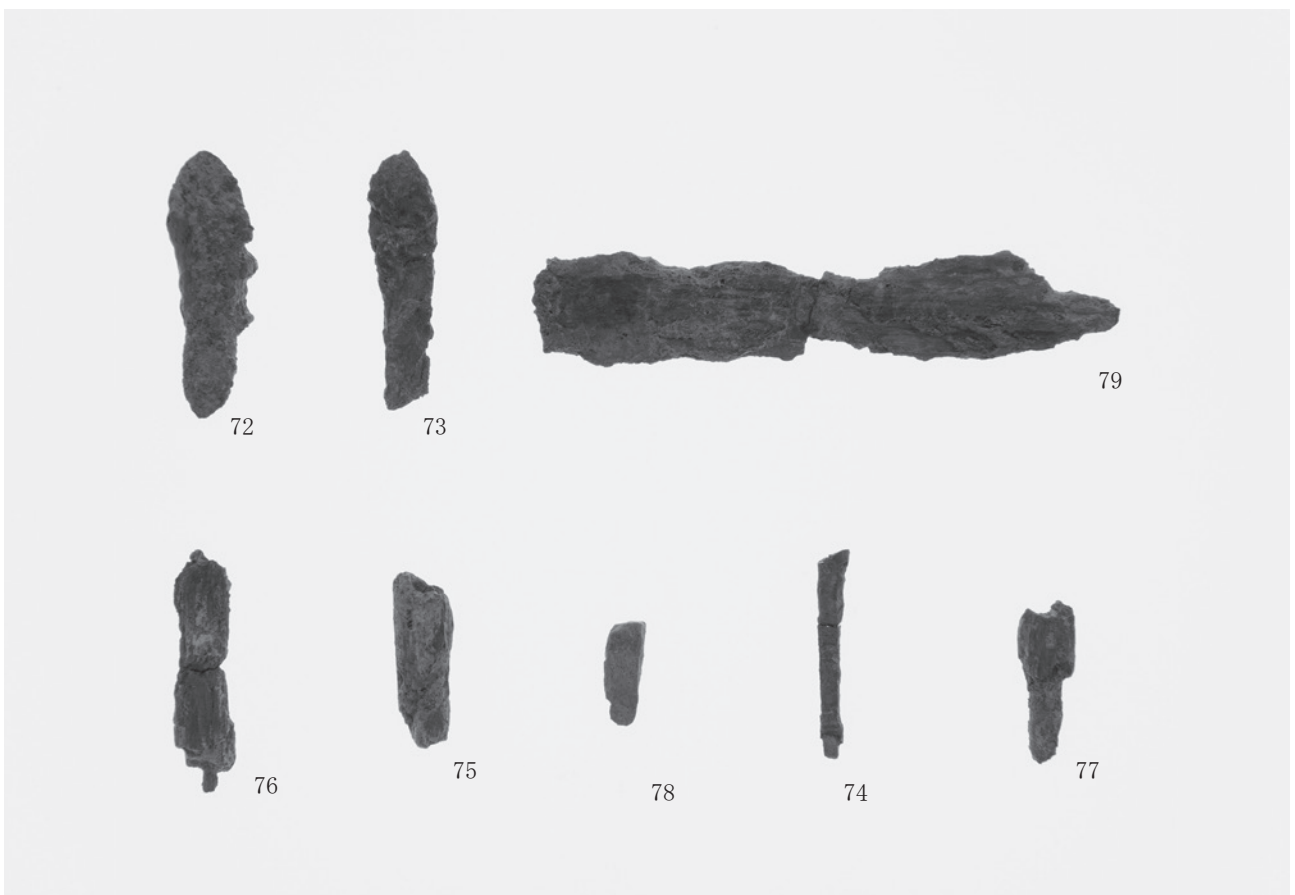
船原古墳 3 号土坑出土鉄鏃束②



船原古墳 3 号土坑出土鉄鏃束② (CT 画像)



船原古墳 3 号土坑出土鉄鏃



船原古墳 3 号土坑出土鉄鏃・刀子

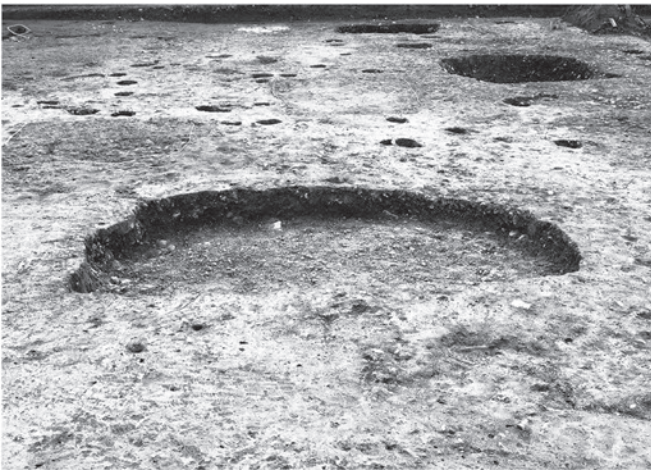
図版 15



1号土坑 南西から



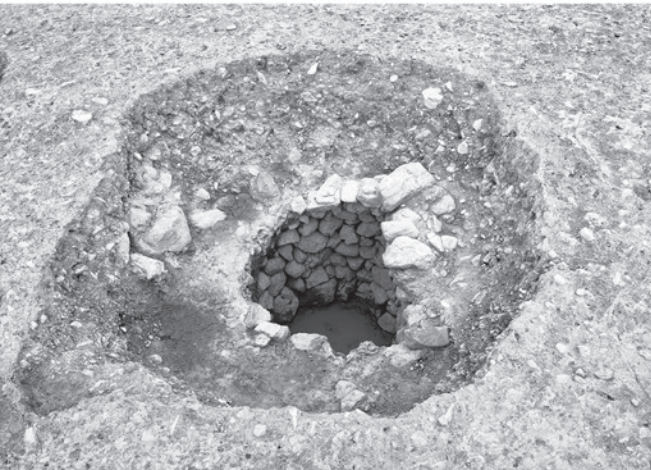
2号土坑 北東から



3号土坑 北西から



4号土坑その1 西から



4号土坑その2 南から



5号土坑 北東から



7号土坑 北西から



8号土坑 南西から



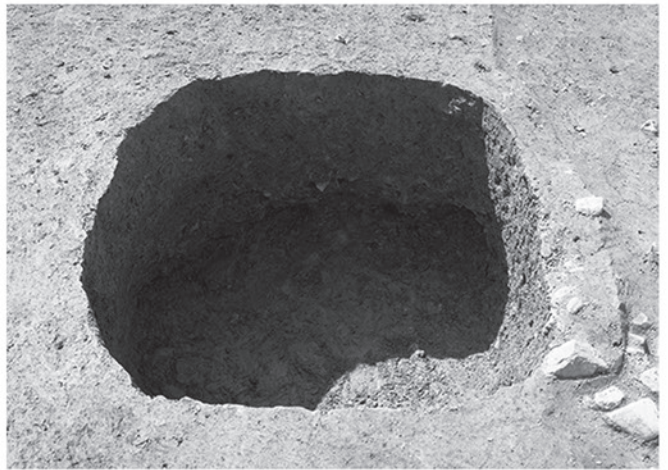
11号土坑 北西から



12号土坑 北西から



13号土坑 西から



14号土坑 北西から



16号土坑 北西から



16・17号土坑 南西から



18号土坑 北東から



19号土坑 北西から

図版 17



20号土坑 南から



25号土坑 南西から



26号土坑 南西から



32号土坑 北から



35号土坑 西から



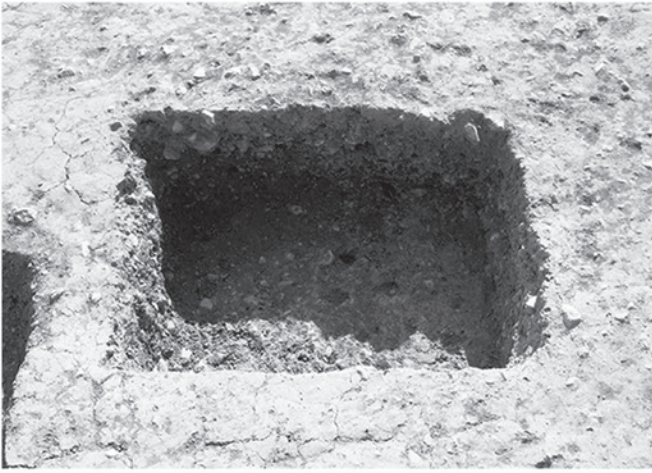
36号土坑 北西から



38号土坑 北西から



40号土坑 北東から



41号土坑 北東から



42号土坑 北西から



43号土坑 南から



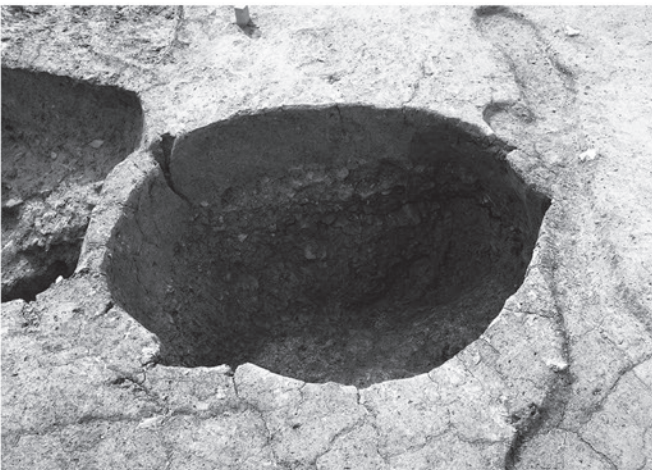
44号土坑 西から



46号土坑 南西から



48号土坑 北から

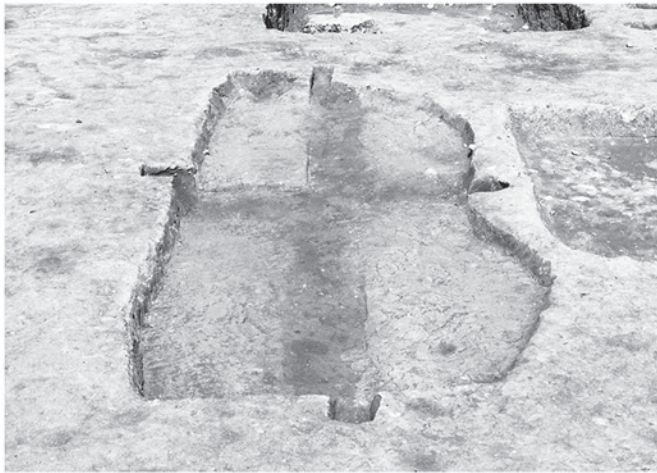


49号土坑 北から



50号土坑 南東から

図版 19



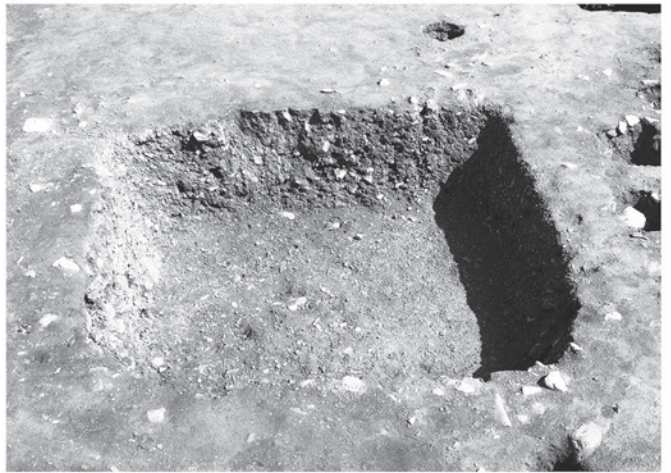
52号土坑 南西から



53号土坑 北西から



54号土坑 南西から



56号土坑 南西から



57号土坑 南西から



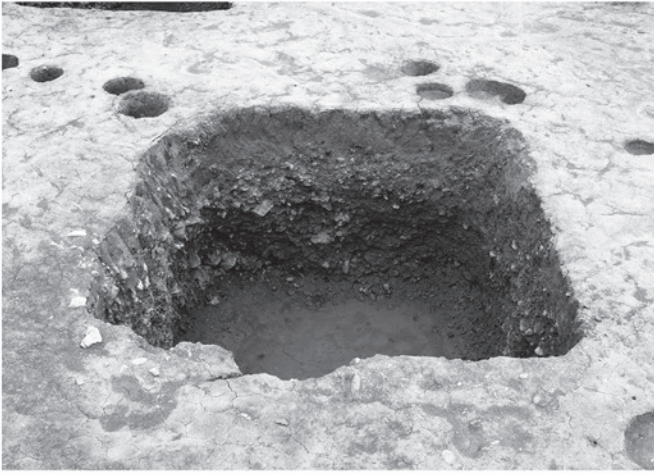
58号土坑 南西から



62号土坑 南から



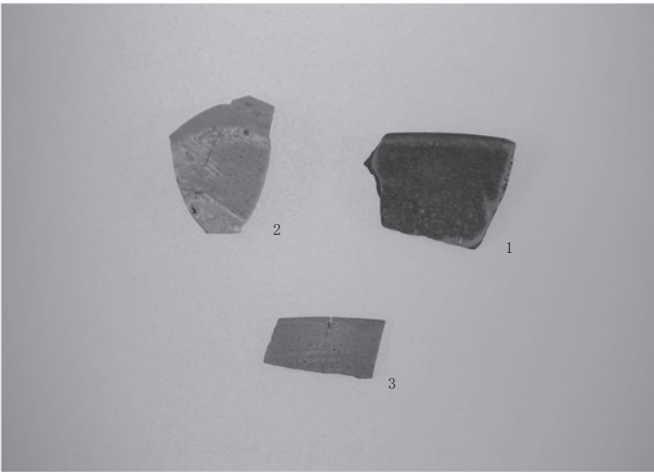
63号土坑 西から



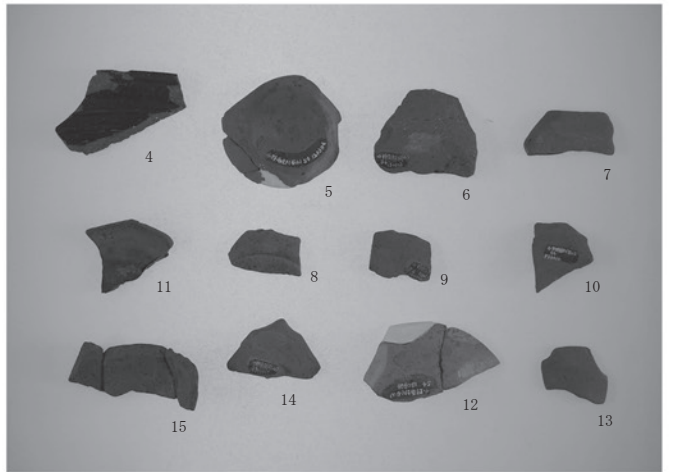
70号土坑 北西から



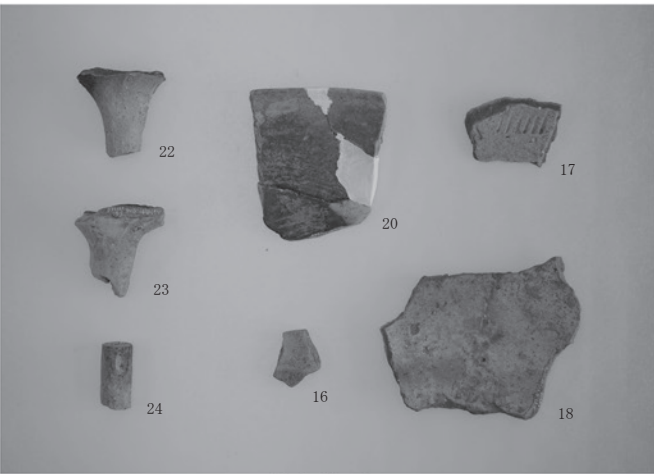
73号土坑 北西から



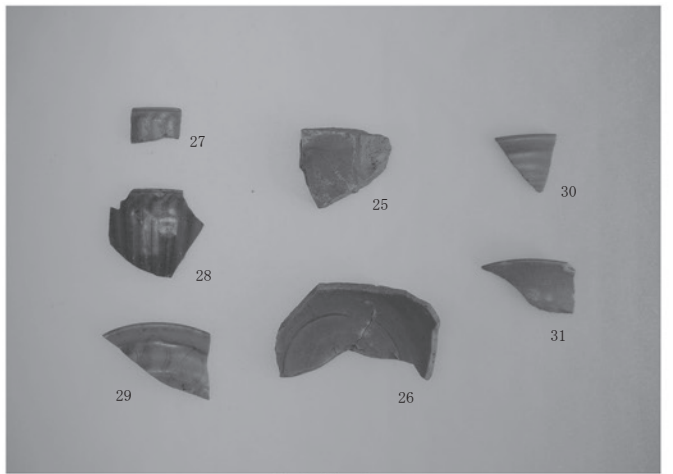
2号土坑



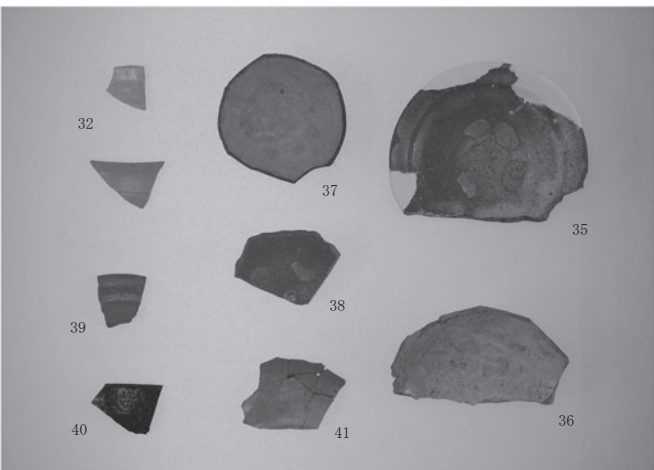
4号土坑その1



4号土坑その2



4号土坑その3



4号土坑その4

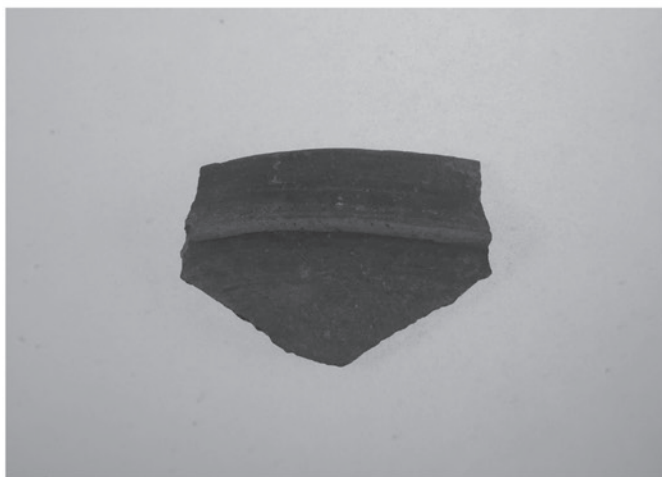


4号土坑 19

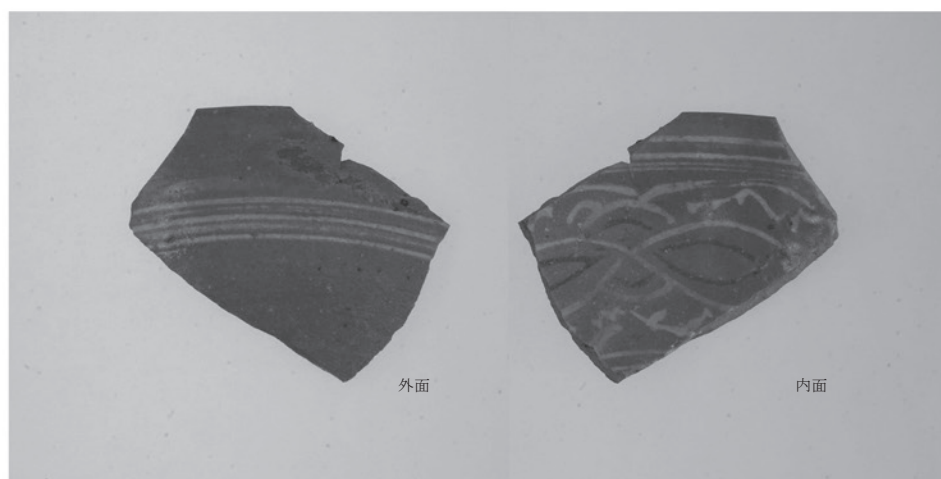
图版 21



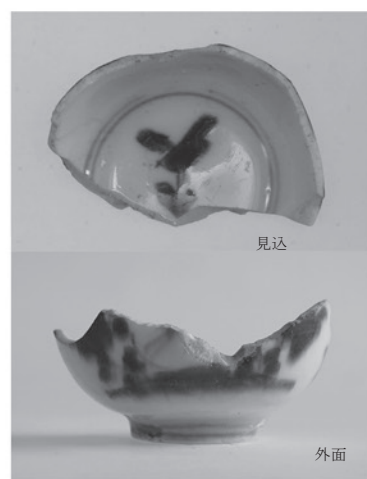
4号土坑 21



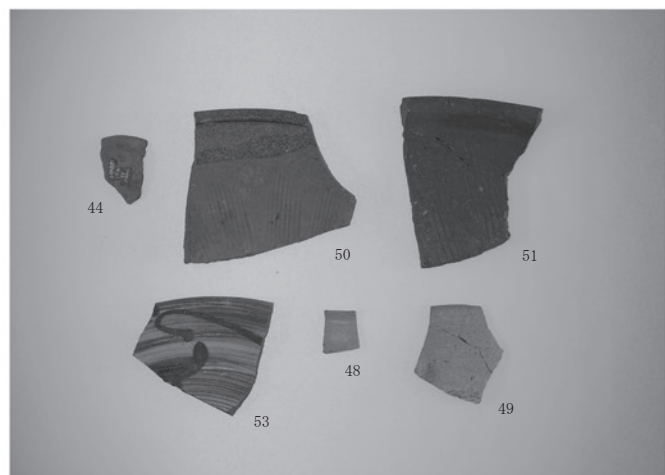
4号土坑 43



4号土坑 34



4号土坑 42



5号土坑



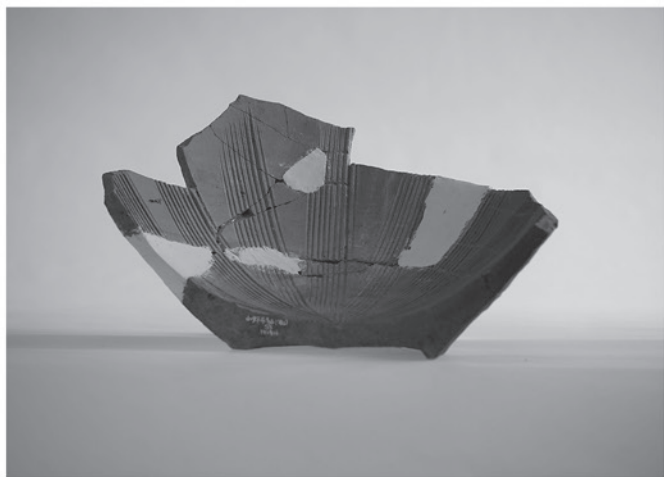
5号土坑 45



5号土坑 46



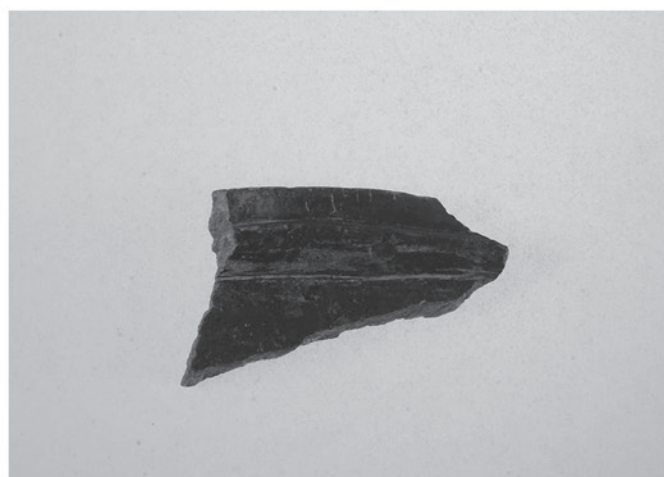
5号土坑 47



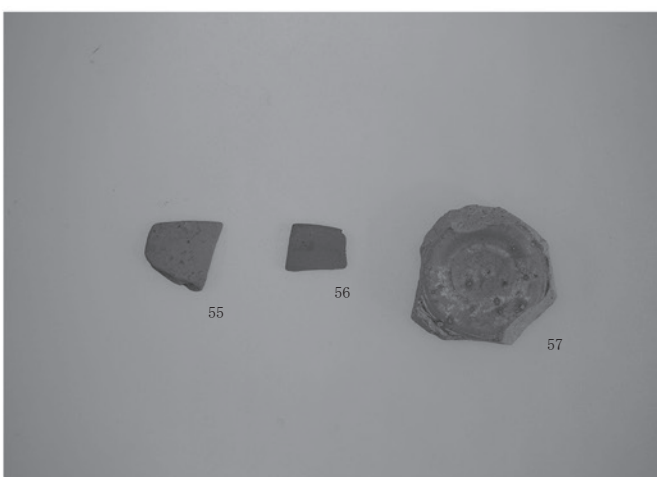
5号土坑 52内面



5号土坑 52外面



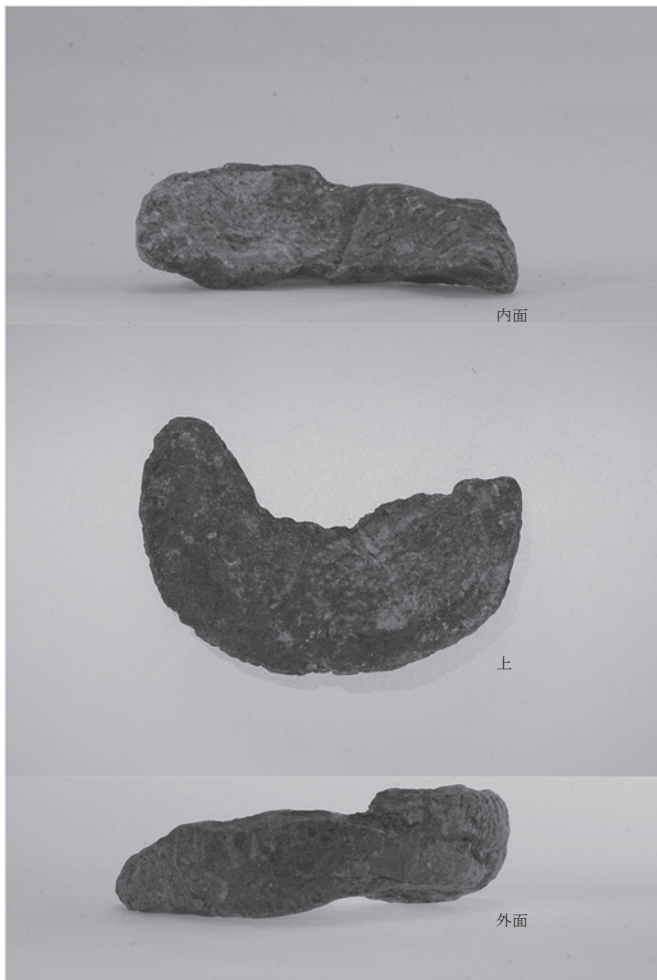
5号土坑 54



12号土坑



14号土坑 58

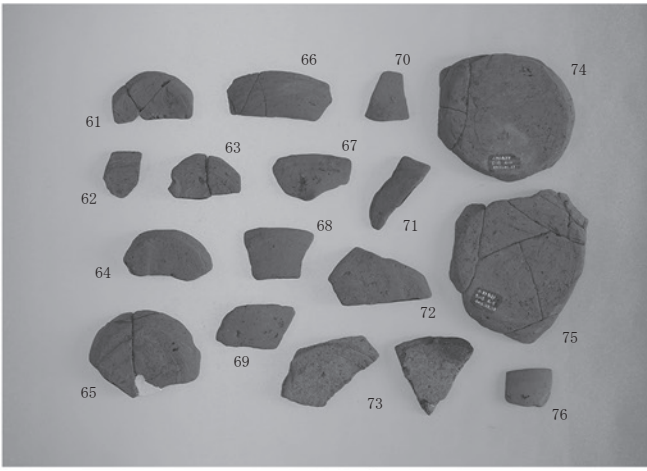


14号土坑 60

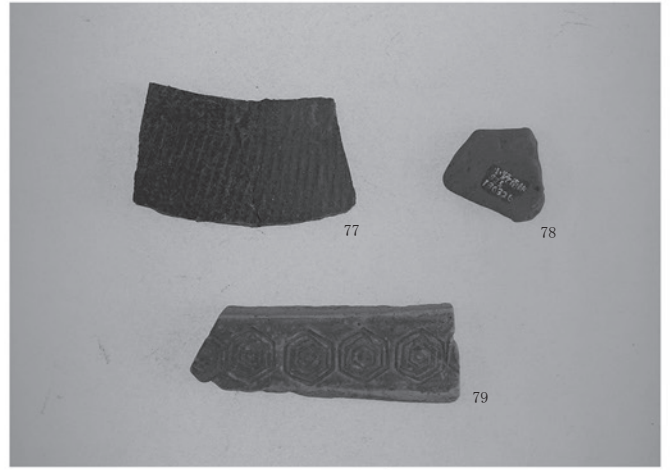


14号土坑 59

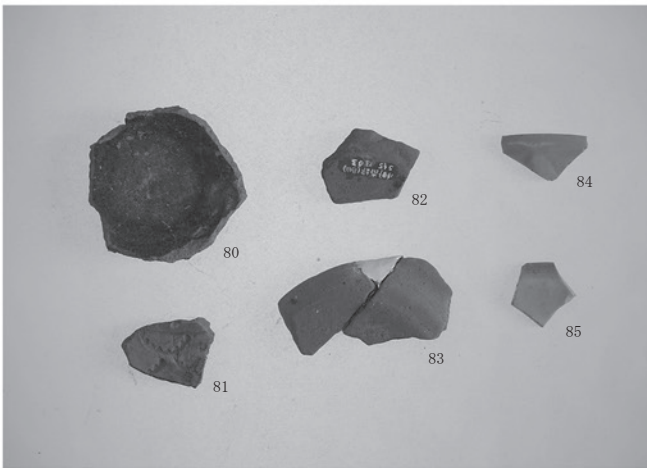
图版 23



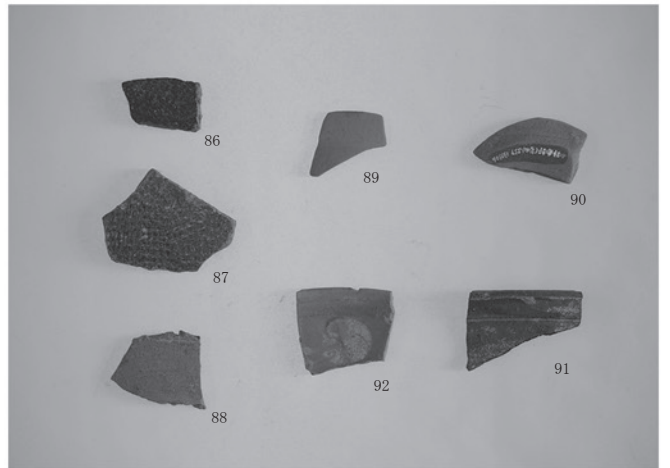
15号土坑



25号土坑



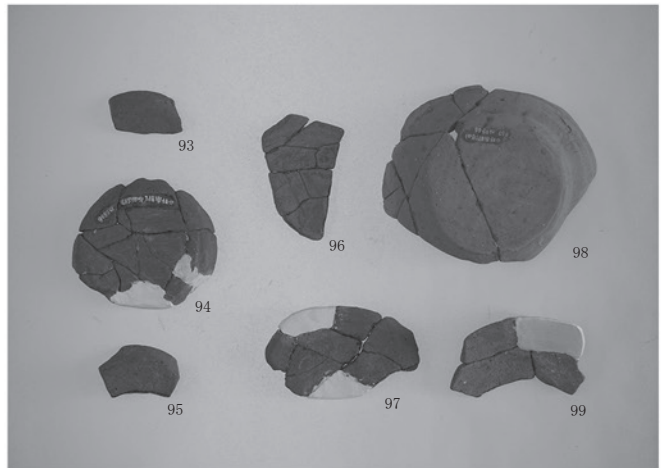
41号・43号・45号土坑



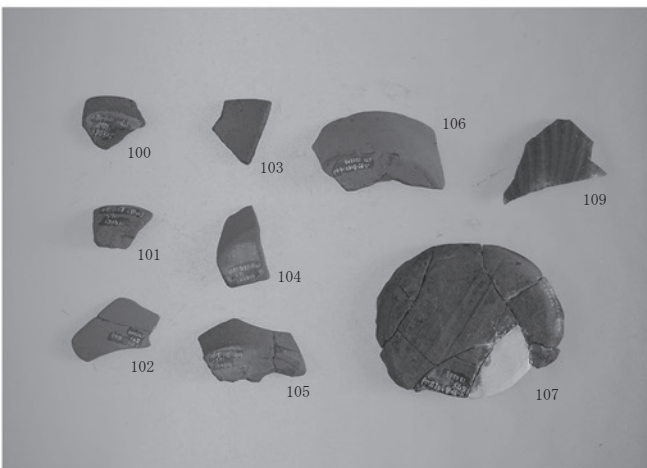
53号・54号・57号土坑



58号土坑



67号土坑



71号・75号・78号土坑



ピット出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふなばるこふん							
書名	船原古墳Ⅲ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	古賀市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第77集							
編著者名	甲斐孝司 西幸子							
編集機関	古賀市教育委員会							
所在地	〒811-3192 福岡県古賀市駅東1丁目1番1号							
発行年月日	西暦 2022年 3月 31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
船原古墳群	福岡県古賀市谷山 字柳原 1166-1 他	40347		33 42 51	130 30 09	平成 25 年 4 月 1 日 ～ 令和 4 年 3 月 31 日	4,400	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
船原古墳群	古墳	古墳	古墳 2 基 土坑		素環状鏡板付轡、方形鉄器、 円形鉄器、鉄鏃、磁器、青磁、 白磁、陶器、土師器、瓦質土器、 石鍋			

※ 緯度、経度は世界測地系による。

船原古墳Ⅲ

福岡県古賀市文化財調査報告書 第77集

2022（令和4）年3月31日

発行 福岡県古賀市教育委員会
福岡県古賀市駅東1丁目1番1号

印刷 有限会社 システム・レコ
福岡県古賀市今の庄3丁目13番1号